

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数八枚）の記載あり」

目録

参考 阿部正桓家記二

一四四 参考 阿部正桓家記二

一四四の二
安政二年乙卯

正月三日、筒井肥前守・川路左衛門尉伊豆ヨリ帰府、翌朝登營、老中列座、其魯人ト応接始末ヲ演舌シ、且曰、官吏一条誠ニ彼ノ求ル所ヲ抑沮スヘシト、談論数回ニ及フト雖トモ、此ヲ許サ、レハ、然レハ彼ヲト我カ決シテ許

シカタキ者ヲ望ムニ至ル、且亜米利加条約既ニ右ノ如クナル、故ニ迎モ防キ得ヘカラサル事ト申合セリト、正弘曰、亜米利加ノ約語ハ猶曖昧ニシテ、他日談判抑沮スヘキノ余地アラサヤ、左衛門尉曰、語ハ曖昧ナレトモ彼ノ意ハ決セサル故ニ、他日ノ談判恐ラクハ取戻シ難カルヘシ、然レトモ何レニモ幕旨如此ニアラセラレハ、届カヌ迄モ今一応往テ談判仕ルヘシ、正弘曰、何分必ス取戻スヘシ、魯ヲ取戻セハ、他日亜ノ取戻シ容易ナルヘシ、同月七日下田ニ滞泊セル亜米利加使節船退帆ス、彼レ大統領ノ鈴印ヲ持参セル故ニ、江戸大君ノ鈴印ヲ得ヘクト申出タレトモ、我ハ老中ノ鈴印ニ非サレハ渡シ得サル旨談判セシニ、然レハ大君ノ命ニ因テト云文ヲ加ヘ給ルヘシト云ニ任セ、ソレニテ本条約ヲ更換成就シテ去ル、

一四四の二
同月十八日、左ノ書付向々ヘ正弘ヨリ渡ス、

川路左衛門尉

水野筑後守

岩瀬修理ヘ

魯西亜・亜米利加共、条約為取替相濟候ニ付テハ、此後之処、下田表取締向第一緊要ノ事ニ候、此上ハ不絶

異船モ参リ可申、遊村等ノ節、当時支配手足リ不申処〔向脱カ〕

ヨリ、品々不締ノ事モ有之哉ニ相聞候、此上ハ万一奸

商・愚民等彼方所行ノ小利ヲ貪リ、夷情ニ浸潤致候様

相成候テハ、後來ノ御国患御為甚不可然事ニ候、尤

下田表御取締筋之義、此程尚又下田奉行へ相達置候趣

モ有之候得共、今般ハ全ク起立ノ義モ有之、同所御取

締之敵寛ハ、実ニ国家治乱ノ岐路ニ候間、改テ其方共

へ御委任被成候間、篤ト申談、早々彼地へモ罷越、下

田奉行へモ万端聊無服藏遂示談、速ニ彼地御取締、永

世ノ規則敵重相立候様可被取計候、尤彼地へ罷越御取

締被取計節ハ一々伺ニ不及、御為筋ト見込候上ハ、相

談ノ上速ニ夫々取計可被申候事、

下田奉行へ

右同文

右之通相達候間、得其意、其方共ニハ、鎮台之儀別テ

奮発御取締相立候様、万端御委任被成候間、左衛門尉・

筑後守・修理へモ聊無伏臆申談、速ニ永世ノ規則敵重

相立候様、可被取計候事、

〔大日本古文书〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

一四四の三

左衛門尉

筑後守 江別段達

修理

此度下田へ被相越候御用之節、魯西亜官吏ノ儀、彼方へ

申談、何レモ官吏ハ不差置候様、精々厚ク可被申諭、委

細之儀ハ猶口上ニテ可申聞候事、〔一四四の二と同時達〕

一四四の四

同月廿一日、左之書付大小目付へ正弘ヨリ渡ス、

此度勢州海岸并大坂近海為見分、御勘定奉行石河土佐

守始役々被差遣候付テハ、国々地震・津浪ニテ、人民

窮苦致居候折柄ニ付、仕来ニ不泥、万端格別手輕ニ致

シ、村々ニ於テモ無益ノ失費不相掛候様、道橋修覆・

休泊旅宿取繕ヒ一切無之、有来之通ニ致シ置、使者道

固音物等決テ致間敷候、

但道橋・休泊旅宿如何体不行届有之共不苦候間、取

繕ケ間敷儀ハ勿論、農業ノ障ニ不相成様、触外之

人馬等差出候儀、堅致間敷儀、

右之通早々向々へ可被達候、

〔正月〕

〔大日本古文书〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

一四四の五

二月五日、築地講武所新建ニ因テ、留守居跡部甲斐守・

〔正典〕

土岐丹波守・大番頭久貝因幡守初八人ニ総裁ヲ任シ、使番鶴殿十郎左衛門初三人ニ頭取ヲ任ス、右ハ槍劍砲三術ノ引立、併テ深川越中島鍊兵場ノ世話ヲ総ヘシム、

同月十二日、川路左衛門尉・水野筑後守・岩瀬修理下田ヘ発程、右ハ去月十八日、正弘三人ヘ申渡ス旨ヲ以テナリ、既ニ三人伊豆ヘ至リ、戸田村ニ於テ魯西亜使節布恬廷ニ応接シ、官吏ヲ差越ス条約取戻シ一条、左衛門尉反覆討論セシニ、彼何分承知セス、亜米利加ヨリ官吏差越ス事ナレハ、格別亜ヨリ差越セハ、魯ヨリモ差越スハ当然ナルヘシ、但亜ヨリ差越サ、ル内ニ差越シ、且日本人ニ熟談セシメ、魯ヨリ不意ニ押付テ、差越ス等ノ事ハ致スマシクト答ヘ、其証書ヲハ致セリ、尚帰府ノ上ニテ、陳白スヘキ旨ヲ政府ヘ申越ス、

一四四の六
右布恬廷ヨリ出ス証書和解、左ノ通、

川路左衛門尉様へ

御前様ヨリ御沙汰ノ次第ヲ勘考致シ、貴国政府ノ不満ニテ、御前様之御迷惑ヲ欲セスシテ、私事本國政府ニ得ト示談致シ、魯西亜官吏下田或ハ箱館渡来以前ニ一人差越、日本政府ヨリ官吏差置方ニ付、委任

〔ニカ〕

ノ人々談判致スヘシ、若シ日本ニ於テ、其時迄未タ外国ノ官吏ヲ差置サルナレハナリ、

右ニ付、私ノ職務ヲ申述ヘテ、私ヨリシントベトル

スブルクニ、差贈リタル条約ハ、双方ニ於テ堅ク守

リ変スル事ナシ、兩國政府ノ熟談ナキニ於テハナリ、

私事御前様ヘ恭敬ヲ尽スヘシ、

本文斯ノ如シ、

曆数千八百五十五年魯三月三十日閏四月十一日戸田ニ於テ、

右之通和解仕候、以上、

卯二月二十五日 御普請役森山多吉郎

〔大日本支書幕末外國關係文書にて校訂〕

一四四の七
三月三日、前日梵鐘ヲ銷テ鉄炮ヲ鑄ルヘキ旨

勅命ノ条、所司代脇坂淡路守ヨリ幕府ヘ伝達シ来ル、因

テ今日營中ニ於テ、諸藩主ヘ正弘ヨリ幕旨ヲ申達スル、

左ノ如シ、

海岸防禦ノ為、此度諸国寺院之梵鐘、本寺ノ外古来

之名器及当節時ノ鐘ニ相用候分相除、其余可鑄換大

砲・小銃之旨、從京都被 仰出候、海防之義專ラ御

世話有之候折柄、

歎慮之趣、深ク 御感戴被遊候事ニ候間、一同厚相

心得、海防筋之儀亦可相勸旨被仰出候、尤右之趣諸寺院へハ、寺社奉行ヨリ申渡候間、被得其意、取計方等委細之儀へ、追テ可相達候、

〔三月〕

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

同日、左ノ書付大小目付へ正弘ヨリ渡ス、

海岸防禦ノ為、此度諸国寺院梵鐘ヲ以、可鑄換大砲・

小銃之旨被 仰出候、右ハ武備御充実之御趣意ニ候

間、此外銅・鉄ハ勿論、錫・鉛・硝石等、何レモ必

備之品ニ付、右等ニテ無之候テ相濟候品ヲ、右類ニ

テ相製候義、自今不相成事ニ候、且又梵鐘ヲ以鑄換

被 仰出候程之儀ニ付、銅・鉄ヲ以新規ニ仏像等鑄

造致候儀不相成候、仏器之儀モ、木製又ハ陶器等ニ

テモ相濟候分ハ、已來銅・鉄類ヲ以製造之儀可為無

用候、右之通可相觸候、

〔三月〕

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

同日、左之書付箱館奉行堀織部正へ正弘ヨリ渡ス、

松前伊豆守へハ、公用人ヲ以テ其家來江渡サシム、

此度御用ニ付、上知被仰付候、東西蝦夷地西在乙部

村東西木古内村迄、島々共一円、箱館奉行江預ケ候被 仰付候間、松前伊豆守へ相達シ、請取候様可被致候、委細之儀ハ御勘定奉行可被談候、

右ハ堀織部正・村垣與三郎、客歲蝦夷地ヲ巡視シ還リ、

献白スル旨、逐一時宜ニ適シ、幕議決定遂ニ是ニ及フ

ナリ、

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

同日、川路左衛門尉・水野筑後守・岩瀬修理へ左

ノ通正弘ヨリ達ス、

魯西亞使節へ応接致候件々、此度出府ノ上、銘々見

込之趣被申聞候次第、尤ノ趣意ニ相聞、往々之処深

ク懸念致候得共、以後之処、別テ御国内御取締之儀

ハ猶更嚴重相成候様相心得、追々見込ノ儀モ可被申

聞候、今般応接之処へ、最前何書へ及差図候通相心

得、早々発足処置可被致候、尤下田表御取締之儀へ、

聊手抜無之、後々ノ禍胎ニ不相成様、猶深ク勘弁可

被取計、余ハ口上ニテモ申聞候事、

同日、露西亞使節布恬廷、戸田村ニテ新造セル船

ニテ出帆帰国ス、是ヨリ前二月廿五日、亞米利加船ヲ雇

と帰り去ル者百五十人、今日布恬廷同船帰去者七十人許、
而シテ二百七十計未タ戸田ニ残り、五月ニ至リ尽ク去ル、

一四四の二
同月廿七日、左之書付正弘ヨリ達ス、

〔箱館奉行江〕

〔伊達慶邦、仙合藩主〕
松平陸奥守

〔村カ〕
名代田代右京大夫

此度東西蝦夷地西在乙部村・東在木古内村迄、島々
共一円上知被 仰出、向後箱館奉行御預処ニ被 仰
付候ニ付、其方儀、蝦夷地之警固被 仰付候、佐竹
右京大夫モ被 仰付候間、諸事可被申合候、〔且又津〕
輕越中守・南部美濃守儀ハ、兼テ被 仰付置候条、是又可被
申合候、尤箱館表松前地御警衛向ヲモ可被相心得候、
委細之儀ハ、箱館奉行へ可被談候、
〔義聰、久保田藩主〕
佐竹右京大夫

同文言、松平陸奥守モ被仰付候間、諸事可被申合候

〔以下、大日本古文書にて補〕

松平陸奥守

蝦夷地へ勤番人数差渡置候様可被致候、人数高場所等委細
之儀ハ、箱館奉行可被談候、

佐竹右京大夫

〔偏孝、弘前藩主〕
津輕越中守

同文言、

此度東西蝦夷地西在乙部村・東在木古内村迄、島々共一円
上知被 仰出、向後箱館奉行御預所ニ被 仰付候ニ付、勤
番人数蝦夷地江差渡置候様可被致候、南部美濃守江モ相達
候条、可被得其意候、且又松平陸奥守・佐竹右京大夫義モ
今度蝦夷地之警衛被 仰付、箱館表松前地御警衛向ヲモ相
心得、勤番人数差渡置候様相達候間、諸事可被申合候、尤
人数高場所等委細之儀ハ、箱館奉行可被談候、
〔前剛、盛岡藩主〕
南部美濃守

同文言、

津輕越中守江モ相達候条、

〔松広、松前福山藩主〕
松前伊豆守

松平陸奥守・佐竹右京大夫儀、今度蝦夷地之警固被 仰付、
箱館表松前地御警衛向ヲモ相心得候様相達候間、可被得其
意候、

右之通相達候間、被得其意、警固被 仰付候面々、勤番人
数高場所割等、早々取調可被相同候、
〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて補正〕

一四四の一三
五月十三日、左ノ書付京都御普請御用掛勘定奉行石河土

佐守へ正弘ヨリ渡ス、

石川土佐守

〔長柄、京都町奉行〕
浅野中務少輔

立田岩太郎

禁裡御造營、追々御出来相成候御模様ニ相聞、何レモ出精ノ趣一段ノ事ニ候、右ニ付、当冬中ニハ新内裏へ遷幸被遊度被 思食候由、御内々御沙汰モ有之候御事ニ候間、猶此上一際精ヲ入、当七八月迄ニハ急度御成功ニ相成候様、何レモ力ヲ尽シ可被取計候、右之趣末々ノ者共へモ篤ト申渡、御抄取相成候様可被致候事、

一四四の一四

〔條記〕

七月朔日、左ノ通長崎奉行川村對馬守へ正弘ヨリ申渡ス、

今度阿蘭陀蒸氣船献上ノ儀ハ、国王格別之心入ニ付、

其段早速達 御聴候処、不洩御満足之御事ニ候、其方出立ニ付、不取敢右之趣被 仰出候間、彼地着之上、在留加比丹并渡来之船將へ可申聞候事、

右ハ今般蘭ヨリ軍艦ヲ献進セシ事アリ、而シテ對馬守近日鎮所ニ赴クニ付テナリ、

一四四の一五

同月廿八日、左ノ通書付ヲ以、 禁裏附都筑駿河守へ正

弘ヨリ達ス、

魯西亜・英吉利・亜墨利加等御処置之品、追々所司

代へ申遣置候儀ニハ候得共、書状ニテハ難尽意味モ

有之、兼々

御所向ニライテ 御心配被遊候赴ニ付、其方ニハ先

役之節、取扱候品モ有之、異国之事情ヲモ相弁居候

事ニ候間、上京之上所司代へ篤ト申達、達

叡聞可然事共ハ、事実能々相分、時勢無御抛訳柄等、

関白殿へ直談有之候様致度、時宜次第、其方儀所司

代同道ニテ被罷出候ハ、可然哉ト存候、仍テ右三

ヶ国差遣候条約書写相渡候間、持参致シ、所司代へ

申談、御都合宜様可被取計候事、

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

一四四の一六

同月廿九日、左ノ通長崎在勤之目付永井岩之丞へ達スル

書付、目付大久保左近將監へ正弘ヨリ渡ス、此外徒目付

永持亨次郎同シク長崎ニ在テ、航海術伝習人ヲ取扱ハシ

ムヘキ書付同様相渡シ、小普請勝麟太郎小十人矢田堀景

藏ヲ伝習ニ遣ハス旨、夫々支配頭へ達シ、此余追々伝習

人遣ハス故ニ、夫々取計フヘキ旨長崎奉行へ達ス、

永井岩之丞

船軍御創制ハ、不容易大業ニ候処、今般阿蘭陀獻貢之蒸氣船ヲ以、運用其外伝習方之儀ハ、彼国王ニ於テ格別之心入ニ有之、悉ク伝習研究致度、就テハ其方儀暫之在勤太儀ニハ候得共、交代相濟候ハ、猶此上滞留罷在、右運用其外為伝習被遣候者共之指揮且掛引等、都テハ進退取縮方引請取扱可申、右ニ付旅宿船中止宿代リ合取締筋等、長崎奉行へ相達候儀モ有之間、得ト申談取計候様可被致候、尤伝習行届差支モ無之様相成候ハ、自然右船浦賀表江相廻候様ニモ可相成坎、伝習熟達之模様ニ寄、猶其節長崎奉行申談伺越候様可被致候、

〔大日本古文書(幕末外国關係文書)にて校訂〕

一四四の一七
八月四日、老中松平和泉守・松平伊賀守謝病免職、

一四四の一八
同月七日、左ノ書付大小目付へ、正弘并遠藤但馬守ヨリ渡ス、

御政務之儀、

御代々様之

思召ヲ被為繼、毎々御世話被為在候得共、年久敷昌

平之化ニ浴シ、人心兎角外見虚飾ニ相流レ、万端御手重ニ成行、無益之手数ノミ相増、御実備之処、往々御安心不被遊、殊ニ近来諸夷引続入津致シ、夫々御処置ノ品モ有之候得共、後來別テ非常之御手当肝要之儀ニ付、比度諸事格別簡易之御制度ニ被為復、総テ無益之旧習手重之古格ヲ被為省、質直之士風ニ相成候様、被遊度トノ思召ニ〔脱カ〕付、追々被仰出候品モ可有之候、因テハ一同右之思召ニ〕基キ、万端厚ク申合、聊等閑之心得無之様、精々可被励忠勤候、右之通、向々へ不洩様可被相触候

〔八月〕

〔大日本古文書(幕末外国關係文書)にて補正〕

一四四の一九
同月十三日、正弘大小目付へ申渡シ、万石以上以下へ是迄之外国ト更換条約書ノ写ヲ、悉ク布示セシム、

一四四の二〇
同日、左ノ書付向々へ久世大和守ヨリ達ス、亞米利加船ヨリ測量乞フ書翰モ左ニ附ス、

○この文書前半部の老中達は第五〇号文書の一、後半部の米國水師提督ロツジャース書翰は第二四一号文書と同文により略す。

一四四の二一
同月十四日、左ノ通、水戸前中納言へ正弘ヨリ達ス、

〔水戸前中納言殿〕

岩瀬修理

海岸防禦筋并御軍制御改正等之儀ニ付、近頃ハ月々

二丸御留守居

三度御登城被有之候処、此度御政務筋之儀ニ付、改

古賀謹一郎

テ被仰出之赴モ有之、就テハ彼是御相談之儀モ可有

之候間、御老体之儀、御苦勞ニハ被思召候得共、

以後ハ隔日御登城被成候様被仰出候、

〔右之通被仰出候間、可被得其意候〕
〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

一四四の二三

〔同日〕 別段達シ〔正弘ヨリ水戸齊昭〕

此度繁々御登城之儀被仰出候ニ付テハ、何角御用途

モ可有之ト被思召候ニ付、別段米五千俵年々被遣候

旨被 仰出候事、

右前中納言幕旨ハ領受シ、禄ハ一昨年来既ニ年々五千

俵宛給ハリ、今又更ニ五千俵ノ賜ハ、心ニ安ンセスト

固辭シ、遂ニ領受セス、

一四四の二三
八月晦日、左ノ通夫々へ正弘ヨリ達ス、

筒井肥前守

川路左衛門尉

水野筑後守

江

右ハ、洋學所頭取被仰付、同処御用筋諸事引請可相
勤旨申渡候間、向後謹一郎ハ主ニ相成、其方共ハ、
立合之心得ヲ以万端申談、速ニ新規御用立候者、多
人数出来候様世話可被致、且又出役候者モ、諸事謹
一郎指揮ニ随ヒ相勤候様可被申渡候、

古賀謹一郎

洋學所御用向諸事引請被仰付候ニ付テハ、出役之者
共ヲモ致指揮、後進之者追々相増、御用立候者多人
数出来致候様可被心得候、尤同処御用筋之義、向後
筒井肥前守・川路左衛門尉・水野筑後守・岩瀬修理
ハ立合之心得ニ罷在、其方儀ハ主職ニ相成、教導方
其外専ラ世話致シ、右之面々申談、一ト通之儀ハ一
存ニテ、老中・若年寄へ申聞候様可被致候、

一御用之節ハ出来間迄可被相越候、当番ハ被成御免候、

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

一四四の二四
九月廿七日、左之書付大小目付へ正弘ヨリ渡ス、

〔晦日魁〕

諸国寺院ニ有之候梵鐘之儀、本寺并古来之名器・当節時之鐘ニ相用候分相除、其余ハ不残大砲小銃ニ可鑄換旨、先達テ

御慮ヲ以被 仰出候、一体梵鐘之儀、其寺々之法器ニ候得ハ、容易ニ御沙汰可有之品ニ無之候得共、近來諸夷引続入津致シ、武備專要之御時節、大砲小銃共急務之品ニテ、御国備御堅固ニ被成置度格別之御慮モ有之、被 仰出候事ニ候条、寺院ハ勿論、大小之檀越寄進之輩ニ至ル迄、厚ク御趣意之程相弁、法用之儀ハ在来之半鐘又ハ盤木・太鼓等相用、本寺并名器、当節相用候時之鐘之外撞鐘之分ハ、一同公儀ヘ可差上候、勿論万石以上領内之分ハ、其処之領主ヘ被下、領主ニテ鑄換、万石以下知行并御代官・領主・地頭ヘ附属ニ無之寺院其寺社領之分共、御料所寺院一同公儀ニ於テ鑄換被 仰付候間、御府内ハ寺社奉行、其余ハ最寄遠国奉行・御代官・御預所領主ニテ、寺院本末并梵鐘有無名器時之鐘之訳等糺之上取計、尤時宜ニ寄、檀家惣代之者呼出候儀モ可有之候、

一 万石以下知行之分モ、自分ニテ鑄換之儀相願候ハ、

其通ニモ可被仰付候間、早々願書可被差出候、

但自分ニテ鑄換被仰付候ハ、公儀ニテ御構無之

候間、万石以上之振合ニ准シ、知行処寺院一手

ニ取計候儀ト可心得候、

右之通被仰出候間、可被得其意候、尤諸寺院ヘハ寺

社奉行ヨリ申談候間、本末取調其外取計方之儀ハ、

安藤長門守ニ承合可被取計候、

右之趣、向々ヘ不洩様可被相触候、

〔九月〕

〔大日本臣文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

一四四の二五
同月廿八日、左ノ書付大小目付ヘ正弘ヨリ渡ス、
〔毎日誌〕

武備之儀ニ付テハ、追々被 仰出モ有之候処、銘々厚ク心掛候哉ニ相聞、行軍馬揃等ニ罷出候面々ハ、別テ嗜之程モ相見ヘ、一段之事ニ候、此上共聊以油断無之、武備充実ニ相整候様可被致候、依テハ去々丑年万石以下之面々ヘ被

仰付拜借金、出格之 思召ヲ以不及返納候旨被 仰

出候、一体近年打続御用途モ莫大之折柄、右様之御

沙汰有之候ハ、実以不容易儀ニ候間、面々モ質素節

儉格別ニ相用、無益之名聞等ニ不拘、非常之手当專

要タルヘク候、方今西洋大小砲ハ輕便之利器ニ付、厚ク御世話モ有之事ニ候間、小筒又ハ大砲等、是迄未用意無之向モ、追々分限ニ応シ可相嗜候、且又打方等修業候者ハ、其業熟達候様益致勉勵、御趣意之趣遣失無之様可被心掛候、

右之通万石以下之面々江可被相触候、

〔九月〕

〔大日本古文書 幕末外國關係文書にて校訂〕

^{一四四の二六}十月二日夜地震、幕府城郭往々破潰シ、諸侯邸第震災ニ罹ル者太タ多シ、正弘龍口邸破潰シ、居ヲ本郷丸山下邸ニ徙ス旨、月番久世大和守ヘ達ス、

同月九日、溜詰格堀田備中守閣老再勤、勝手掛ヲ兼掌、

^{一四四の二七}同月十四日、左ノ書付大小目付ヘ正弘ヨリ渡ス、^{〔平七日替〕}

五百石以下

御目見以上以下

同惣領次三男厄介

清水附之者

浪人

百姓町人

右ハ、今般蝦夷地一体上知被 仰付候ニ付、御旗本・

御家人之内、風寒暑湿ヲ不厭、山野ヲ跋涉シ、筋体ヲ

固メ、文武之修諫心掛候者共相願候ハ、元身分ニ

応シ、在住被 仰付候間、名前取調早々可申聞候、

且万石以上以下之家来、主人見込之者モ有之候ハ、

申立次第是又可被差遣候間、書面之者共、何レモ荒

地開發・野馬牛牧養ヲ始メトシテ、食料・薬用ニ可

充生類育方・金銀銅鉄鉛山問堀・巨材薪柴伐出・草

木類植付・石炭堀取・器具製作・採業・鯨猟、何レ

ニ不依生産ニ相成候類、并濠附等之場所ヘ休泊所・

茶店等取建立度存込候者ハ、任望被差遣候、尤其品

々応シ、御手当ヲモ可被下候、猶又 御国益ニモ相

成、格別出精之廉頭候者ハ、篤ト事実相糺、士人ハ

身分御取立、農工商之輩ハ地処・家宅等相渡、其上

御賞賜御手当等モ有之候条、右之趣相心得、有志之

者ハ其筋迄可願出候、猶委細之儀ハ、箱館奉行ヘ可

承合候、

右之趣被 ^{〔趣カ〕} 仰出候間、末々迄不洩候様可被相触候、

〔十月〕

〔大日本古文書 幕末外國關係文書にて校訂〕

十一月初七日、左之通大目付柳生播磨守へ正弘ヨリ渡ス、
一四四の二八

御政務筋之儀ニ付、此度改テ被仰出候^(趣)赴モ有之、御
手元ヨリ万端格別御儉素御用被遊候、就テハ金銀之
御道具類、御武器其外無御抛御品之外ハ御用ヒ不被
遊候、

御宮御靈屋御殿向御莊嚴、其外御重器ニ至迄、向後
金銀具・金箔・金泥之類モ、御遣方御省略被遊候ニ
付、万石以上以下共、自今以後無益之骫物等ニ金銀
具相用候義不相成候、武器之義ハ、夫々分限ニ応シ
相嗜可申ハ勿論之義ニ候得共、是迎モ無益之飾ハ已
来可成丈省略致候様心掛、神社仏閣之莊嚴・神器・
仏具之類モ、新規出来之品ハ金銀具無用、有来候分
ハ修復之節ニ至リ外品ニ遣換、金箔・金泥遣候品々
モ右ニ准シ、武器之外ハ新規出来之儀省略、惣テ可
成丈質素ニ相成候様可心掛旨被仰出候、
右之赴向々江可被相觸候、

一四四の二九
同月二十八日、左之書付大小目付へ正弘并遠藤但馬守ヨ
リ渡ス、

金銀具之儀ニ付テハ、前々相觸候赴モ有之候処、近

来又々金銀具用候儀猥ニ相聞、不埒之事ニ候、公義
ニ於テモ、金銀具御用之儀格別御減之、武家一統へ
モ、此度猶又減省之儀被仰出候間、其余之者ハ猥ニ
金銀具用候儀不相成候、神社仏閣之莊嚴・神器・仏
具之類、屏風・襖等猥ニ金箔類用ヒ、新規出来之儀
不相成候、有来候分ハ、修復之節外品ニ換へ、其外
梨子地・高蒔絵・金糸之類モ、格別大造成ハ同前タ
ルヘク候、自今以後、無抛金銀之品用ヒ候分ハ、奉
行所へ伺差図可請候、武家誂之分モ、武器之外無益
ノ骫物金銀用ヒ候品ハ、新規出来之儀不相成候、右
之赴急度可相守候、
右之趣、御料・私領・寺社領共、不洩候様可被相觸
候、

近來外夷度々渡来ニ付テハ、為守衛御府内人別多ニ
相成、ヲノツカラ失費モ相増候段ハ、無抛筋ニ候、
然処入費モ相増窮迫ニ陥リ、尚又可為難儀、殊ニ此
処不慮之死亡又ハ怪我人等モ不少哉ニ相聞、何共歎
敷次第ニ候、畢竟夫等モ中古ニ見合候へハ、追々御
府内人数多ニ相成候事ニ付、諸家屋敷ニテモ、家作
等建詰候様ニ相成候故、尚更非常之災害遁兼候者モ

夥敷儀ニ有之、一体近来諸藩困窮之上、右様之儀相
加り、殊ニ外夷差湊候折柄、当節之処ニテハ御府内
老幼之男女子人別、減省有之度ニ付、万石以上隠居
并厄介之男女等在所勝手ニモ可被仰出候処、先ツ此
節ハ不被及御沙汰候ニ付、向後家作ハ勿論、年中之
暮方等迄モ、銘々家之仕来ニ不拘、万端手輕ニ取賄、
聊外見ヲ不厭、質素省略ヲ相用可被申候、尤右之赴
等閑ニ相心得候向有之候ハ、急度御沙汰可被及候
事、

但本文之通相達候ニ付テハ、隠居并厄介之男子等
在所へ遣置度向ハ、夫々相伺候様可被致候事、
一万石以上家来之儀、前文人別減少之御趣意ヲ以、追
々定府相減候様可被致候、尤領分之遠近、其家々之
都合モ可有之事故、銘々勝手次第之事ニ候得共、可
成丈御趣意相立候様可被心得候事、

十一月

^{一四四の三〇}
十二月四日、禁裏御所方御造営出来、正弘義最初ヨリ万
端心ヲ尽シ、申付ケ、精入骨折トノ將軍家褒詞ニテ、手
自佩刀ヲ給、

^{一四四の三一}
同日、左之書付箱館奉行堀織部正へ正弘ヨリ渡ス、

近来諸事格別ニ御省略被為在候得共、年々莫大之御
入費相続、御勝手向御練合モ不宜候処、箱館ヲ初メ
蝦夷地之御入用、私領中ニ引競候へハ格別相増、殊
ニ此度松前伊豆守へ為替地高三万石、外ニ為御手当
年々金壹万八千兩宛被下候ニ付テハ、差向御料^所御
收納モ相減シ、御手当金ハ年々御出方増ニ相成候義
ニ付、右等之償方何レ別段之御処置無之テハ難相成、
然処蝦夷地之儀ハ、兼々厚ク見込モ有之候事ニ候得
共、尚此上弥以心力ヲ尽シ、御開拓被為行届、彼地
御收納ヲ以、諸般之御用途ニ被宛候様相成候ハ、
後來迄

御安心可被遊候事ニ候間、御開拓之御趣意精々厚相
心得、可被取計候事、
〔大日本古文书 幕末外國關係文書にて校訂〕

^{一四四の三二}
同月廿七日、正弘義平生精勤、勝手向之儀ハ別段心勞骨
折、其上 禁裏御所方造営落成、殊ニ宮殿結構、旧ニ比
スレハ一層ノ宏壮ヲ増シ、幕府ヨリ
天朝ヲ尊崇アル意ニ叶ヒ、將軍家満悦ノ旨褒詞アリテ既

馬一匹ヲ給フ、

目錄

参考 井地要略

一四五 参考 井地要略

肥藩 牧野安右衛門著述

一四五の一
地方之事

御藏納

本方ト唱申候、新古御座候、御先代ヨリノハ古御藏納
ニテ、寛永九壬申年以來ノハ新御藏納、

御給地

名目ノ通、御給人へ御配方ノ地方ニテ御座候、

上知

御配分ノ御知行被召上、本方ニ加ハリ申ヲ上知ト唱へ
申候、本方同然ノ取扱ニ成申候、新地方ニ対シ申時ハ、
御給地モ上知モ都テ本方ト申候、

新地

寛永年中マテ荒居申候地方ヲ、承応・明暦・寛文ノ比
専ラ開明、本方ノ如ク高物成定リ、御年貢ヲ納申候、

永荒開

古来ハ、本方ノ内ノ地方ニテ御座候ヲ、前々洪水・地
震等ノ節荒地ニ成候ヲ、明暦・正保・寛文ノ比開之、
新地ト同前ニ高物成定リ、御年貢納申候、

御郡間新地

海辺ヲ築出シ、又ハ畝物開ニ高物成定リ、貞享以來追
々出来ノ新地ニテ御座候、

出高

本方ノ内、畑方水懸宜所ニ田ヲ作り候ヲ、延寶年中ニ
御國中御吟味被成、地床ハ本方ニ在リナカラ、田ヲ作
リ出来増分ノ積ヲ以テ、新地同前ニ御年貢納申候、

畝物

空地、マタハ海辺・入江・井手・畔杯開作り申候、高物成
ハ無之、畝懸ノ御年貢ヲ納申候、居畝物上開等御赦免、

開

御侍衆手開作り取之地方ニテ御座候、

山畝

本方ノ内ニモ新地方内ニモ有之候、里畑ト違ヒ地味勿
論アシク、畝広ニ御座候哉、切替畑ト申テ五七年ツ、
荒シ置、又外ノ処ヲ作り替申様成事モ御座候、

野開

年々定リノ運上銀ヲ以テ、御年貢ニ仕候、河原開モ同前ニ御座候、

空地

堂・床・社・塘・堤・井手・池・森・藪等、多クハ空地御座候、

塩浜

高物成定リ、新地方同前ノ取扱ニテ、年々御土面ヲ以テ御年貢相納申候、

地子御赦免地

寺社町方

往還町筋

其所々ニ受持ノ下場有之、損シ候節ハ修覆ヲ加ヘ申候、橋・井・樋等同前、

山川海島

何レモ境極リ居、夫々支配方御座候、廻船往来等ノ事、諸漁運上材木等色々御座候、

右ハ在中取扱ニ成申候、地方大概名目計ヲ書付、掛御目申候、

巻歩

田畑共ニ、六尺三寸ノ竿ニテ、一間四方一坪ノ事ニテ御座候、屋敷竿ハ六尺五寸ヲ用申候也、御國中惣体ノ竿ハ六尺五寸ヲ御用候也、

巻畝

三十歩ナリ、往古三十六歩ヲ以テ一畝ト定メ候事モ之レアルナリ、之レハ六ノ規ニテ御座候、道規ナトハ六ノ規ニテ六尺ノ竿六十間ヲ一丁トシ、六々三十六丁ヲ一里ト定メ申候、田畑ノ法ハ三ノ規通用ニテ御座候、

巻反

田畑共ニ上々ヨリ下々マテ五段ノ位御座候、上々田一反ニ分米二石ノ時ハ、中田一反ハ米二石八斗、下田一反ニ分米一石六斗、以下斯ノ如シ、二斗下リニシテ土代ヲ積ミ上ケ申候ヲ高ト唱ヘ申候、高物成ノ事奥ニ記シ申候、

附新方ハ上代ノ土代反ニ一石一斗、下田土代反ニ一石、畑ハ都テ反ニ三斗代又ハ五斗代、御國中一流ノ位ニテ御座候、

巻町

本方・新地方・畝物・野開等皆同前ニテ御座候、海山ノ畝数ハ大概目分量ニテ、凡一町ハ三町計モ有之也、

一四五の二
高之事

郷高

公義御帳面前ノ高ニテ、当時ハ通用無御座候、肥後十
四田數二万三千四百六十二町、高五十七万二千九百八
十石ト申ハ、飛摩天草ヲ加ヘ申候高ニテ、委シクハ存
不申候、高ハ天正年中秀吉公ヨリ初リ申候也、其以前
ハ町數ヲ以テ通用致シ候也、

現高

田畑上中下ノ位ニ土代ヲ積ミ、三分米ヲ集メ候高ニテ
御座候、此高ニ免ヲ掛ケ物代ヲ取出シ申候、物成ノ事
奥ニ記申候、

撫高

御給地ノ高ニテ、御知行配分ノ通用ニ成申候、御免方
現高ヲ以テ積リ立、撫高ハ並ヘ可申候、

万引高

前々洪水荒堤床塘下等、天和元年ノ洪水時ヲ加ヘ、同
二年新地一ツニ帳面定リ申候、当時御免方其外共入用
ニ無御座候、只今名目計ニテ御座候、

外引高

本方高ノ内新密柑木床渡場費地等、天和二年右ノ万引
高一同ニ帳面定リ申候、

請引高

御郡役御出米錢高御赦免ノ高ニテ、在役人ノ役料高ニ
テ御座候、

諸床高

村高ノ内ナカラ在藏床・御番所床其外牢屋坏、御年貢
御公役除キ申候高ニテ御座候、

御免方ノ事

御物成

村免四ツ六分トイフ時ハ、高百石ニ御物成四十六石、
本方・新地方共ニ同前免ト申候物成ノ目安ニ成申候、
御損引ノ時ハ、田畑作毛ニ掛リ申候、徳米ヲ積リ上田
畑米合何程此免幾ツ何分、扱テ三免帳ト申テ、地惣上
ニテ免ヲ極、其内ノ一ツヲ当免ニ定メ申候、之ヲ村高
ニ掛ケ申候、当物成ヲ右ノ田畑米合タ所ト、当物成ノ
了米ヲ御了簡米下リ米ト申唱候、

御損引ノ次第ハ委難記略仕候、

三ノ口米

御物成百石ニ三石完、^(免カ)本方・新地共同前、諸国一統加リ

無御座候、

水夫米

御物成百石ニ三石六斗六升、右同断、

右ノ御物成三ノ口水夫米ヲ年々上納仕候、御年貢ニテ

御座候、

反別ノ事

高ニ免ヲ懸物成出申候、之ヲ田畑ニ分ケテ田畑成何程、

反ニ何斗何升ト定リ居申候ヲ反別ト申候、御損引ノ時

徳懸ノ見合ニ成申候、

一四五の三

戊寅正月

那方覚書

当御国、最初加藤主計頭清正様二十五万石、小西攝津

守行長様二十四万石、其外ハ御両殿様御代官所、天正

七年ニ御入国、然ル処ニ慶長五年石田治部少輔三成公

御謀反ニ付、行長様依為御一味、濃州關ヶ原御合戦ニ

御滅亡、其後行長様御領・御代官所共ニ、清正様都合

五十四万石御所勘被成候、度々御検地相究申候由、

反別高積

上田一反ニ

分米一石三斗

中田一反ニ

全 一石二斗

下田一反ニ

全 一石一斗

上島一反ニ

全 八斗

中島一反ニ

全 七斗

下島一反ニ

全 五斗

上山畑一反ニ

全 三斗五升

中山畑一反ニ

全 二斗五升

下山畑一反ニ

全 一斗五升

右御検地前ノ田畑畝数ニ、御国中一同ニ此高積リニテ、

村切ニ何程ト相究リ申候、之ヲ御先代ヨリノ現高ト申

候間、忠廣様御代モ右ノ通りニテ御座候、(細川忠利)妙解院様寛

永九年十月ニ被遊 御入国、翌年ノ春ヨリ御国中へ撫

ノ内検地被仰付、五ヶ村三ヶ村完(宛)組合床屋御百姓三合

坪ノ小竿ヲ打有畝ニ、御先代ヨリノ村高ヲ割賦仕候、

高ハ違ヒ不申候へ共、畝数多少ニ付、村々ニテ反別ノ

分米違ヒ申候、

御家中へ被遣候御知行ハ、御先代寛永六七八年三ヶ年

ノ物成御撫被為成、納米四ツ代ニ被成御渡被遣候、就

夫御先代ノ高免ノ村ハ、御知行高ノヒ申候、下免ノ所

ハ縮高(りち)ヘク申候、之ヲ撫高ト申候、公儀御蔵納ハ現

高ノ御沙汰ニテ、撫高ハ御給人知迄ノ捨ニテ候事、
 高百石此物成四十石、此ニ二和利ヲ以テ入四十八、又
 ハ五ノ口米納米二石ニ二和利ヲ入二石四斗、都合五十
 石四斗前廉ノ総懸升ニ成申候、近年京升一通ニ成申候、
 総懸升ヨリ京升ハ大ニ有之ニ付、総懸一石ニ付六升四
 合完縮、京升四十七石三斗八升ニ成申候、此内四十六
 石ハ本米免ニシテ、京升免四ツ六分一石三斗八升ハ三
 ノ口米ニテ、最前ノ約米四成ノ免只今ノ京升免四ツ六
 分ニ当リ申候、右ノ書付事長ク如何ニ存候ヘトモ、御
 先代ヨリノ反別高違ヒ申候儀、撫高ノワケ其上御給人
 知ハ御拝領四成ノ御免フマエニ仕候、差引有之ニ付、
 書付申候事、

内檢方免配次第

早田並大小豆、其外早々出来仕候毛上下見張ヲ仕セ、
 坪ニ引合、其坪ノ有米ヲ見立、種ニ成候程殘置、先作
 徳共ニ徳米ヲ懸取込候事、
 中田モ遅速有之ニ付、出来仕候分下見張ヲ仕セ、二度
 ニモ三度ニモ右早田ノ如ク裁許仕候事、
 晩田・畑方共ニ出来仕候毛上立損不仕様ニ、是又下見
 ヲ任^(任カ)置、坪ノ見届徳米其品々ニ掛取込申候、

田方根付濟次第ニ、五月中旬ノ大小豆・瓜・西瓜・大
 角豆、何レモ夏作早出来仕候品々改、筆付ノ帳ヲ仕セ
 受取置重テ引合申候、大豆ナトハ葉豆ニモ仕候、何レ
 モ收納仕候、其跡ニ粟・ヒエ・イカハ・大根抔仕、秋
 毛ノ内檢ニ取込申候ニ付見廻リ、左様ノ処ハ二毛作仕
 候、秋粟ノ根付仕候ニテモ、畑方惣畝弘ノ筆付帳仕セ、
 重テ引合改申候ヘハ、稗・サ、ケノ類ハ下免ノ所ニテ
 モ免ニカ、リ候モノニテ無之事、

升付ノ儀、有体ノ免ヲモ受不申、シラミ居申候時ハ、
 升ニ如何程アカリニテモ改メ申間敷ト書物ヲ仕ヲ、一
 歩例ヲ仕候段取ノ上中下差ワケ不申見寄ニ仕候、下見
 ハ必段返リ仕候間、左無之様ニ下見仕候様ニト申渡、
 段付ノ帳受取、坪ノスキト引合テ穂並実ノリモ能例シ
 可申候ト存所ニ、心シルシヲ仕置、タトエ重テ用捨イタ
 シ候共、先々強ク例シ置申候、マタ免ノフマエ或ハ徳
 懸取立ノ心ノ升付ニテ候ヘハ、此毛上惣様ニ廻シ、迷
 惑仕間敷ト存所ニテ例申候、升付ハ筆ノ仕様有之候、
 惣別升付程反別畝掛リハ無之モノニテ候事、
 石結ト申ハ、此坪数何程ト坪ニ数付ヲ仕出シ申候、是
 又坪ヘ引合例可申ト存所ヲ見立、心シルシヲ仕置、惣様

見揃ヒ候上、先如何程ノ増ニテ徳ヲ受取候得ト申聞、
受取候ヘハ例不申候、若合点不仕時ハ、坪カリニテモ
升付ニテモ望次第二仕、惣様廻シ申候事、

坪例シト申ハ、段見ニテモ数付ニテモ、畝相実ノリヨ
キ所ヲ見立、一畝マテスキトカリ上、把数無甲乙結立
サセ、一把タメシニテ惣様廻シ申候、畝カリハ其坪中
通りノ所ニ、竿ニテモ繩ニテモ五間ニ六間一畝カリ上、
是モ無甲乙結立サセ、圃ヲ入、一把例有数惣様ニ廻シ
懸申候、惣別坪畝カリハ、如何ニモ有体ノ裁許ニテ候
事、

坪付ニ荒カハ無之、大小豆・蕎麥・ヒヘ・キヒ・サ、
ケ・胡麻・ヘコノ類ハ一步ノ有升ヲ一信カ上納前ニテ
候事、

有体ノ免ヲモ受不申セリ合ノ升付ニハ、屋敷・サエン
畑・芋畑ナトハ、分米スクミニ仕候ヘトモ、夫ハアマ
リニテ候ニ付、御拝領免懸リ能候事、

高免ノ所ハ升付ヲ置申義モ有之候、左様ノ所ハ坪ニ引
合申候時、畝数相ヲ見申カ第一ニ候、目論見程升アタ
リ無之時ハ、畝ヲ改増ヲ懸申候事、

日損・風損ノ虫喰・穂枯、イツレモ立毛損毛之時ハ、

有体ニ積リ引ヲ仕遣申候、此捨リニ少シワケ有之候、
タトヘハ一反ノ坪ニテ、一畝ハスタリ、残り九畝ハ上
ノ毛上ニテ候ヘハ、米ハイカ程有之候、当納ハ何程懸
リ、作徳ハ丈夫ニ有之ト見及候ハ、少々強損引仕候、
又此田ノ土ハ上ニテ候ヘトモ、立毛ヘ下ニ出来候ハ、
此坪米イカ程可有之候、引分ニテハ此上ト迷惑可仕ト
見及候ハ、タトヘ見ヘ候損毛ハ十五歩ニテ候共、一
倍其上ニテモ見捨遣見撫候事、

穂枯・マジリ枯・シンキカレ抔ト申候穂、見ヌキ遣
候ニ一面見渡候テモ知申候ニ付、イカ程ト仕遣候、不
案内ナル衆ハ一步ヲ見キ、此内ニ枯穂五十程モ可有之
ト見及候ハ、其反ニ掛一畝枯ト大積ニ仕候、虫入ナ
トモ同前ニ候、一步ノ稲ノ数五百ト大積リ仕候故ニ候
事、

内検ハ片端ヲ見候テハ、必損申候、田畑共ニフミ、廻
リ々々見申候、殊ニ穂枯、虫喰杯ハ目ニムカヒ候ヘハ、
能ク見ヘ申候、日ヲオイテハ見ヘ兼申候、ソレ故検見
ハ立所ト申候事、

長病人又ハ不作ノ百姓カカリ立ヲ望ミ申儀モ有之候、
隨成目付サヘ有之候ヘハ、一同ニカリ上把タメシ仕、引

分申候カ可然候、日数重リ候テハ不宜候事、

秋作大体見ワケモ成候時分ニ、先一通リ上見ヲ仕、惣田方ニ米撫何程、畑方ニ何程、都合イカ程、地面ノ石辻何程、差大カネヲワタシ見候テ、例年ヨリハ惣体少々能有之ト存候ハ、少々ツヨク仕ニモ迷惑不仕候、同成ヨリモ少々悪シクト見及候ハ、タトヒ二步三歩下候テモ、迷惑仕候、一步二步ノ違ヒハ、毛上ニテ見ヘ申スモノ無之候、ケ様ノ了簡ハ在郷ナレ不申候テハ成ニクキ儀トモニ候事、

一反ハ三百歩ニテ候ニ付、半物歩ハツレハ算用ニハ用不申候、遠近次第ニ上ケ下ケ仕候、然共所々ニ步ハツレ可有之事、

土免ハ春定置候、年々ノ免ヲクラヘ、其所土心・畝相・水掛リ、或ハ野山海川ニカ、ハリ四木三草モ有之所モ口穂片穂百姓ノ盛衰、扱又公義御配分ノ御免、反別ノ懸米、人畜ノ多少ニ至ルマテ、吟味仕定置申候、タトヘ備作ニテモ土免ヲ上候儀ハ不成候、天災事ニテ損毛過分ノ時ハ、土免ヲ破リ内檢仕候、少宛ノ申分毎年有之候間、少ノ損引ヲ仕、残分ハ土免ヲ通シ申候、如此念ヲ入レ、土免ヲ一年定置候ヘハ、後年共此引続ニテ

沙汰仕候、土免ニテモ作毛ノ吟味ハ秋免同前ニ德懸等モ仕候事、秋免ノ儀其所田畑々々高畝數御配分免反別ノ米当リ、並年々ノ免、何レモ書付ヲ取、当毛ニ見合、

前々田畑ノ品々ニ徳米ヲ目論見掛、惣反別ニ撫、田俵結石積ヲ仕、片例不仕様ニ幾重ニモ遂吟味、不作ノ百姓迷惑仕候者スクヒ遣シ、随分有体ニ沙汰仕候儀ニ候、

御主人ノ御為ニヨキ迄ニテハ、御百姓迷惑仕候、可取モノヲ取り、取ル間敷モノヲ非道ニ少ニテモ不取様ニ、

地頭方ニモ損不參、御百姓モ取続申様ニ仕義御為ト申候事、所ニヨリ立毛ノ見立モ有体ヲツク、野山ノ開

キナトモ少シ有、御百姓カシケ所モ有之候、如何様ノワケ(テカ)ニカ草卧申候哉ト心ヲ付候ヘハ、オノツカラ知レ

申候、秋毛三分一ノ作徳ノ内ニテ、諸出来ヲ出シ、残分ニ麦作打合ニテ、中々過佗ニタリ申モノニテ無之候、

外共飯米不足心付ハ免合ニテハ不成候事、

公儀御免相濟候以後、高物成ノ書付ヲ門別ニ御配候ヘハ、一段御尤ニ存候上納高ヲ兼テ承知イタシ、ウタカヒモ晴レ申事、御給人地モ免濟次第、百姓ニカトノ名寄帳畝高石辻無相違仕出サセ吟味仕、銘々申聞モ判形ヲ取置候、以来庄屋御百姓出入無之可然事、

高ニ応シ人ノ窄改トヲ仕、何トソ召返シ申了簡仕儀、

〔筆力〕

專要ニ候、惣テ作リキリ不申田地ヲ無理ニ張掛候儀、
不宜様籠抹ニ仕、作毛不出来ノ時ハ、過分ニ免下リ申
候、立毛悪シク候ヘハ、作徳モ少ナク弥迷惑仕候、左
様ノ所ハ、一人役八分五分三分ト年寄・セカレ・片輪
者追改分結ニ仕、此作所・スキ所・鍼ヨミ所一人ニ付
イカ程ハ丈夫ニ可仕ト遂吟味割付、残分ハ地百姓抱高
ノ如ク、上中下三取合ニ仕リ、少々免ヲ下ケ、土作ニ
入候ヘハ、地百姓存ノ俣ニ仕コナシ、物成リモ上リ、
出作地モ給人支配ノ出作ハ、一名前ワキ同前ニ三取合
ニテ候ヘハ、免モ大分下リ不申候、ケ様ノ損益ノ沙汰
念ヲ人吟味仕候事、

町近所ノ在郷ハ、隙ヲ闕シ、必ス市ニ立、酒手ヲ遣ヒ
申候間、カリ様ノ儀ヲハ堅申付候事、

免内檢イカ様念ヲ入レ、有様ヲ尽候トモ、時分々々ノ
取立ヌケ候テハ、無詮議ニ候、所務ハ纔三四十日ノ儀
ニ候得ハ、代官職ヲ仕候者ハ不及申、催促人ヲ付置、
昼夜無境取立所蔵ニ取込、村々ニ符奉行所ヲ定置、庄
屋ト相符仕、収納割ノ日限ヲ定メ、代官・催促人其所
ヘ来リ、切カケノ吟味仕、名辻ヲ改メ、稠シク取立申候、

秋ハ日短候ニ付、夜ナヘニ稻ヲコキ収納サセ、米ヲコ
シラヘ、昼ハ田畑ノ毛上ヲ取揚、麦作・津出等無緩申
付候、油断仕米雜穀散々ニイタシ、未進ニ成候テハ、
少シニテモカリカヘニ可成時ハ、タラレ申スヨリ外無
之候、一度タラレ候テハ、亦百姓ニ取付候儀成ニクキ
物ニテ候間、取リ立方肝要ニテ候事、

百姓ニヨリ、昼夜無油断精ヲ出シ候ニモ、無仕合ニテ
作毛アシク、納所モツカヘ、渡世ノ思召モ不成者モ有
之候、ケ様ノモノ遂吟味、取続申様ニ心ヲ付遣候儀第
一ニ候事、

御百姓大小ニヨラス、牛馬所持不仕候テハ不成候、田
地ヲシコナシ、コヘヲ取り、津出等モ仕候、牛馬持申
儀不成者ハ、給人ヨリモ心ヲ付、又女子抔持、家内ニ
事欠キ不申候ハ、質奉公ニモ出シ、牛馬ヲ持チ遣ハ
ス了簡肝要ノ事、

売地等有之所モ、売主・買主・庄屋内談仕、跡カイナ
ト仕、当納無相違納所ニ可仕ト手筈於有之ハ、給人方
ヨリハ不存分ニテ、内証埒明申候カ可然儀ニ候、立毛
ニ以条ヲ立、取遣ノ出入有之候ヘハ、以来其跡ノ為メ
ニ不宜候事、

荒廢シ、苗代・根付・草浚・麦作ノ時分々々ニ人ヲ廻

シ、時分ヌケサルヤウニ、無念ニ不仕候様ニ沙汰仕可

然事、

百姓夫仕ノ儀、何月ヨリ何月マテトハ御座候ヘトモ、

一同不參候、所々ニテ耕作ノ手立違申候、冬麦早々荒

廢仕、干田ニ仕所モ有之、又コシウヘノ所モ候間、種

子・農具并コヘ・カシキノ用意、大小豆諸作ノ根付仕廻

候共、草水無念ニ仕候テハ立不申、就中草浚ハ時分ニ

一兩日ノ延引倍々ノ手間入、作毛モアシク成申候、カ

ヨウ成微細ナル事ハ、御大人ハ無御承知候条、右夫遣

被仰付候共、御諫ヲ申上候儀、主人ノ御為ノ事、

木綿ノタメシナトハ、常体ニ不仕候ヘトモ、所ニヨリ

大分作所モ有之候、如何程ト目論見カケ候テモ無之ト

申、納所不仕候時分ハ、タメシ申ヨリ外無之候、畝付

仕出シ候上、中通りノ所ヲ見立一步竿ヲ入、其内ノモ

、スキトモキ落、地ニ落候モ、亦木ニ付フキカラモア

ツメ、虫喰ウラナリ益ニ立不申分ハ捨置、モ、數イカ

程ト改置、其畠ニフキ申綿大小中三ツフキ取ニテ、カ

ケ撫シ、一フキニ付何分宛ト仕、改置候モ、數ニ懸候

ヘハ、一步ニ有之分知レ申候事、

米雜穀和利折

米一升ニ

大唐一升五合

全一升ニ

小豆一升一合

之モ中下沙汰可有之候

全一升ニ

稗四升五合

全一升ニ

小豆二斗

近年ハ一升五合替

全一升ニ

蕎麦三斗

全一升一合ニ

中胡麻一升

全一升ニ

上大豆一升三合

全一升ニ

中ハ一升五合下モ有

全一升ニ

粟粳二升

粟カ

全一升ニ

大麦三斗

近年ハ二斗替ノ由

全一升ニ

ツキ麦一升五合

全一升ニ

エマ一升

全一升三合ニ

上胡麻一升

茶一斤

百五十目

紅一斤

百目

木綿ハ一斤

五百目

又ハ三百目、シカン御国ハ貫目ノコシラヘ、

右ノ外

綿

漆

苧

煙草

楮

右ノ類ハ百六十目一斤ナリ、

四木ハ

茶

楮

桑

漆

三草ハ

麻

紅

藍

高百石ノ内六十石ハ免ニ引残テ四十石、是四ツ成手取

米也、

〔古丸〕
右ハ何百町何町ト有之候事、

中古ハ何百貫何十貫トアル、

但古錢一貫ニ付、下ハ五匁、上ハ十匁ノ由、

百年以来ハ高イカ程ト極候事、

高百石ニハ米モ百石ニテ御座候ヘトモ、四ツ成ノ所務

ニテ御座候ヘハ、六十石ハ免ニ引遣、残テ四十石手取

ニ極候由ノ事、

右ハ牧野安右衛門著述ノ由

安政二乙卯年ノ調ナリ、

此書細川侯ヨリ御借用、御手許ニ於テ謄写命セラレ、其節

密ニ写置キヌ、某ト記セリ、

目録

遷幸御列書

一四六 遷幸御列書

安政二乙卯年

遷幸御列書

十一月廿三日正卯刻

飯 皇居ヲ北ヘ、今出川通ヲ室町ヘ、

室町ヲ三條へ、三條ヲ堺町 御門へ、堺町
御門ヲ北へ、院 御所御門前ヲ西へ、建禮

御門へ
入御、

徒士麻上下

同

同心麻上下

口付

近習製斗目麻上下

中小姓麻上下刀持

同心麻上下

長柄傘

挾箱手代り

徒士

口付

侍 同

徒士麻上下

鎗手代り

口付

浅野中務少輔馬上

沓持

簞箱 押

徒士

鎗

御目付馬上

佐橋中務

徒士麻上下

同

同心麻上下

口付

近習製斗目麻上下

中小姓麻上下脇差持

同心麻上下

草履取

挾箱手代り

徒士

口付

侍 同

長柄傘

挾箱

下雑色

同 金鞭持

同 上雑色

若党

草履取

鎗 挾箱

同上

三門麻上下

同

車副

押

草履取

挾箱

下雑色

同 金鞭持

同 上雑色

若党

草履取

鎗 挾箱

同上

三門麻上下

同

車副

出車牛童

楊持

牛飼

衛府侍

舍人六角

右兵衛少尉源敦義

騎馬

仲間

傘

車副

楊持

牛飼

衛府侍

出車牛童

雨皮持

牛飼

衛府侍

舍人岡田

右兵衛少尉源義綱

騎馬

仲間

傘

車副

雨皮持

牛飼

衛府侍

平本 騎馬
若兵衛少尉藤原政香
仲間麻上下 同心同 同同 与力素袍
若党 草履取 鎗箱麻上下 六門同 同同 右京職
青木 騎馬
亮 吉 順
舍人

荒木 騎馬
右兵衛大尉高橋榮親
仲間麻上下 同心同 同同 与力素袍
若党 草履取 鎗箱麻上下 六門同 同同 右京職
榎山 騎馬
亮久幹朝臣
舍人

小舎人童 雜色 傘 馬副 舍人
神祇官 藤波大副騎馬 居銅 大麻持 傘 左衛門府 舍人
看督長

小舎人童 雜色 傘 馬副 舍人
馬副 雜色 同 同 看督長

勢田大尉章武朝臣騎馬 隨身 火長 雜色 馬副 舍人 馬副 隨身 同 雜色 同
小舎人童 傘 冷泉督騎馬 居銅

隨身 火長 雜色 馬副 舍人 馬副 隨身 同 雜色 同

雑色

舍人

傘 左衛門府

小林

大尉藤原祐之

騎馬

調度掛

傘 舍人

裏松

佐勲光

騎馬

小舎人童

傘

陰陽寮 舍人

雑色

隨身

雑色 同

雑色

雑色

隨身

雑色 同

隨身 寮官人 雑色 同 同

雑色

土御門

頭晴雄朝臣 騎馬

小舎人童

傘 中務省

森寺 少丞常邦 騎馬

小舎人童

省掌代

隨身 寮官人 雑色 同 同

雑色

雑色 同 右馬寮

舍人

河端(轉)權助藤原誼益

騎馬

隨身

雑色

隨身

小舎人童

雑色

傘

舍人

神原

騎馬

傘 内舎人

信董

傘

舍人

物加波 權助懷産朝臣

騎馬

隨身

雑色

隨身

小舎人童

雑色

傘

雑色 同

右馬寮

隨身 看督長 火長 雜色 同

弁 葉室 權右中弁長順 騎馬 弁侍 小舍人童

隨身 看督長 火長 雜色 同

傘 鈴鑑櫃 近衛代

舍人

雜色 下品雜色 雜色 同

山中 右府生 大江成全 主鈴 舍人 林大和守 騎馬 貞炬

雜色 下品雜色 雜色 同

傘 監物 舍人 山科 騎馬 大正恒 傘

少納言侍

雜色 同 雜色

少納言 舍人 唐橋 在光朝臣 騎馬 舍人 小舍人童 傘 太刀契櫃 近衛代 富島 左將曹源元起 公卿

雜色 同

舍人 馬副 同 雜色 馬副 副舍人 舍人 馬副 隨身 同 雜色 馬副 舍人

日野 右大弁宰相 騎馬

居銅

傘

三條西 左宰相中將 騎馬

傘

舍人 馬副 同 雜色 馬副 舍人 馬副 隨身 同 雜色 馬副 舍人

馬副 雜色 同 馬副 舍人

馬副 同 雜色 同 同

坊城 左大弁宰相 騎馬

居銅

傘

五條 菅宰相 騎馬

居銅

傘

馬副 雜色 同 馬副 舍人

馬副 同 雜色 同 同

馬副 副舍人 舍人 馬副 同 雜色 同 同 舍人 馬副 同 同 雜色

三條中納言 騎馬

傘

烏丸 日野中納言 騎馬

居銅

馬副 舍人 馬副 同 雜色 同 同 舍人 馬副 同 同 雜色

同 同 舍人 馬副 同 同 雜色 同 同 馬副 穰告人 舍人長 馬副

傘 四辻中納言騎馬 居飼 傘 近衛大納言騎馬

同 同 舍人 馬副 同 同 雜色 同 同 馬副 穰告人 居飼 馬副

馬副 同 雜色 同 同 同 同 下品雜色 同 馬副 副舍人 居飼 馬副

衛府長 傘 德大寺大納言騎馬 衛府長

馬副 同 雜色 同 同 同 同 下品雜色 同 馬副 副舍人 舍人 馬副

馬副 同 雜色 同 同 同 馬副 舍人 舍人長 馬副 同 同 雜色 同 同 同

傘 二條大納言騎馬 衛府長

馬副 同 雜色 同 同 同 馬副 舍人 居飼 馬副 同 同 雜色 同 同 同

下品雑色 同 馬副 副舍人 舍人 馬副 同 同 雑色 同 同 同 居銅

傘 三條 權大納言 騎馬 衛府長 傘

下品雑色 同 馬副 副舍人 居銅 馬副 同 同 雑色 同 同 同 居銅

舍人 右番長 騎馬 郎等 舍人 馬副 同 同 同 近衛 同 同 雑色 同 同

舍人 鷹司 内大臣 騎馬 舍人長

舍人 左番長 騎馬 郎等 舍人 馬副 同 同 同 近衛 同 同 雑色 同 同

輔瀨公 居銅

雑色 同 居銅 舍人 右番長 騎馬 郎等 馬副 櫛舍人 馬副 同 同 同

傘 近衛 右大臣 騎馬 舍人長 忠深公 居銅

雑色 同 居銅 舍人 左番長 騎馬 郎等 馬副 櫛舍人 馬副 同 同 同

近衛 同 同 雑色 同 同 同 同 下品雑色 同 居銅 舍人 右番長騎馬 郎等 舍人 馬副

傘 舍人

近衛 同 同 雑色 同 同 同 同 下品雑色 同 居銅 舍人 左番長騎馬 郎等 舍人 馬副

馬副 同 同 同 舍人長 近衛 同 同 雑色 同 同 同 同 下品雑色 同 右近衛府

九條騎馬
左大臣

尚忠公

傘

馬副 同 同 同 居銅 近衛 同 同 雑色 同 同 同 同 下品雑色 同 左近衛府

舍人 上田府生 源宣騎馬 雑色 舍人 番長 三沢源爲淑騎馬 雑色 舍人 府生 鈴木紀淑種騎馬 雑色 舍人

近衛代 舍人 近衛代 将曹

舍人 水口将曹 身人部清政騎馬 雑色 舍人 番長 中川源意直騎馬 雑色 舍人 府生 村田藤原武職騎馬 雑色 舍人 将曹

近衛代

馬副	馬副	小舍人童	小舍人童	水口 身人部清俊	渡辺 源 供 壽
雜色	雜色	雜色	雜色	騎馬	騎馬
同	同	傘	傘	雜色	雜色
同	同	居飼	居飼	舍人	舍人
同	同	舍人	舍人	將監	將監
傘	傘	番長	番長	調子	土佐
少將	少將	乘移馬	乘移馬	武貫	武宗
舍人	舍人	郎等	郎等	騎馬	騎馬
東園 基敬朝臣	梅溪 通善朝臣	隨身	隨身	雜色	雜色
騎馬	騎馬	舍人	舍人	御綱少將	御綱少將
隨身	隨身	一條 大將	廣橋 大將	舍人	舍人
小舍人童	小舍人童	騎馬	騎馬	阿野 公誠朝臣	姉小路 公前朝臣
雜色	雜色	舍人長	舍人長	騎官馬	騎官馬
中將	中將	隨身	隨身	居飼	居飼
舍人	舍人	同	同	隨身	隨身
油小路 隆晃朝臣	橋本 實麗朝臣	馬副	馬副		
騎馬	騎馬	同	同		
隨身	隨身				

隨身 傘 御綱駕輿丁 同 同 同 同 御輿長 同 同 舍人 櫛笥 中將隆詔朝臣 騎馬 小舍人 隨身 同 傘

隨身 傘 御綱駕輿丁 同 同 同 同 御輿長 同 同 舍人 野宮 御輿長 御綱駕輿丁 同 同 同 同 隨身 同 傘

舍人 藤谷 少將爲兄朝臣 騎馬 隨身 小舍人童雜色 傘 馬副 舍人 庭田 源宰相中將 騎馬 居飼 馬副 隨身

執翳殿部代 今藤主殿大属源玄俊 吳床 御輿長 同 同 舍人 中將定功朝臣 騎馬 隨身 同 傘

執翳殿部代 島田越前大椽源雅喬 吳床 御輿長 同 同 舍人 三位中將 騎馬 居飼 馬副 隨身

副舍人 正親町 少將公董朝臣 騎馬 隨身 小舍人童雜色 傘 馬副 舍人 靛鬮 居飼 馬副 隨身

隨身 雜色 同 同 如木雜色 傘 職事 副舍人 廣橋頭右中弁 騎馬 胤保朝臣 舍人 瀧口 御藏小舍人

東豎子 山口 騎馬 紀季明 傘 職事 副舍人 廣橋頭右中弁 騎馬 胤保朝臣 舍人 瀧口 御藏小舍人

隨身 雜色 同 同 如木雜色 傘 職事 副舍人 廣橋頭右中弁 騎馬 胤保朝臣 舍人 瀧口 御藏小舍人

雑色 同

隨身 看督長 火長 同

小舎人童

小舎人童

傘

中御門左中弁 騎馬
經之

小舎人童

清閑寺右中弁 騎馬
豊房

雑色 同

隨身 看督長 火長 同

小舎人童

舎人

舎人

雑色 同 同

雑色 同 同

隨身

藤島極臈 騎馬
傘 藤原助胤

小舎人童

北小路差次藏人 騎馬
傘 大江俊堅

小舎人童

舎人

舎人

雑色 同 同

雑色 同 同

隨身

雑色 同

雑色 同 同

雑色 同 同

舎人

傘 侍臣 河幡侍從 騎馬
公迹朝臣

小舎人童

傘 萬里小路侍從 騎馬
博房

小舎人童

雑色 同

雑色 同 同

雑色 同 同

舎人

下品雑色

雑色 同 同

雑色

勘解由小路中務少輔 騎馬
傘 資生

小舎人童

御葉陪從 山本
傘 典葉大允隨朝臣 騎馬

舎人

舎人

下品雑色

雑色 同 同

雑色

同

雑色 同

雑色 同

史生 傘 伊良子
典葉寮医師光順 騎馬

史生 傘 所衆 濱路
阿波守正民 騎馬

傘 主殿寮

舎人

舎人

舎人

同

雑色 同

雑色 同

雑色 同

雑色 同

壬生
頭輔世宿禰 騎馬

史生 童

傘 掃部寮 押小路
頭師身朝臣 騎馬

史生 童

傘 右衛門府

雑色 同

雑色 同

舎人

舎人

堀川 隨身 雜色 同
 權佐親賀朝臣 騎馬
 小舍人童 傘 舍人
 山路 大尉平信敏 騎馬 雜色
 調度懸 傘 右衛門府 舍人
 馬副

隨身 雜色 同
 隨身 雜色 同
 雜色
 馬副

馬副 隨身 同 看督長 同 火長 同 雜色
 隨身

甘露寺 騎馬
 督 居飼 傘 澤村 大尉壽榮朝臣 騎馬 小舍人童
 舍人

馬副 隨身 同 看督長 同 火長 同 雜色
 隨身

看督長 火長 雜色
 走雜色 同 前駟傘 同 同 居飼 同 舍人 同 同 前駟諸大夫 騎馬 雜色
 雜色 雜色

傘

看督長 火長 雜色
 走雜色 同 前駟傘 同 同 居飼 同 舍人 同 同 前駟諸大夫 騎馬 雜色
 雜色 雜色

舍人 同 從者
同上 舍人 同 從者
同上 右府生 騎馬 郎等
郎等 右番長 騎馬 郎等
郎等 車副 同 同 牛 童 傘

鷹司政通公
関白車

舍人 同 從者
同上 舍人 同 從者
同上 左府生 騎馬 郎等
郎等 左番長 騎馬 郎等
郎等 車副 同 同 雨皮持 牛銅

舍人 牽馬 舍人長
近衛 同 同 雜色 同 同 同 同 看督長 雜色
舍人 官人 騎馬 梓持 傘
火長 素袍 与力

居銅 近衛 同 同 雜色 同 同 同 同 看督長 雜色
火長 素袍 与力

若党 草履取 鎗箱 麻上下 同心 同 同 同 三門 同 徒士 鎗手代り 同心
雙斗自麻上下 麻上下力持 近習 中小姓

同 徒士 口附 御附 馬上 大久保大隅守 沓持

若党 草履取 鎗箱 麻上下 同心 同 同 同 三門 同 徒士 鎗手代り 同心
雙斗自麻上下 麻上下脇差持 近習 中小姓

口附

長柄傘 挾箱 徒士 鎗手代り 同心 御附 雙目麻下 麻下刀持 近習 中小姓 長柄傘 挾箱 徒士

押 徒士 都筑駿河守 沓持 押 徒士

草履取 挾箱 徒士 同心 口附 近習 中小姓 草履取 挾箱 徒士

侍 同 長柄傘 挾箱 徒士 同 同心 近習

鎗手代り 口附 御目持 大井十太郎 沓持 押 徒士 鎗手代り 岡部備後守

口附 侍 同 草履取 挾箱 徒士 同 同心 口附 東間奉行 近習

麻上下刀持 中小姓 同心 長柄傘 挾箱手代り 案内同心 徒士 同 同心

沓持 蓑箱 押 案内同心 麻上卡 徒士 白丁 参内傘 持人一人 徒士 同 同心

麻上下脇差持 中小姓 同心 草履取 挾箱手代り 案内同心 麻上卡 白丁 挾箱 持人一人 徒士 同 同心

麻上卡 同
徒 同
麻上卡 持鎗 持人一人 同
扈從 同
素袍 同
供頭 同
刀番
口附 白丁 所司代
脇坂淡路守 馬上

麻上卡 同
徒 同
麻上卡 持鎗 持人一人 同
扈從 同
素袍 同
供頭 同
箱番 同
口附 白丁
脇坂淡路守 馬上

麻上卡 同
徒 同
麻上卡 持鎗 持人一人 同
扈從 同
素袍 同
供頭 同
箱番 同
口附 白丁
脇坂淡路守 馬上

素袍 同
供目附 同
麻上卡 扈從 同
同
麻上卡 案内同心

麻上卡
手廻小頭
麻上卡 杏持 一人 白丁
馬柄杓持 一人
白丁 草履取 一人
手傘持 一人
同 長柄持 持人一人
同 床机持 一人
同 草履取 一人
白丁 挾箱 持人一人
同 挾箱 持人一人
白丁 養箱 持人一人
麻上卡 茶弁当 持人一人
一人

麻上卡 杏持 一人 白丁
鼻捻 持 一人
同 草履取 一人
白丁 挾箱 持人一人
一人

麻上卡 押
茶道 一人

白丁 馬柄杓持 一人 同
若党 同

水桶 持人一人
一人
茶弁当
床机持 持人一人
一人
厚綱
牽馬
口附 白丁
口附 白丁
鼻捻 持 一人 同
杏籠持 一人
麻上卡 押
布衣 騎馬
公用人
口附 一人

白丁 鼻捻 持 一人 同
杏籠持 一人
麻上卡 若党 同

右此度

禁裏 御所方御造管被 仰出候処、万端無滞致出来、
精入骨折相勤候ニ付、被下之、

〔一四七の三〕
〔十一月四日老中申渡〕

〔松平、松前藩主〕
松前伊豆守

〔今カ〕
〔奥在本古内村カ〕

此度東西蝦夷地、西在乙部村東栗節内村迄、島々共一
円上知被 仰出、為代知陸奥国伊達郡・出羽国村上郡

之内、高三万石込高一万三百五十八石余被下、且又為

御手当年々一万八千両ツ、被下、以来三万石家格ニ被

仰付候、

〔大日本占文書(幕末外国關係文書)にて校訂〕

〔一四七の四〕
十二月十五日

宰相被任

〔徳川慶福、和歌山藩主〕

紀伊中將殿

〔橋慶喜〕

徳川刑部卿殿

〔前田斉泰、金沢藩主〕
松平加賀守

出格之思召ヲ以、中納言被任候、以後之家格ニハ不相
成候段被 仰出之、

〔一四七の五〕
十二月十六日

中将被任

〔直弼、彦根藩主〕
井伊掃部頭

四品被叙

八戸
〔信順、八戸藩主〕
南部遠江守

〔一四七の六〕
十二月〔二十四日〕

松平加賀守

内願之通、金十五万両上納被

仰付、右ハ

禁裏 御所方御普請之御用途ニ可被差加候事、

一四八 〔御所御造管費諸大名御手伝献納金額〕

○この文書の見出しは原書にはなし。鳥津斉彬公史料(尚古集成館所蔵)による。

十二月二十九日

井伊掃部頭

〔経須賀齊裕、徳島藩主〕
松平阿波守

〔定安、松江藩主〕
松平出羽守

〔久松勝善、松山藩主〕
松平隠岐守

〔頼胤、高松藩主〕
松平讃岐守

〔久阿彌、岡藩主〕
中川修理大夫

〔朝徹、丸亀藩主〕
京極佐渡守

〔朝徹、丸亀藩主〕
京極佐渡守

〔淺野長綱、三次藩主〕

松平近江守

〔家衛、高取藩主〕

植村出羽守

〔頼基、人吉藩主〕

相良元三郎

〔信順、八百藩主〕

南部遠江守

〔隆政、龜田藩主〕

岩城壽三郎

〔益胤、森藩主〕

久留島信濃守

〔貞幹、安志藩主〕

小笠原信濃守

右 禁裏 御所方御普請御用手伝被 仰付之候、

惣高百三十二万五千四百五十二石

一万石ニ付 千八百四十八両一步余

永百七十六文余

御入用高

五十万両

十五万両加州上納引

残ル

三十五万両

十万五千両 三歩御入用

諸大名

廿四万五千両 十四軒

御手伝

一四九 安政二乙卯年十二月京都町触

五百石以下

御目見以上以下

同惣領二男三男厄介

清水附之者、浪人

百姓 町人

右ハ今般蝦夷地一体上知被 仰付候ニ付、御旗本御家人之内、風寒暑湿ヲ不厭、山野ヲ跋涉シ、筋骨ヲ固メ、文武ノ修練心懸之者共相願候ハ、元身分ニ応シ在住被 仰付候間、名前早々取調可申聞候、且万石以上以下之家来、主人見込之者有之候ハ、申立次第是又可被差遣候間、書面之者共、何レモ荒地開発・野馬牛牧養ヲ始トシテ、食料薬用ニ可充生類育方、金銀銅鉄鉛山間堀、巨材薪柴伐、草木類植付、石炭堀取、器具製作、採葉、鯨鯨、何ニ不仍生産ニ相成候類、并港付等之場所へ休泊所・茶店等取建度存候者共ハ、任望被差遣、尤其品ニ応シ、御手当ヲモ可被下候、尚又御国益ニモ相成、格別出精之廉願候者ハ、篤ト事実相糺、士人ハ身分御取建、農工商之輩ハ地所家宅等相渡、

安政2年(1855)

其上御賞賜御手当等モ有之候条、右之趣相心得、有志
之者ハ其筋迄可願出候様、猶委細之儀ハ箱館奉行へ可
承合候、

右之趣被 仰出候間、末々迄不洩様可相触候、

十月十四日

右御書付、從江戸到来候条、洛中洛外へ不洩様可相触
者也、

卯十二月

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年
市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙數二十三枚）」の記載あり〕

目録

- 山川港外ニ米国軍艦渡来ニ就テ窺書
- 衣服ノ制限再達
- 幕府軍艦獻呈ヲ促サレタル書
- 水軍創設御予定
- 国旗旭章雛形ヲ製シ阿部正弘ニ示シ玉フ
- 異国船渡来ノ節制令并山川へ米国船渡来ノ事実
- 江戸大地震ノ事実并布達
- 外夷処分ノ御意見阿部正弘へ内申ノ御書

亞米利翰官吏登營後御建言
質素節儉並風俗矯正ノ訓令

一五〇 山川港外ニ米国軍艦渡来ニ就テ窺書

先達テ、薩摩守領内薩摩国山川村沖へ、北亞米利翰船

一艘渡来、滞船中任望薪水等相与候処、〔脱カ〕無事致出帆、

其段ハ御届申上候通御座候、然ル処、北亞米利翰之儀、

船中闕乏之品被下候儀御聞置之節、場所御取極無之候

へハ、何国之浦方へモ勝手ニ渡来、不取締ニ付、下田

并箱館ニヲヒテ被下候段承知仕、右外場所へハ一切不

致渡来儀ト相心得申候処、此節漂流ニモ無之船渡来、

数日滞船、着場近辺致測量等ニ付、重テ類船往来モ難

計、仮令此未アメリカ船ニ不限、何方ノ船渡来候テモ、

追々被仰渡之御趣意通、

御国威ヲ不失様、折角平穩ニ会釈可仕ハ勿論ノ事ト候

へトモ、万々一上陸等イタシ候時宜成立候ハ、領内

之儀、土地辺鄙ニテ人氣モ相替候付、迎モ横濱等ニテ

異人共御取扱同様之振合ニ程能致会釈候儀、甚無心元

旁心配仕候ニ付、何卒アメリカ其外へ入港御取扱相成

候外場所へハ、一切渡来不致様、御約話之国々へ御達

被成下候様可奉願旨、薩摩守申付候間、此段御内意ヲ
以申上候、以上、

二月廿六日

松平薩摩守内

西 筑右衛門

本文海防御掛御用番松平和泉守様へ御差出相成候、

〔大日本古文書(幕末外国関係文書)にて校訂〕

如斯上申セラレタルハ、幕府カ城下ノ盟ニ等シキ条約結締
シタルニ依リ、外国船全国各所ニ廻航シ、測量或ハ薪水ヲ
請フ等ノ口実ヲ以テ上陸シ、稍横行ニ等シキ挙動モアリ、
然ルニ幕府ハ未タ其制令法度モ発布セサルカ故、若シ渠カ
挙動ニ対シ不測ノ變ヲ生センコトヲ慮リ玉ヒ、斯ク上申セ
ラレタル者ナリ、

一五一 衣服ノ制限再達

衣服沙汰ノ儀ニ付テハ、去ル子年分テ被 仰出置、当

〔嘉永五年〕

正月ヨリ着服相用候儀屹度不相成、紬・西洋布・木綿
類、成丈鹿服相用候様トノ趣モ被 仰出、其段ハ人々
承知通ニ候、然処、此度地震ニ付テハ、質素節儉ヲ相
用、衣類ノ義モ鹿服可相用旨、從 公義被 仰渡候趣
有之候付、詰中ノ面々子年被 仰出候御趣意屹度奉汲

受、万端質素節儉ヲ心掛鹿服相用、御制禁ノ品々〔腕カ〕紛
敷〔敷〕古物逆モ相用候儀一切不相成、左候テ御供等ノ節
モ、木綿類相用候テモ不苦候、肩絹・袴等ノ儀モ、時
節ニ不拘麻・木綿・単物等相用候テモ是又不苦、乍此
上不守之者於有之ハ、屹度可及沙汰旨、於江戸申渡相
成候段申来候、此旨向々へモ不洩様可致通達候、

二月

豊後島津
駿河新納
久仰

〔鹿児島県史料旧記雜録追録(にて校訂)〕

元禄ノ頃ヨリ、貴賤ノ服制ヲ敎令セラレ、尔来毎回訓令ア
リト雖モ、時勢ニ伴ハレテ、動モスレハ華美ニ赴キタルニ
依リ、當時外患必迫、軍備專要ナルカ故、幕府モ旧弊改革
ノ命ヲ下シ、質朴儉素・武備拡張・士氣振作ヲ要務トセラ
ルニ依リ、本藩モ斯ク制限ヲ立ラレタルモノナリ、水戸家
ノ如キハ速クモ着手セラレ、公私共ニ質素ニシテ、羽織ノ
如キハ白晒布ニ墨ニテ紋ヲ画キタルヲ、上下共ニ用ヒタリ
當時心アルモノハ、大ニ感賞シタルコトナリキ、本藩モ這
ノ制度ニ倣ハレ、紬又ハ棉布ヲ用ルコト、ナレリ、公ニモ
棉小倉織ノ御袴ニ、紬布又ハ棉縮布ノ御服召サ、セラルコ
ト、ナレリ、

一五二 幕府軍艦献呈ヲ促レタル書

一五二の二

安政二年卯六月廿六日、御老中阿部伊勢守殿ヨリ、御留主

居御呼出、左ノ達書ヲ渡サレタリ、

此度当地へ被差廻候大船、至極出来方宜敷、堅牢弁理ニ相見得、右ハ、公辺御用ニ可相立品柄ニ付、据置砲器類共献上被致候事、如何可有之哉、併其許ニテモ手数ヲ掛ケ製造被致候船砲、無拠献上被致候様ニテハ不宣候間、一応勘弁ノ上被申聞度存候事、

一五二の二

右ニ付翌廿七日、

此度御当地へ差廻候大船、至極出来モ宜、堅牢便利ニ相見得、差当リ、公辺御用ニ相成品柄ニ付、据付砲器類迄モ献上仕候様、併手数モ相応相掛ケ製造仕候ニ付、勘考ノ上申上候様、御書取ノ趣承知仕候、素ヨリ大船製造ノ儀ハ、乍不及、皇国ノ御為製造候事ニテ、御用途相成候得ハ、誠ニ以本望ノ至難有奉存候、一体御注文被仰付置候大船二艘之内、一船ハ成就ノ上献上仕度内存モ御座候折柄、別テ難有奉存候間、此節ノ大船献上被仰付候様奉願候、以上、

六月廿七日

松平薩摩守

一五二の三

右大船ハ、大隅国大隅郡櫻島郷瀬戸村ニ於テ製造セラレ、嘉永七年寅十二月十三日、鹿兒島前ノ濱へ廻船試運用、翌安政元年丁卯二月十三日、御船奉行石原龍助・士官長稻留源左衛門其他数十名乗付、江戸之様廻航セリ、是則昇平丸也田原直助ノ筆記

製造ノ事実ヲ概記セムニ、田原カ記事ノ如ク、櫻島瀬戸村ニ於テ二艘（二十四間・廿間船各一艘）、同島有村ニ於テ二艘（間数同前）、同時ニ両所ニ於テ製造セラレタリ、御家老島津左衛門久・新納駿河仰、若年寄島津登包・御側御用人御趣法掛三原藤五郎・同福崎助七・同向井新兵衛・御船奉行長崎勘助・橋口松左衛門・石原新助、及ヒ製造掛田原直助・御船頭福崎某等、或ハ會計其他数十名有村ヲ本局トシ瀬戸村ヲ支局トス、材木ハ薩隅日ノ各山林ヨリ伐採シ、鉄具ノ重大ナル者ハ、大砲製造所ニ於テ鑄製シ、小品ハ各製造所ニ於テ製シタリ、同時ニ四艘ノ大船ヲ造ルハ、未曽有ノ事ナル故、見物ヲ請フモノ日ニ続々タリ、

一五三 水軍創設御予定〔安政四年六月十六日〕

薩隅日ノ三州ハ、東南西ノ沿海ニ面シ、海岸ノ守備ハ勿

論、船艦ヲ備へ、水軍ノ設必要ノ国体ナルカ故、水兵創設セラレムト其準備他事ナカリキ、西洋各国中ニモ、英國ハ世界第一海軍整備ノ由ナレハ、彼国制ニ則リ、取捨折衷調査スヘキ旨、石川確太郎へ命セラレタリ、石川へ御沙汰ニ、英國ハ日本ト稍同様ノ国体ナリ、唯天度ノ異ナルト寒暖ノ差アルノミニシテ、同シク島国ナレハ、海軍ヲ敵ニシ、世界中各所ニ屬地ヲ弘ルニ努ム、亜細亞洲中ニモ手ヲ延シ、印度ハ過半所領トナレリ、日本モ航海ヲ盛ニシ、英國ニ戻ラサル様國威ヲ張ラサレハ、真ニ國威拡張トハ云フベカラズ、出テ製スル程ノ勢ニ至ラサレハ、自國ノ備足レリトスベカラズ、其目的ヲ以テ船艦ヲ製造シ、水軍ヲ設ケ、國威ヲ張ルノ手初ヲナスノ見込ナリ、船艦ハ既ニ手初ナシタレトモ、其製未タ未熟、尚ホ此上研究シ、日本中ノ造船ハ引受ルノ見込ナリ、水軍モ双シテ精練シ、航海術モ日本中ノ模範タル迄ニ、興張ノ見込ナリトノ御言ナリシト、石川感発勉強他事ナク取調タリ 石川ハ元來蘭學者ナリシカ、道ノ命ヲ奉シタルニ因リ英學ヲ研究シ、年ナラズシテ英文ニ通スルニ至レリ

右 御沙汰在リシハ、安政四年六月^{十六}集成館ニ於テ拝承セルヲ、親シク傍聞セリ、実ニ日本ヲシテ宇内雄飛ノ基本タラシメ玉フ英意ト一同感佩セリ、

一五四 国旗旭章雛形ヲ製シ阿部正弘ニ示シ玉フ

安政二年乙卯六月、軍艦昇平丸献呈ノ内命アリテ後、閣老阿部伊勢守^{正弘}ニ向テ、日本国旗ノ制御治定アリシヤ否ヤ尋問シ玉ヒシニ、阿部侯答ニ、未タ国旗等ノ事処ニアラス、軍艦サへ御所望ノ際ナリ、御見込果シテアルベシ、承ハラムト懇請セラレシニ、公仰ニ、見込ハ付ケタリ、日本ノ国号ニ則リ、日之丸コソ相当ナラムト存ラレシニ、阿部侯、如何ニモ至当ノ御見込ナリ、日本ノ国旗ニ適ヒタル御見立ナリ、則チ之ヲ国旗ニ定メラル、將軍ヘス言上様言上^{言上}ベシトノ言ナリシ故、公ハ、然ラハ雛形造進スベシト約シ玉ヒ、則チ製セシメ、阿部侯へ贈ラレシニ、其筋ノ評議ニモ付セラレシニ、各国ノ旗章類似モナク弁識モ宜シトテ、將軍家賛成セラレ、国旗ニ治定、普ク布告セラレタリ、之ヲ大日本国旗旭章ノ起源トス、如斯公ノ尊意ニ出タルモノニシテ、今ヤ世界一般日本国旗旭章ナルヲ知ラサルナシ、然レトモ其御起源ハ知ル人罕ナルナラン、布告ノ後和蘭人頗ル感稱シ、世界第一等ノ旗章ナリト賞シタリトナン、而シテ昇平丸献呈ノ際ハ、旭章ヲ建テ献呈セラレタリ 此雛形ハ井上庄太郎担当シテ、小細工人肥後七左衛門御仕建物役ニ製造セシメタリ、教様ヲ製シ、其宜シキモノ

ヲ探テ、井上庄太郎阿部侯公用人山岡衛士ニ就テ提出セラレタリト、其製式ハ編羽ニ重地ニ、旭章ハ紅絹ヲ以テ記シタル者ナリ、予備トシテ旭ニ五光線ヲ画シモノモ製セラレタリト云、井上・肥後親話

一五五 異国船渡来ノ節制令並山川へ米国船渡来

ノ事実

一御軍役御手当ノ儀、受持ノ御役場ハ勿論、御領国一統深奉汲受、急変ノ御用速ニ可相動トノ趣ハ、追々相達置候通ニ候、然ル処近來異国船諸所へ渡来、既ニ去冬山川沖へ〔安政元年甲寅〕、北亞米利幹船来着、滞船中何ソ異変ノ儀ハ無之候得共、海底深淺ナト測量、致出帆候ニ付、此末同盟ノ船々渡来モ難計、依之御領内海岸防禦御手当ノ儀、此上ニモ尚亦敵重行届、急変ノ御用速ニ相運候様被 仰付候、当時御城下ハ勿論諸郷ニ至リ、不日ニ諸方出役被 仰付候ニ付、一統其旨ヲ存、士道堅固ニ相守リ、学問武芸無怠慢可致修練候、武道ハ一身ノ嗜ニテ、平常外ニ不頭深ク胸臆ニ滅ム、臨時ノ節勇猛ヲ発シ、可抽粉骨儀当然ノ事ニテ、皆共其心得ニ可有之候得トモ、武道弁へ薄ク候テハ、事ニ臨ミ血氣ニ乗シ、卒示ノ仕形モ有之、万一御難題相拘ル事共有之候テハ、別テ不可然事候ニ付、聊取違有之間敷、若

輩ノ面々ハ猶更其心得第一ニ候条、年輩ノ者共ヨリ兼テ致教示、屹ト可為致承服候、

一異国船渡来ノ節、取計向ノ儀ハ 公辺御法令モ有之、殊更当時ハ、精々平穩ノ取計ニテ、此方ヨリ事ヲ破リ兵端ヲ開キ候儀、屹ト不相成趣被 仰渡モ有之候間、向後異国船渡来ノ場へ被差出候面々、右 御趣意ノ程深汲受、聊取違ノ儀共有之間敷候、乍然異人共狼リニ上陸、国法ヲ犯シ放火乱妨難及手候ハ、速ニ可打払ハ勿論、事ヲ破ルノ時宜ハ至テ不輕儀ニテ、其場ノ主將見切ニテ、御軍令ノ作法ヲ以テ可致指揮候ニ付、其上ハ衆人致一和可抽忠勤候、血氣ノ勇ニマカセ卒示ニ事ヲ破リ、一旦勝利ヲ得候トモ、以後船々渡来ノ上、万々一御国威取失ヒ候様有之候テハ、誠ニ不容易訳柄、殊ニ從 公辺モ、御警衛向ノ義全備迄〔異国処分ノ幕令ニ、海岸ノ守備全整迄ノ間ハ平穩ナルヲ要スハ、精々平穩ニ可為取計旨度々被仰渡ル趣アルカ故、如此〕ノ趣モ有之候ニ付、柔弱ニ過候様心得ノ人モ可有之候得共、

皇国一統御軍備整候上、何分從 公辺被仰渡有之迄ハ厚加勵弁、屹ト心得違有之間敷候、

一異国船渡来ノ節、無用ノ雜人致見物、亦ハ異人へ相親

候儀、屹ト不相成様ニトノ趣ハ、先年来申渡置候ニ付、弥堅固ニ可相守候、勿論異人応答ノ儀ハ、夫々所持ノ役場兼テ被定置候ニ付、掛役々外異人へ近寄候儀共、屹ト不相成候、自然違背ノ輩於有之テハ可被処敵科候、其外異国船取計方ノ儀ハ、追々申渡置候通可相心得候、右ハ異国船取計向等ノ儀、従以前被 仰渡趣モ有之候得共、当時現在於

公辺モ異人へハ御会釈向モ有之候ニ付、御領國中ニテモ、右ニ準シ程能ク取計候様、猶又被 仰出候条謹テ奉承知、御趣意ノ程厚ク汲受、至其節聊心得違無之様、向々へ不洩様申渡、諸郷・私領へモ可申渡候、

五月十二日

下總島津久徴

筑後川上久封

近江末川久平

石見島津久浮

駿河新納久仰

(照国公文書にて校訂)

海防ノ説、漸ク盛ナルノ時ナルノミナラス、去ル天保八年ノ夏、同所へ米国船渡来以後、絶へテ来リシコトナカリシ故、衆人見物セント密ニ乘入リタルモアリ、或ハ懇願シ乘込ミタル者アリタリ、其際御家老新納駿河久出張シ、続ヒ

テ一組ノ兵銃隊四小队、大砲一隊、指宿郷迄出張シタリ、故ニ此時開戦ノ流説アリテ、頗ル混乱セリ、仔細ナキ測量船ナルハ判然タルコトナカラ、海防敵整ヲ令セラル、ノ折ナリシ故、出軍試験ノ為メ、一隊ノ兵出張セシ者ナリ、折柄大雷ニテ行軍頗ル困難ナリキ、

右ノ如ク、少年輩見物ノ為メ乗込、役筋ノ制止モ用ヒサリシ故、後日其輩ハ相当ニ処分セラレタリ、茲ヲ以テ後日ヲ誠メンカ為メ、此令ヲ布カレタルモノナリ、少年輩ノ所業兇暴ナリト雖モ、夷人へ向テ無礼ヲナシタルニ非ズ、全ク視察ノ為メ出タルモノナリ、仍テ数日在宿謹慎等ノ謹責ヲ受ケタルノミナリキ、

前記ノ如ク、外舶ハ素ヨリ無異平穩ナルカ故、警備ノ必要ナシト雖モ、操練ノ為メ指宿郷マテ行軍ヲ試ミ、或ハ鹿兒島ニ於テモ、大操練ヲ天保山ニ催シ、或ハ各砲台ハ遠距離射擲ヲモ試タリ、外舶来舶ノ折柄ナルカ故、種々ノ巷説起リテ、市街ノ人民ハスワヤ開戦ト唱へ、家財ヲ運ヒ、老幼ヲ携へ、避逃シタルモアリタリ、後ニハ一笑話トハナリニキ、

一五六 江戸大地震ノ事実並布達

一五六の一
去ル二日ノ夜安政二年乙卯十月二日、江戸大地震、上御屋敷芝三田本邸及近

地ノ各御殿廻リ芝邸ヲ上屋 其外諸所破損、御住居難被調、別邸ノ御座廻リ敷ト通唱ス 御惣方様御前様御子様ヲ云フ、者 澁谷御屋敷へ仮御住居被為在候段御到来候、依之御一門方、諸大身分其外月次

御礼罷出候面々、明十九日四ツ時登城、御両殿様可奉伺 御機嫌云々、十月十八 駿河久

一五六の二
安政二年乙卯十月二日ノ夜、江戸大地震、加之各所ニ出

火、其慘状筆舌ニ述ヘ尽スコト能ハス、芝本邸ノ御式台大御書院^{大御書院御造営ハ、嘉永七年ノ春ヨリ御着手、近頃落成シタ}、惜カナ、一朝大震ノ為メ過半崩壞シタリ、中ニモ御式台^{台モ崩レ、中御門ハ傾ヒテ僅ニ其形ヲ存シタリト云フ、○此御造営ノ費用凡ソ拾万兩ニ及ヒタリ、石材ハ伊豆地方、木材ハ木曾山ノ内ヲ買取}ラレ、御作事奉行森川孫大夫、下目付高崎藤太、其外大工頭等数名出張シテ伐リ出シタリ、其事実ハ旧邦秘録ニ詳記ス、斯ク盛大ニ建築セラレタルハ、篤姫君將軍家御結婚ニ、後日將軍臨邸ヲ願ハルルノ御予定ナリシニ依リト云フ、此回ノ地震ニ就テ、家屋ノ構造ニ注意セラレ、御長屋等古主トスヘキ旨厚ク令セラレ、江戸風ノ外見美ヲナス、震風に堪ニ堅固ヲ主トスヘキ旨厚ク令セラレ、震壞ハ破損シタルハ、修繕スルニ堅固ヲ專ラニセラレタリ、中ニモ高輪邸齊興公御迦ノ為メ、大奥御住居ノ傍ニ凡四坪位ノ御座ニ間ヲ新築セラレ、之レヲ地震ノ間ト唱ヘ、其構造五六寸ノ角材ヲ横積シ、之レヲ繁クニ一寸方ノ鉄棒ヲ以テシ、又其ハ殊ニ鉄棒ヲ繁ク用ヒ、屋根ハ銅板ヲ以テシ墜落傾倒ノ患ナカラシメ、発震ノ時ハ這ノ御座ニ御休居アル様、虫防其他風襲ノ災ヲ避ケルノ構造ナリ、渋谷邸及鹿兒島御城内御休息所ノ傍ニモ、同様建造セラレタリ、鹿兒島ニ建築ノ際ハ、広貫モ親シク見聞セリ、如何ニモ堅固ノ構造ナリ、御作事奉行谷山次郎右衛門、下目付諏訪甚兵衛等カ担当ナリキ、カラス、震動ノ初メ公ハ御庭へ御立退キ、御前様ニモ御一同庭中ニ夜ヲ明カサレ、其後外御庭御馬場ノ様御立退

キ、布屋ヲ張り、押巻ノ上ニ御座ナサレ、御湯水サヘ行届カサリシト云フ、公ハ高輪邸ノ御様子、或ハ在勤人数等ノ死傷如何ヲ御心ニ懸ケラレ、震動ノ少シ和ラキタル折々ニハ、御近習ノ者ヲシテ邸中ニ廻ラセ、死傷等ノ見届ヲ命セラレシニ、其者共死傷ノ事ヨリモ、破壊ノ次第ヲ言上セシニ、仰ニ、家ノ破壊ハ修造スルニ仔細ナシ、行キ廻ラスルハ死傷ヲ調ヘンカ為メナリ、大切ナル人輕我アリテハ不憫ナルカ故、其救助療治ニ怠ナキコソ肝要ナリ、家老・番頭直ニ行廻リ療治方等救助ノ下知ヲナスヤ否ヤ、我等行キ廻リテ下知モナスベケレトモ、却テ妨ニモナルヘケレハ、差扣ヘタリ、重テ死傷ノ見廻命セラレタリ、然ルニ御家老・番頭等御安否伺ニ出頭セシカハ、我等ノ処ハ無事、何モ懸念ナシ、早ク長屋々ヲ行廻リ、^(々脱丸)死傷ノ療治又ハ賄方等ノ手当肝要ナリ、一刻モ遅々スル事勿レトノ御言ナリシ故、其俣行廻リ諸事ノ手配ニ掛レリトソ、又高輪邸ノ御使帰リ来ルヲ頻リニ待兼玉ヒ、三四回御使ヲ出サレ、御別条ナキヲ聞召サレ、御安心ノ御様子ナリシトソ、如此士民ヲ愛撫セラル、ノ厚キヲ僉人伝承シ、感涙ヲ流シタリトナム、○今回ノ地震ハ非常ノ大震ニテ、両大城^{両大城トハ、江戸本丸・西丸ヲ云フ}ヲ初メ、各藩邸・寺社・

市街ニ至ル迄、多少損壞セサルハナク、加之出火前代未聞ノ大災ナリキ、○我藩邸御式台大御書院等ハ、御建築間モナキ新殿ナルニ、悉ク崩壊セリ、邸中死傷モ少カラス、惘然ナル次第ナリキ、公ハ究理ノ学ヲ好マセラレ、或ハ天文学ノ如キハ殊ニ泰西学说ヲ御好ミ、常ニ氣象寒暖ノ度、或ハ晴雨計ニ御氣ヲ注ケラレタルハ、咸ナ人知ルガ如シ、故ニ発震ノ前頃、或ル学者ノ説ニ、江戸中各所ノ井水ニ塩味ヲ含メルコト甚シク、必ス震災アラント云ヘルヲ聞召サレ、如何ニモ震災ニテモアラン、晴雨計ノ度ニ顕ハレタリト、予メ心スベント、布屋等ノ備ヲ命セラレシニ、奉命ノ者ハ私語キナカラ命ノ如ク備ヲナシタリシニ、果シテ一七日許ニシテ、大震動ヲ発シタリト塩味ヲ生シタルヲ発見、如此氣象測候ニ注意シタルハ、今シタル学者ノ姓名失スニシテハ珍ラシカラスト雖モ、嘉永・安政ノ頃迄ハ外国ノ事情ニ暗ク、随テ天文究理ノ道ヲ知ルモノ罕ナリシニ、斯ク心ヲ用ヒ玉ヒシハ、真ニ感スヘキコトニコソ地震及火災ノ形況

事実ハ旧邦秘録ニ詳記ス

一五七

外夷処分ノ御意見阿部正弘〔若中堀田正勝の詔〕内申ノ御書

〔安政五年〕

〔墨夷之禍、神州ノ大患、不容易当今不容易〕

御時節ニ付、猶又諸大名所存御時節ニ付、云々照

聞召度、且永世安全ニ奉安〔並九〕

叡慮、皇国一同後患無之方略可及言上旨

勅答ノ趣並御添書慎テ奉承仕、先達テヨリ内々再度奉〔奉見候照〕

申上候外、別段所存モ無御座候得共、左ニ申上候、

勅答之趣ニテハ、下田条約ノ外ハ難遊

御許容御事ト奉存候、元来万国ニ致卓絶、赫々タル神〔全体照〕

州、夷狄之輕蔑毫髮モ可受儀無之、任弘安之御旧例、〔若次狄ノ輕蔑毫髮モ有之候ハ、任弘安之御舊例、云々照〕

彼カ非望之邪曲ヲ御糾シ、尊王攘夷ノ大本ニ被為基、〔論理之本照〕

鎖国ノ御良法弥堅固ニ被遊御用、万一襲来候共、武備〔神武武〕

充照、御誅伐当然ト奉存候、乍併当今之時勢能々相

考候ニ二百年來御治世打続、自然奢侈之風相競、万民〔勢弱カ〕

怠惰ニ流レ、上下一同今日之事ニ逐レ、武備忽セニ相〔怠惰ノ志ヲ生シ照〕

成候段、誠ニ恐入奉存候、當時外寇攻守之具ハ、第一〔第一大〕

大砲・礮台ハ勿論、堅牢之軍艦十分ニ無之候テハ、夷〔砲・礮台、或ハ堅牢ノ軍艦等云々照〕

狄トハ申ナカラ當時戦闘ニ取馴、戎器ヲ功ニ製造イタ〔功製イタノ照〕

シ、航海ニモ熟練之者共御座候得ハ、必勝之算如何可

有之哉、右ニ付テハ

勅詔之趣ヲ以テ、御取扱相成候ハ、孰レ兵端相開ケ

可申哉、勿論

勅定 台命ニ御座候へハ、人心致激勵、為報国尽忠誠候〔忠誠照〕

ハ、必定之事御座候得共、前文通武備相弛、大砲・礮台・軍艦杯御手薄ニテハ、人々如何程奮発仕候共、忠魂難相遂場合モ可有之ト奉存候、殊ニ彼等ハ数ヶ国合〔御脱カ〕

体ニテ、若四方之辺海ニ致出沒候ハ、終ニ国力及疲弊、内乱モ難計甚懸念仕候、国之大事ハ在祀与戎ト古伝ニ

モ相見得候通、実ニ億兆民命之所寄、皇国ノ御浮沈ニ相拘候〔大機會照〕、大事ト奉存候間、能々御思慮被為度、天時不〔在脱カ〕

如地利、地利不如人和、又王侯設險以守其国、陰々時〔之カ〕用大矣哉等之古言御反省アラセラル、ノ御時節ニテ、

第一人和、其次ハ諸御手当精実ニ御行届無之候テハ、〔無獲所御行届照〕

皇国之 御守護難被整世態ト奉存候、尤旧典ニモ別段外夷ヲ不近付トノ事モ無之、慕〔姓氏田宅迄モ賜、東照宮ヨリ英夷へ交與免許之〕

皇猷帰化スル者エハ、姓名ヲ賜ヒ伍ヲ与ヒラレ、田宅〔御脱カ〕御朱印頂戴被仰付候処、寛永以来云々照

迄モ被下置候趣相見候得共、寛永以来彼之邪宗ヲ御一洗被為在、御打払之建法此節御変革之儀、彼ニ被圧候様相見得、実ニ千載之

御遺恨共可申候得共、得ト天下ノ形勢相考候ニ、一旦忍小成大之御趣意ヲ基本ニ被相居、仮約定通

御許容被為在候外〔有間敷奉存候照〕、御許容被為在候方可然ト奉存候、尤条约之内、天主堂〔禮〕取立之儀ハ、今一度御談判被為在度、尤和好之儀ハ、

古ヨリ多ク偷安之策ニ出、遂ニ從是敗衄ヲ取候事、古来其例モ不少候得共、時ト位ニ応候儀肝要ト奉存候、併前文仮約条通

御許容ニモ相成、自然苟安之風押移、夷賊之邪誘ニ陥候〔彼之真賊照〕、〔應候線〕肥成候テハ照

訳ニモ相成候テハ、御興復迎モ六ヶ敷、天下之御一大事、災害無此上奉存候間、何卒仮約条御取結之上ハ、御興業之御趣意寸餘モ無御油断、非常之御武威四海〔非尋之御美斷被相立、御武威〕四海ニ云々照

ニ光被致候様、御盛徳ヲ被為修、万事旧染之汚習、奢侈怠惰之風俗御一変、諸藩之窮迫ヲ御取救富国強兵之基ヲ被為樹〔禮〕、上

下一同奮胆之憶ヲ成シ、外寇制御之設十分ニ被為整度、左候テ彼等弥邪謀相施候ハ、不被為差置〔聲罪御征伐照〕

御征伐有御座度、左候得ハ必勝無疑奉存候、自然又彼ヨリ皇化ニ服候様可相成候間、猶又衆議言上之上、御決定被為在度奉存候、以上〔勿論勅諭台命之上ハ、和戰兩案如何様共可奉畏候、以上照〕

〔安政五年五月二十八日〕

八月乙卯 松平薩摩守

這ノ御意見書ハ、表立テ提出セラレタルニ非ス、阿部候ハ御

懇交ノ間ナルカ故、御内々送ラレタリト云フ、

一五八 亜米利加官吏登營後御建言〔安政四年〕

今度亜米利加官吏登 城被仰付、追々応接等之次第同席中〔為心得御達ニ相成、〕存寄モ有之候ハ、申上候様被

仰出候趣、陸奥守達伊ヨリ委曲申越、難有奉承知候、応接之書面、一々不容易御国家之御大事ニテ、卒忽之所存難申上事ニテ御座候得共、戦争ニ及ヒ

御勝利被為在候テモ、御国家之御損亡莫大之御事〔ト奉存候間、申立候箇條之内、〕実ニ御差支之廉ハ格別、其外之儀ハ御差許相成候方、当時之御良策欵ト奉存候、左候テ異館都下江エ被差置、商道十分ニ御開相成候上

ハ、外国ヘモ通船被仰付、五大洲御随意ニ制御相成候様、御処置当然ノ御事ト奉存候、就右外夷入込候様成行候儀ハ、人心ヲ固結公ノ御イタシ候儀專要ニテ、第一ニハ

西丸 建儲之御事ト奉存候、乍然是迄 儲君不被為建人心不安ニ奉存候折柄故、少モ早ク儲君御治定被仰出候ハ、上下一同人心安堵、

皇国ノ御鎮護モ弥根剛ク相成可申、勿論

御血統御近キ御方、当然之御事ニハ御座候得共、斯ル御時節ニ御座候得ハ、少ニテモ御年増之御方、天下人心之固メニモ可相成、然レハ一橋様御事、御器量御年

齡旁外ニハ被為在間敷奉存候、御台様云々照、大御台様天璋御入與被為在候御事故、偏ニ御出生院殿當然ニ御座候得共照、大御出生ヲ可奉待儀ニ御座候得共、当時之形勢ニテハ、一日モ早ク御養君被 仰出度奉存候及テ所ニアラズ、

且亦〔御軍制十分被仰出、〕諸大名エモ奢侈之風俗ヲ一洗セシメ、武備十分ニ手当仕候様、敵敷被 仰出度、無左候テハ兎角人心弛ミ勝ニ相成、外夷之蔑如ヨリハ、人心苟安姑息ニ墜リ候儀最可怖奉存候、此儀敵密ニ被仰付、且建儲之御事モ被仰出候ハ、上ハ被奉安

叙慮、下ハ諸侯以下万民之心ヲ御固メ被遊、尤征夷之御當務ト奉存候、此等之趣、外様之身分申上候儀、幾重ニモ憚多奉存候得トモ、御由緒広大院殿柄旁御国家ノ御為ヲ奉存、日夜心痛罷在候折カラ、存寄上候様被仰出モ有之候ニ付、不願恐申上候、以上、

九月 日 乙卯 松平薩摩守

這ノ御建言外夷処分ハ表面ニシテ、専ラ儲君ヲ撰立ヲ要點(ノカ)

トセラレタル者ノ如シ、而シテ近衛家・三條殿へモ写ヲ以テ御報告アリシト云、御奉呈ノ御手順ハ、御内使ヲ以テ閣老堀田備中守へ就テ捧ケラレシト云フ、

一五九 質素節儉並風俗矯正ノ訓令

質素節儉相守、文武ノ修行不怠様心掛、徒ノ不致集会様ニトノ儀、追々被仰出置候通ニテ、祝事等ノ儀ニ付テハ、宰相齊興様御家督中、応分限振舞向等モ被定置、一統旧染ノ習俗モ相改リ候得共、依御役場昇進等之節々、奉行・頭人・書役等ニモ、夫々同席相招キ候仕來ノ向モ有之ニ候処、間ニハ今以旧弊相流レ、(染也)分限不相応ノ致振舞候モ有之哉ニ相聞得、甚不勘弁ノ至ニ候、難有御趣意汲受薄キ筋ニ相当リ、屹ト御沙汰可被為及事候得共、此節迄ハ御有免被召加候条、以來ハ礼節ニ拘候儀、天保ノ度被定置候通相守リ、尚又質素節儉相用、文武ノ修練無怠様可申渡旨、御沙汰被為在候段申來、誠以奉恐入次第二候条、難有御趣意ノ程深奉汲受、右ノ趣無取違、屹ト旧弊相改メ候様、向々へ不洩様可致通達候、

十二月

豊後久

(順聖公年譜ならびに薩藩史料齊彬公にて校訂)
近代驕奢ニ流レ、諸局一般酒食ヲ事トスルカ如キ風俗ニ立到リ、聊祝事アルカ或ハ昇級等ニ付テ、同寮集会ヲ催シ、(條)分限ニ応セサル酒肴ヲ設ケ、遂ニハ乱酔ニ及ヒ、其醜体甚シキカ故、齊興公嚴シク禁令ヲ下サレ、公ニハ御家督涯ヨリ尚又沙汰セラレシト雖モ、兎角其弊去リ兼ネタルカ故、如此訓誡セラレタリ、畢竟諸局ノ中ニモ重立タル御家老座等ノ風俗革マラサルヨリシテ、一般ニ於テモ旧習ヲ存セリ、御家老座等ニ奉職スル者ハ、若年ノ時ヨリ筆吏ノ業ニノミ従事シ、筆頭上席ノ者ニ阿媚シ、種々ノ口実ヲ設ケ酒食ヲ催シ、阿諛ノ風甚シ、政庁ノ風俗斯ノ如クナルカ故諸局其風ニ遷リ、同役参会ト唱へ、昇級等ヲ冀望スルニハ必ス酒食ヲ催シ、夫レカ為メ種々ノ醜体ヲナスニ至レリ、殊ニ江戸邸在勤ノ者ハ甚シキ悪弊ヲ生シタリ、此等ヲ聞召サレ、如此毎々嚴訓セラレシナリ、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数九二枚）」の記載あり〕

目録

- 勢州海岸巡視輕弁令
- 万石以上ノ面々火之番等省費布達
- 領知判物頂戴心得達書
- 大森及ヒ徳丸原大砲稽古願云云布告
- 諸家屋鋪ニ於テ貫目以内ノ砲発放不苦云云布告
- 將軍家御法事白銀献上其他布告
- 水戸前中納言殿御軍制改正ニ就テ登城達書
- 諸国丑糶増石達書

神田明神祭練物御曲輪内へ引込ニ不及旨布達

大地震ニ就テ諸大名登營達書

火之元取締達書

大地震及ヒ大火ニ就テ月次御礼等登城ニ不及達書

万石以上ノ面々地震火災ニ就テ帰国勝手次第達書

両閣老官宅引払下屋鋪住宅布告

地震大火ニ就テ拜借金年賦上納年延達書

文字磨減老歩銀曳替歩合云云達書

地震大火ニ就テ規式ニ関スル諸事省略布告

火事装束制度

御門番ノ諸家簡易云云布告

地震大火ニ就テ諸事省略供列レ減少布告

遠国奉行旅装伊達道具等減少布令

外夷渡来或ハ地震大火ニ就諸家人員減少隠居厄介者在所

勝手願出達書

一六〇 勢州海岸巡視輕弁令

卯正月廿一日、為御詰日秋元〔志朝 鶴林藩主〕但馬守様・大久保佐渡守〔忠美、島山藩主〕

様被成御出仕候処、阿部伊勢守様御渡候由ニテ、〔正月二十一日〕柳生〔久包、大目付〕

播磨守様被成御達候御書付写一通、以御手紙来ル、

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付江

○以下の文書は、本文第一四四号文書中の四（安政二年正月二十一日付老中達）と同文により略す。

一六一 万石以上ノ面々火之番等省費布達

卯三月二日、為御詰日稻葉長門守様・黒田豊前守様被

成御出仕候処、阿部伊勢守様御渡候由ニテ、筒井肥前

守様被成御達候御書付写一通、松平（乗全、老也）和泉守様御渡候由

ニテ、堀伊豆守様被成御達候御書写二通、以御手紙来、

卯二月廿九日阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付江

万石以上之面々、両山（東嶽山、三縁山）其外、火之番御門番并臨時

勤番等相勤候節、無益之雜費不少趣ニ相聞候、（得脱カ）仮令前

々ヨリ之仕来ニ候共、当時嚴敷御檢約中、追々質素節

儉之儀、厚被 仰出モ有之、武備之儀、專御世話モ有

之候折柄ニ付、御警衛筋ニ不拘儀ハ、旧習ニ不泥、格

別ニ省略致シ、無益之費用聊モ無之様可被致候、就テ

ハ、火之番（上野芝両寺、消防ノ通唱）御門番勤中、前々ヨリ之仕来ニテ、

夫々贈物致シ候廉々モ有之哉ニ相聞候得共、是又御儉約御年限中ハ、先規仕来ニ不拘、凡三分之一ヲ規矩ニ致シ、相贈候様可被致候、

右之趣寄々可被達候、尤万石以下ニテモ相達可然向々江ハ、為心得可被達置候、

二月

〔國史大系統徳川実紀にて校訂〕

一六二 領知判物頂戴心得達書

松平和泉守殿御渡

御詰衆

大目付江

一領知之

御判物（各藩領地、証書通唱）御朱印初日頂戴之面々ハ、為御礼老中、

若年寄中江相廻リ候事、

一病氣・幼少之面々名代之分モ右同断之事、

一二日目頂戴在國・在邑之面々名代之分モ、御礼廻リ

之儀、初日之通タルヘク候、尤承知之上、為御礼使

札差越候事、

右之通可被相触候、

三月

〔國史大系統徳川実紀にて校訂〕

這ノ布達ニ対シ、本藩拜受ノ例規末藩佐土原ハ本家拜請シ、
而シテ授与セラル、ハ、寛永ノ頃ヨリ今ニ異ナルコトナシ、

五月

(大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂)

一六三 大森及ヒ徳丸原大砲稽古願云云布告

卯五月廿七日、為御詰日牧野豊前守様(盛成、田辺藩主)・大岡兵庫頭様(忠恕、岩槻藩主)

被成御出仕候処、松平伊賀守様被成御渡候由ニテ、簡(五月二十七日)

井肥前守様被成御達候御書付写一通、兵庫頭様衆ヨリ御用廻状ヲ以御到来、

松平伊賀守殿御渡

御詰衆

大目付江

大森村並於徳丸原ニ、大砲稽古之儀、是迄願書差出願(ハ脱カ)濟之上稽古致シ来候処、以来願書差出候ニ不及候間、日限等之儀、前以海防掛御目付ニ承合候テ、稽古候様可被致候、尤万石以上之面々為見置相越候儀ハ、前日迄ニ可被相届候、

但御旗本之面々 御家人子弟等師範之者稽古ニ付、
為手伝相越候儀モ不及届候間、前日迄ニ御目付江
可被相達候、
右之趣向々江可被相触候、

一六四 諸家屋舖ニ於テ貫目以内ノ砲発放不苦

云云布告

卯六月七日、土井大炊頭様(利根、古河藩主)・御同姓能登守様被成御出(輪出ノ旨)仕候之処、阿部伊勢守様御渡被成候由ニテ、筒井肥前(六月四日)

守様御達被成候左之御書付写一通、大炊頭様ヨリ御用廻状ヲ以来、

阿部伊勢守殿御渡

大目付江

鉄砲角場在之屋敷々々ニテ、調練稽古ノ節、空砲打放候玉目之儀、是迄平常実丸稽古之玉目ニ準シ候事ニ候得共、以来百目玉迄稽古ノ角場ニテハ、卷貫目玉迄ノ空砲打放シ不苦、尤調練稽古ニ無之分ハ、只今迄ノ通可被心得候、(箱脇カ)

一關八州ニ於テモ、炮術稽古ノ儀、是迄場所ニ寄、四季打不相成候得共、術業御引立ノタメ、此度御拳場近辺迄モ四季打被仰出候ニ付、向後關八州其外イツレニ於テモ、四季共稽古不苦候間、場所相応ノ業熟練可致候、尤打場

新規取立等相伺候儀へ、只今迄ノ通可被心得候、

但村方四季打鉄炮ノ儀へ、是迄ノ通可心得候、

右之趣可被相触候、

六月

(大日本古文書(幕末外国関係文書)にて校訂)

一六五 將軍家御法事白銀献上其他布告

御香奠献上之覚

一 白銀拾枚

六拾万石以上

一 同 五枚

三拾万石以上

一 同 三枚

拾万石以上

一 同 二枚

五万石以上

一 同 壹枚

壹万石以上

一 同 貳枚

三拾万石以上ノ嫡子

一 同 壹枚

拾万石以上ノ嫡子

一 壹万石以下へ、御遠忌御法事ノ節差上来候分白銀壹

枚、以上、

覚

一 壹万石以上ノ面々、御香奠献上ノ使へ染帷子・長袴

ニテ、朝六時、表門通被差越之方丈へ可被献之事、

一 壹万石以下三千石以上ノ面々、使者へ染帷品・半袴

ニテ、四時ヨリ九時迄ノ内、裏門通被差越之方丈へ可被相納候事、

一 此ノ外ノ面々使者モ染帷子・半袴ニテ、九時ヨリ八

時迄ノ内、裏門通被差越ノ方丈へ可被相納之事、

右之通当月二十三日可被献之候、以上、

一六六 水戸前中納言殿御軍制改正ニ就テ登城達

書

〔融出ノ日〕〔貞和、笠間藩主〕 卯八月十五日、牧野備後守様被成御出仕候処、阿部伊

勢守様御渡被成候由ニテ、筒井肥前守様被成御達候御

書付写一通、備後守様ヨリ御用廻状ヲ以来、

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付江

水戸前中納言齊昭殿

○以下の文書は、本文第一四四号文書の二一（安政二年八月十四日付老中達）と同文により略す。

一六七 諸国困艱増石達書

〔融出ノ日〕〔忠美、鳥山藩主〕 卯八月廿七日、為御詰日大久保佐渡守様・阿部〔正恒、佐貫藩主〕因幡守

様被成御出仕候処、阿部伊勢守様被成御渡候由ニテ、

堀伊豆守様被成御達候御書付写式通、因幡守様ヨリ、御用廻状ヲ以来ル、

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付江

去寅^(女改)元^(嘉永)年地震、当年出水ノ国々モ有之候得共、諸国

一体ノ作方、当年ハ宜敷趣ニ相聞候付、天保ノ度増
困穀全備不致向ハ勿論、不作等ニテ銘々用途ニ遣括
候分モ不少儀ニ付、年限ニ不拘可成丈穀合詰戻、此
節柄無油断、江戸在所共、困穀相増候様心懸、領内郷
中ノ貯穀等モ相増候様可被致候、増困穀全備イタシ
居候面々ハ、猶以当節柄別段精々困穀相増候様被心
懸、尤詰戻シ困増イタシ候分ハ、其段早々可被相届
候、右之趣方石以上ノ面々々寄々可被相触候、

八月

一六八 神田明神祭練物御曲輪内へ引込ニ不及旨

布達

大目付江

神田明神祭礼ノ練物等、御曲輪内へ引込候ニ不及候、

尤是迄ノ通、祭礼執行ヒ、市中其他相渡候儀ハ、勝手
次第ノ事ニ候、

右之通寺社奉行町奉行へ相達候間、得其意、向々へモ
為心得可被達置候、

八月

一六九 大地震ニ就テ諸大名登營達書

卯十月三日、大御目付跡部甲斐守殿ヨリ、秋元但馬守
様御一名ノ御切紙ヲ以、阿部伊勢守様・久世大和守様
^(十月三日)
御渡候由ニテ、被成御達候御書付写式通御用廻状ヲ以
来ル、

久世大和守殿御渡

御詰衆

大目付江

昨夜地震^{二日}ニ付、為伺御機嫌方石以上ノ面々、月番ノ
老中へ可被相越候、

但病氣・幼少ノ面々ハ、以使者可被相伺候、

一在国在邑ノ面々ハ、飛札ヲ以御機嫌可相伺候、

右之通可被相触候、

十月三日

一七〇 火之元取締達書

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付江

火之元取締ノ儀ハ、先達中御世話モ有之、都テ取締行届候儀ニハ候得共、此節追々火事沙汰モ有之候間、諸事去ル寅年相達候通相心得、組ノ者共見廻リ方等繁々為見廻、厚ク心附候様可被致候、

右之通町奉行へ相達候間、武家屋敷ニテモ猶更火之元入念申付候様、向々へ可被達候、〔十月三日達カ〕

一七一 大地震及大火ニ就テ月次御礼等登城ニ不

及達書

只今申ノ下刻跡部甲斐守様ヨリ、阿部因幡守様御一名ノ以御切紙、阿部伊勢守様御渡被成候由ニテ、御書付写式通被差越候間、御通達被成候旨ニテ、因幡守様衆ヨリ御用廻状ヲ以御書付写ニ通来、

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付江

此度、地震并大火ニ付、諸向難波ノ儀ヲモ 被思召候

ニ付、当年中月次御礼不被為 請、玄猪御祝儀モ不被

仰出候間、一統不及出仕候事、

右之通向々へ早々可被相触候、

十月四日

一七二 万石以上ノ面々地震火災ニ就テ帰国勝手

次第達書

諸大名上屋敷地震并火災トモ有之候向、格別可為難儀思召候間、勝手次第御暇可被下候、

右之通万石以上ノ面々へ早々可被達候、

十月〔四日達〕

一七三 兩關老官宅引払下屋舖住宅布告

大目付

伊勢守阿部

紀伊守藤内

此度、地震ニテ伊勢守ハ居屋敷潰候ニ付、本郷丸山下屋敷、紀伊守ハ居屋敷焼失ニ付、永田馬場屋敷、何レモ当分住宅候、尤見廻等ノ儀ハ断ニ候、

右之通寄々可被達候、

十月(四日選)

一七四 地震大火ニ就テ拝借金年賦上納年延達書

卯十月十日、為御詰日阿部因幡守様被成御出仕候之処、

阿部伊勢守様御渡候由ニテ、(十月十日)跡部甲斐守様被成御達候

御書付写老通御用廻状ニテ来ル、

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付江

今度地震ニテ、居屋敷皆潰・半潰并類焼ノ面々、

思召ヲ以テ、兼テ諸拝借有之分年賦上納ノ儀、年延ニ

被成下候間、当暮上納ニ不及候条、其向々へ寄々可被

達候、

十月

一七五 文字磨滅老步銀曳替步合云云達書

大目付江

此節、老分銀手摺ノ分通用差滞、相對ヲ以テ引ケ方歩合等請取引替候趣ニ候処、一己ノ私ヲ以歩合等請取引

替候ハ、心得違不埒ノ至候、全手楷極印(摺)文字磨滅シタル印ヲ彫スルヲ云

不見分ハ、一朱銀ト引替可遣候、焼候分ハ是迄ノ通定

法ノ歩合引ケ方ヲ以、是又引替可遣候間、銀座へ差出

引替可申候、以後少々ノ手摺ヲ危踏、通用差支候様成

心得違一切不致、無滞通用可致候、尤上納金無差支、

包方可致旨、銀座へモ申渡候間、少々ノ手摺ヲ彼是申、

歩合等請取引替候者於有之ハ、吟味ノ上急度答可申付

候、右之趣、武家・在・町・寺社領共不洩様、御料ハ

御代官、私領ハ領主地頭ヨリ可被相触候、

右之通可被相触候、

十月

一七六 地震大火ニ就テ規式ニ関スル諸事省略布

告

(触出ノ旨) 卯十月廿日、為御詰日阿部因幡守様被御成出仕候処、

阿部伊勢守様牧野備前守様御渡候由ニテ、(十月十九日)柳生播磨守、

様御達被成候御書付写都合五通、御用廻状ヲ以来、

阿部伊勢守殿御渡候

御詰衆

大目付江

今度諸事簡易ノ御制度ニ被為復候御旨モ有之、殊ニ此
度地震ニ付テハ、諸向一同難渋ニ及ヒ、武備其外容易
ニ旧復モ難相成候ニ付、銘々衣食任ヲ始、諸事格外ニ
省略可致候、就テハ

殿中ヲ始着服ノ儀、当分左ノ通可相心得候、

一 熨斗目ハ正月御規式十五日迄、且

御宮 御靈屋ハ

御參詣ノ節斗相用、尤無地ニテモ、腰明ニテモ勝手次
第可致着用候、其外ハ都テ服紗小袖服紗袷可致着用候、

但是迄熨斗目長袴ノ廉モ、熨斗目不相用、上ハ勿論

長上下モ着用ニ不及候、

一 勅使參向等ノ節ハ是迄之通、其外重キ御祝儀事等ハ格
別ノ儀ニ付、其時々可相達候、

一 万石以上以下家督始テ

御目見、其外御礼ノ節、着服ノ儀ハ、是迄ノ通可相心
得候、尤披露并進物持出ノ役人等ハ、当日ノ服用用可
申候、

一 八朔御礼ハ是迄ノ通、七夕ハ染帷子、重陽モ万石以上

ニテモ、花色ニ不限、常ノ服紗小袖着用不苦候、

但七夕・重陽共長上下着用ニ不及候、

一 殿中麻上下ノ節モ木綿紋付ノ儀ハ、服紗同様相心得、

着用可致候、肩衣袴ノ儀モ時節ニ不拘、麻木綿并單ヲ
用候儀、可為勝手次第候、此外庵末ノ品相用候儀、銘
々心次第タルヘク候、勿論家来又モノ等、弥以僮服相
用可申候、惣テ無益ノ入費相省、實用ノ武備相整候様、
専務ニ可心懸候、

右之通被 仰出候間、向々ハ不洩様可相触候、

十月(十九日)

一七七 火事裝束制度

大目付江

火事裝束ノ儀、以来花美ノ品、相用申間敷候、羽織ハ
是迄ノ品相用候テモ不苦、頭巾ハ襷袴枚、紋所式ノ長
サ二尺程ニ限り、縫模様等一切無用可致候、且又目立
候踏込ノ類相止、イカ袴小袴ノ内相用可申候、尤股引
相用候向ハ、是迄ノ通可相心得候、

但当分有合ノ品相用候儀ハ不苦候、

右之通向々ハ不洩様可被相触候、

十月(十九日)

一七八 御門番ノ諸家簡易云云布告

大目付江

御門番相勤候面々、近年勤方瑣末ノ儀迄モ、手重ニ相成、手数相懸リ、入費等モ多分ノ趣ニ相聞候、其上近來武備警衛ノ儀ニ付テハ、銘々難捨置用途モ相嵩可申処、今度諸事簡易ノ御制度ニ被為復候旨モ有之ニ付テハ、以來大手内櫻田御門并内外御曲輪御門番勤方、諸事は迄ノ定ニ不拘、格外ニ省略致、譬ハ拾万石高ノ者モ、五万石ノ分限ニテ相濟候程ニ省略無之候テハ、省略方御世話ノ詮モ無之事ニ付、右ノ心得ヲ以テ諸事無益ノ入用ハ勿論、万端手数相省、人数并武器ノ儀モ無用ノ虚飾ハ尽ク相止、実備ニ於テハ、手薄ノ儀無之様可相心得候、

一 外曲輪御門々外張番所并御門下番所御減可有之候、

一 御曲輪土手并御堀へ捨物其他異変ノ儀有之節ハ、是迄ノ通御目付へ可相届候、右取扱方其外土手上松枯枝伐取、草刈等ノ儀、以來手数不相懸様被成下ニテ可有之候、依之、向々は迄仕来候手續、其外諸人費等モ有之候ハ、取調委細御目付迄可書出候、

但寄合御門番ノ面々ハ、長柄鎗不及差出置候、

右之通相心得、猶委細ノ儀ハ、御目付鈴木四郎左衛門

・松平久之丞へ可被承合候、

右之趣相達、可然向々へ不洩様可被達候、

十月十九日

一七九 地震大火ニ就テ諸事省略供列レ減少布告

牧野備前守殿御渡候御書付写

大目付へ

諸家供連省略之儀ニ付、前々ヨリ、度々触面有之、去寅年中モ敵敷省略方相達、追々相減候向モ有之候得共、今般、厚被

仰出之御趣意モ有之、且御供減ヲモ被

仰出候折柄、旁此度ノ天災ニ付テハ、諸向共品々差支モ可有之候ニ付、万石以上以下共、当分ノ内供連絡外減少致シ召連不苦候、併減少而已専一ニ心得、余リ不都合ノ行粧ニ相成候テモ如何ニ候間、其辺ノ儀ハ銘々勘弁致シ、省略可被致候、左候ハ、右減シ候廉々早々可被相届候、

右之通向々へ可被相触候、

十月(十九日)

一八〇 遠国奉行旅装伊達道具等減少布令

大目付へ

遠国奉行且遠国御用等被

仰付候面々、旅装ノ儀、以來伊達道具各藩侯國傳為持候

器通唱

ニ不及、旗并竿・幕・矢玉等行列ニ不差加荷造ニ致シ、

持越可申候、持弓ノ儀勝手次第為持可申候、

一 鉄炮筒數ノ儀ハ、是迄ノ振合ニ不拘、持越不苦候間、

相増候節ハ可相候儀、

一 雨天ノ節相用候長柄傘ノ外、台立傘等為持候儀、相止

可申候、挾箱・簀箱ノ儀モ為持不申候テモ不苦候、

一 万石以下ノ面々家来共、長棒駕籠并徒召連候儀、可為

無用候、

但具足櫃為持候共老人持ニ可致候、

一 万石以上ノ面々モ、右ノ趣ニ相心得、參勤交代等ノ節

供連行装省略致候儀、可為勝手次第候、家来共旅装ノ

儀モ右ニ準シ夫々可有省略候、

右之通向々へ不洩様可被相触候、

十月(十九日)

一八一 外夷渡来或ハ地震大火ニ就諸家人員減少

隱居厄介者在所勝手願出達書

(勝頼、福島藩主)

卯十二月二日、為御詰日板倉内膳正様被成御出仕候処

阿部伊勢守様并久世大和守様御渡候由ニテ、(十一月晦日)土岐丹波

守様被成御達候左ノ御書付式通、内膳正様御用廻状ヲ

以來、

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付へ

近年外夷度々渡来ニ付テハ、守衛ノタメ、御府内人別

多ニ相成、オノツカラ、失費モ相増候段ハ無抛筋ニ候、

然ル処、今般ノ天災ニ付テハ、莫大ノ入費モ相増、窮

迫ニ陥リ、猶更可為難儀、殊ニ此度不慮ノ死亡又ハ怪

我人等モ不少哉ニ相聞、何トモ敷敷次第候、畢竟夫等

モ中古ニ見合候へハ、追々御府内人数多ニ相成候事ニ

付、諸家屋敷々々ニテモ、家作等建詰候様ニ相成候故、

猶更非常ノ災害遁兼候者モ夥敷儀ニ可有之、一体近来

諸藩困窮ノ上、右様ノ儀相加リ、殊ニ外夷差湊候折柄、

当節ノ処ニテハ、御府内老幼ノ男女子別減少有之度ニ

付、万石以上隠居并厄介ノ男女子等在所勝手ニモ可被
仰出ノ処、先ツ此節ハ不被及

御沙汰ニ付、向後家作ハ勿論年中ノ暮方等迄モ銘々家
ノ仕来ニ不拘、万端手輕ニ取賄、聊外見ヲ不厭、質素
省略ヲ相用可被申候、尤右ノ趣等閑ニ相心得候向有之
候ハ、急度

御沙汰可被及候事、

但本文ノ通相達候ニ付テハ、隠居并厄介ノ男女子等

在所被遣置度向ハ、夫々相伺候様可被致候事、

一万石以上家来ノ儀、前文人別減少ノ御趣意ヲ以、追々
定府相減候様可被致候、尤領分ノ遠近其家々ノ都合モ
可有之事故、銘々勝手次第ノ事ニハ候ヘトモ、可成丈
御趣意相立候様可被心得候事、
右之通寄々可被達候、

十一月

目錄

参考

昨夢紀事抄

水戸前中納言殿ニ隔日登城ヲ命セラル

江戸大地震

堀田正睦再ヒ老中ニ任ス

〔堀田松平慶永建白書〕

一八二 参照 昨夢紀事抄

一 八月十一日夕、福山侯へ御留守居ノ者ヲ被召呼、明後

十三日朝卯半刻

公福山侯ノ邸ニ、御出アルベキ旨御達アリケレトモ、

公此比御瘧疾タルニヨツテ、御断リアリケレハ、御次（席
脇カ）

阿州侯へ御達アリテ、十三日御出アリケレハ、魯西亜

・英吉利等へ条約為御取替相成、追々諸夷上港ニモ及

フベケレハ、以後ノ御実備弥以肝要タルノ間、銘々右

ノ心得ヲ以テ、平生覚悟可有之事故、心得ノ為三ヶ国

条約ノ別冊御渡ノ旨、御書付ヲ以テ御申渡アリ、

同日（天和寺、老中）關宿侯ニテ、阿蘭陀ノ儀ハ勿論、魯西亞・亞墨利

加二国ハ、長崎・下田・箱館三港へ、英吉利ハ長崎・

箱館ノ二港へ渡来差免サレシニ、亞墨利加国ノ儀ハ、

近年清国交易盛ニナリ、繁々御国ノ海上通航スル故、

暗礁等ヲ心得スシテハ、人命ニモ拘ハルニ付、浦々測

量致度ヨシヲ、当三月中下田へ渡来ノ亞米利加船ヨリ

願置、追テ挨拶承リニ渡来可致トテ出帆セリ、右測量ノ事ハ容易ニ差許サレ難キ旨、追テ渡来ノ節、下田ニオヒテ精々申論、敵數御断ニ相成ヘケレト、如何ニ申論シテモ承伏ニ及ハサル時ハ、此方ヨリ彼国ヘ応接ノモノ被指向、政府ヘ御掛合ニ相成ベシト迄示談アルベキナレトモ、各国ノ制度相違ノ上、論談徹底致兼ル衷情候得ハ、下田ニテ応接ノ模様ニヨリ、内海迄モ乗入候欵、如何様ノ次第ニ成行ンモ難計、尤是迄モ都テ、平穩ノ御取計ナレハ、此度逆モ穩ニ御断ニハ相成ヘケレト、自然ノ儀出来モ測リ難ケレハ、銘々兼テ其心得タルベク、ヨツテ亜米利加船ヨリ指出セシ測量ノ儀、申立タル書面ノ和解心得ノ為メ、御渡アル旨御達アル由ニテ、同十四日阿州侯ヨリ、御廻シアリ、只ニサヘ穩ナラヌ世情ノ此事、被仰出シ已来ハ今ニモ事ノ出来ランヤウニ騒キアヘリ、仍之御国許ヘモ防禦ヲ敵ニシ、且關東ニ事アラン時之心得モ、油断スベカラサル旨ヲ被仰遣サレタリ、

一八三 水戸前中納言殿ニ隔日登城ヲ命セラル

〔昨夢紀事抄〕

一八三の一
八月十四日、水戸前中納言殿、海岸防禦御軍制御改正ノ儀ニ付、月ニ三度モ御登城ノ処、此度御政務筋之儀改テ被仰出候ニ付テハ、彼是御相談之儀モ有之ニ付、御老体御苦勞ニハ思召候ヘトモ、已後隔日御登城可被遊旨被仰出テ、同二十日ヨリ御登城アリ、

一八三の二
一八月二十三日、公前条ノ件々御憂喜交錯ノ御時態ニハ、廟謨モ如何ナルニヤ、測量御断リノ御秘策モ被為聽度ト例ノ福山侯ヘ御尋問ノ御内書ヲ被進タリシニ、今日御返事、如左、

過日ハ貴翰被成下、謹テ拝読仕候、即貴答可申上処、乍例取込、大延引失敬之段、御免シ可被下候、(成脱カ)追々秋冷相成候得共、弥御安靜賀上候、陳ハ此程阿波守ヘ相渡候条約書並亜米利加測量一件断等ニ付テノ云々、内海ヘ乗入候節ノ次第、其外内々御断振等モ御聞被成度、尤堅御他言ハ不被成候間、申上候様委細蒙御拝承仕候、(命カ)一ニ被仰下候御心配ノ儀、御尤ニ存、不外事故小生心得候文ケハ、御咄申上度候得共、何分紙上筆端ニハ尽シ兼候間、貴答ニ申上候事ハ、御断申上候、尤久々拜眉モ致不申、奥ヘモ御入被下候(命カ)

致度候間、御全快ノ上、何卒一日此方広敷へ御出被成下、表向ハ御参勤後並奥元服後西ノ廉ニテ御越被下、緩々御面話ニテ申上度存候、左候得ハ表ニテ御目ニカ、リ候ト違ヒ、又書面ニテモ不申上候テモ行違、不文ニテハ御分リ兼、恐縮旁前文ノ通候得ハ、大ニ都合宜候間、左様御承知可被成下候、何モ用事ノミ乍延引貴答迄如此御座候、恐々頓首、

八月二十三日

尚々、時氣折角御厭專一奉存候、先日以来御不快実ニ御按事申上、如何ト朝夕心配仕候処、追々御全快ノ趣、誠ニ々々大慶此事ニ御座候、乍去時氣不宜、折角御加養專一祈上候、已上、

一八三の三
一八月二十八日、右御返書ノ趣ニ付、追々御掛合ノ上、今日福山侯大奥へ御入アリ、御對話ノ御趣意ハ御筆記アル故、左ニ記ス、
安政二年乙卯八月二十八日夕、伊賀守へ罷越、對話ノ趣意、

一測量御断ノ御趣意並御断振及推問候処、当夏下田へハ渡来之測量船々主ハ、昨冬老中ヨリ「アハダムス」

へ相渡候条約ヲ、「アハダムス」ヨリ諸方へ相廻シ候ヲ致承知、当夏下田へ罷越「ジョンロツテル」測量船主自身一己ノ存ニテ、先日久世ヨリ渡候測量申立ノ書付ヲ差出候由、右ノ通候故、アメリカ政府ヨリ使節ヲ立願候ニモ非ス、全ク船主自己ノ存ト申、且昨冬於下田「ヘルリ」ト約定書ニモ測量ノ儀ハ、書載無事^{之儀}故、旁以測量願之儀ハ御聞濟ニハ難相成筋ニテ候、加之条約ノ義至重ノ事ニテ、定テ「アメリカ」ヨリ諸蛮へモ、伝播可致候間、右約書ニ無之儀ヲ御免許相成候ハ、必「ロシヤ」「イギリス」等モ夫々可申儀、^{由之}日本並アメリカ両政府ノ取極ニモ無之儀ヲ、船主一己ノ存ヲ以テ願出候迪、御免相成候ハ如何ノ儀哉ト必可申立、左スレハ「ロシヤ」「イギリス」へノ条約モ矢張反古同様ニ相成可申、弥増之困難、加之信義モ尽果、「アメリカ」条約モ水上ノ泡ト相成候儀無疑、將又「ジョンロツテル」一己ニ申立御免候ハ、「アメリカ」政府ノ存モ難計、且「ヘルリ」ヨリ条約無之儀ヲ、何故御免被成候哉ト申越候テモ一言モ無之次第、且又井戸對馬守始昨年条約取極メ候節モ「ヘルリ」此外ニ別願モ無之段ハ、已

ニ申上置有之由、右根本ノ趣意如此ニテ、又一ヶ条ハ万一御許ニ相成候ハ、今日ハ及薄暮候間、何國ノ港へ碇泊致度様申立、終ニハ海岸ノ測量モ陸地ヨリ見通シ度杯申、或ハ山へ登リ、岡へ上リ候様ノ事ニ可相成、右等ノ訳ニテ何分御許容不相成候事、測量御断振御主意之儀ハ、船主以書面測量ノ儀願出候得共、何分御許容ハ難相成、其訳ハ昨年「ヘルリ」ト於下田取組ノ条約書ニ、右ノ儀ハ書載無之事(故脱カ)ニテ候、船主申立候主意、且於此方難指免訳等「アメリカ」政府ト掛合ノ上ニ無之候半テハ返答難致、加之是迄於此方承居候処、大軍艦ニオヒテハ必破船等ハ無之由、鯨鯨船或ハ小舟等ハ間ニ破損有之趣、其上申立候書中ニモ、唐国ト近年交易盛ニ被行候由、其海路等ハ兼テ承知モ致居可申候、日本下田・箱館・長崎三港モ同様ノ儀候得ハ、今更測量ニモ及間敷哉、且又如何程常ニ暗礁等承知致候テモ、難船之節(届脱カ)ハ、暗礁ヲ知リナカラ碎レ可申、左スレハ窮意測量ハ、無益ノ儀ニテ延引致候連、左右テノ害モ有之間敷哉、於日本ハ諸侯領分隣國へモ暗礁砂洲等ハ秘置候儀、古来ヨリノ風儀ニ候、併当今日本ニ於テモ追

テ大船製造有之候故、暗礁等ハ承知致居不申候半テハ難計ニ付、於日本右暗礁等ハ測量イタシ、國々海岸へモ目当ノ燈籠ヲ設置度、右ノ通り國々海底淺深、暗等此方ヨリ出帆イタシ、全世界へ相廻シ可申候間、左様相心得可申候、且又船主推テ及測量候ハ、已ニ条約第一ヶ条日本ノ「アメリカ」ト永世不朽ノ親睦ヲ取結候ト申ニ相背キ、兩政府ニテ取極メタル条約ヲ潰シ候ニ相当リ、日本「アメリカ」ト敵ニ相成可申、吳々兩政府ノ条約ヲ其方一己ノ存ニシテ、崩潰致候テハ、本國へ對シ候テモ無申訳事ニ可相成、右ノ趣意候間、申立候儀難相協候事、若又船主ハ「アメリカ」政府ヨリ兼テ測量之儀ハ、委任有之事候得ハ、私申立候儀矢張本國命令モ同様ノ儀ニ候、右日本ニテ諭告ノ趣承知ハ致候得共、船主迷惑ノ次第モ有之段申立候節ハ、如何被成候哉ト承候処、必「アメリカ」政府へ對シ船主迷惑ニハ不為致候間、為其下田奉行「アメリカ」へ被遣候間、測量船乗組本國へ連行候様致度ト諭告有之由、若又夫ヲモ承知不致節ハ、幸「フランダ」ヨリ獻呈ノ蒸氣船へ乗セ、「アメリカ」へ被遣候御舍ノ由、大凡

右ノ標的候間、多分ハ承服可致候由、

一 下田奉行岡田備中守利喜次、井上信濃守新右衛門兩人共、

莫大ノ御厚恩ニテ御取立ニ付、兩人トモ応接ノ節ハ

腹ヲ居ヘ致決心、及応接ヘクトノ事、六ヶ敷相成候

ハ、切腹致シ為見候覚悟ノ由、

一 先日久世守大和 ヨリ渡ノ書付ハ、何時ニモ内海へ乗入

儀難量候間、銘々其心得罷在候様トノ極意ハ、諸大

名ニモ未タ調練始マラサル所モ有之、氣ノ付カヌ方々モ多ク有之故、夫ヲ御醒覺ノ為ニ右ノ文言入り有之由、

一 諸大名モ近年追々困窮相成候ニ就テハ、上野芝ヲ初、

火ノ番等ハ、當時ト相成候テハ、元々先費而已ニテ、

御無益ノ儀候得ハ、此後トモ被相止候御評議有之、

跡持ハ八人火消或ハ町火消等へ被仰付候由、

一手明諸大名警衛場ナキヲ云フ夫々固場被仰出候由、左ナクテハ

変ニ臨ミ被仰付候テモ、間ニ合不申、狼狽而已ナリ、

依之右ノ通リニ可相成御評議當時専ラ有之由、

一 献上物等ハ三ヶ一相成候御評議中之由、

其れ種々改新之被仰出有之管候得共、及深更候故、

此後猶又可及内話トノ事ニ候、以上、

一八九の四
一九月十一日水老公ヨリ御返書被進、左之通、

如芳翰不同ノ気候、愈御清勝被成御起居、欣扑此事

ニ御座候、先般愚老隔日登 營ノ命ヲ蒙ニ付、纏々

御紙表ノ趣、御至念ノ事御座候、是迄モ按山子同様

ノ身分、何ノ御用ニモ不相立、況ンヤ今般ノ命実ニ

心中安シ不申候間、不取敢御辞退申上候得共、御許

容不為在候間、努力勉強罷在候、御心付之儀、無御

伏藏御示教被致度所希御座候、御瘡疾之由、御様子

モ承知不致段御海恕被致度候、御答迄草々也、

九月十一日 水 隠 士

松越殿

御別紙披閱、墨夷測量云云、去月二十八日阿蘭蘭カへ御

越御内話之由、阿蘭如何様御答申候哉不存候得共、

イツレ同人御答申候処カ、當時ノ真面目ト存候、今

ニ始マラス事ニ候得共、何卒上下一統必戦之覚悟相

成候様至願ニ候、且又追々品々被仰出ノ儀ハ、貴察

ノ通評議中ト相見得、未タ耳へハ入り不申候、扱二

百数十年昇平ノ風習、其弊不可指教候処、差向如何

様ニ御世話被為在候ハ、大小名始一統ノ為メニ相成可申哉、ケ様々々ニ相成候ハ、可然ト御勘考ノ儀、何ソ一ツ書ニ成共被成、極密拝見致度候、尤拝見候迎モ、一々建議致兼候儀モ可有之候、且又建議致候迎御用ヒニ相成候否難量候得共、何トソ御存分御申聞ニ渴望候也、

公此御返書ヲ御覽アリテ、如此御垂問アルコソ幸ナレ、兼々思召設ケラレタル事共ヲ仰進セラレンカトオホセシカト、猶御国許ノ御家老初オモフ処モアラハ、一々仰上ラレテ、有志ノ情懷ヲモ暢ラレンノ尊慮ニテ、右御下問ノ次第ヲ、御国元御家老共へ被仰遣、於御国表モ衆議ノ上可及建白トノ御沙汰ナリキ、

一八三の五
一同九月十一日福山侯ヨリ御返書、如左、

過日ノ密翰、昨日ノ貴書得ト拝読仕候、兎角不勝ノ時氣御座候得共、愈御清迪欣喜ノ至リニ奉存候、陳ハ先日ハ御来駕、御内話申候通、御一新被仰出、日夜御待被成候得共、未如何ト御配慮少シモ早ク被仰出候様被成度云々被仰下候様、^(趣カ)逐一拝承致候、段々御心痛之趣御尤モニ存上候、尤他ニテ傍觀致候趣ニ

テハ、訳モナク速ニ被仰出ニモ可相成ト相見候得共、多端評議モ不一、水老御考慮モ有之、品々存外手數ノ掛カル事ニテ心配致居候、追々被仰出候事モ可有之、決テ御配慮無之様存上候、

一先般御内話ノ上、火之一条^{火ノ一条}解シ難シ此節取調中故、御国許ヨリ交替之儀ハ、先ツ不被仰遣方可然カ、弥被仰出方急速ニ参兼候ハ、其節御内々申上候間、交替之儀、其節御勘弁有之候テモ可然存候、

一諸大名固場ノ儀並先日以御家老御指出シ有之候指図早ク有之様トノ儀ハ、委細致承知申候、

一蘭書並鉄砲ノ儀モ致承知候、廻リ次第相合、早々差遣可申候、

昨日被仰下候分御答、

一風説書之儀、当年モ表向拝見ニ相成、既ニ不遠御渡可申候間、御願無之候テ宜御座候事、

一御国許海岸御手当筋ノ儀、御心得早急指図有之様トノ儀、御尤之儀ニ付、今日飛脚出候由故、色々心配取調候得共、何分今日差図ト申事ニ参兼候趣ニ付、左様御思召可被成下候、

一毎度不分リノ御答申進、例ノ通乱毫甚御氣ノ毒ニ存

上候得共、登城中ハ勿論退出後持帰候書類山ノ如ク、一覽迄ニモ数刻ヲ費シ、其上種々不容易事共モ有之、勘考モ尽シ不申候半テハ不相成、実ニ御目ニカケ度位ニ御座候、右故甚鹿漏ノ御請ノ段ハ、呉々御免シ可被成下候、尚其内可申上候、謹言、

九月十一日

〔昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂〕

一八四 江戸大地震〔昨夢紀事抄〕

十月二日、夜江戸大地震ナリ、其夥シカリシ事ハ、記載ニモ悉數^{〔委カ〕}、人口ニモ膾炙スレハ、爰ニ之ヲ略ス、

一八五 堀田正睦再ヒ老中ニ任ス〔昨夢紀事抄〕

十月九日、堀田備中守殿^{佐倉}再ヒ加判ノ列之上座被仰付タリ、

一八六 松平慶永書翰並ニ建白書〔昨夢紀事抄〕

○この文書は底本に見出しなし。よって作りしものなり。

一八六の一
十一月十一日、去月中水老公ヨリ、御返答旁御垂問ノ次第ヲ御国許へ仰セ遣ハサレシ故、於御国表衆評ノ次第^{〔カカ〕}為申上鈴木主税受持テ、去ル朔日御国表発足セシハ、

木曾路ノ藪原駅ニテ、江戸大地震ノ大變ヲ聞キ、夫ヨリ昼夜道ヲ急キテ、今曉常盤橋ノ邸へ参着セリ、扨御^{〔弁カ〕}評ノ趣モ衰世ノ挽回ハ、昇平ノ流弊ヲ變革スル外ハアルベカラストノ帰着ニテ、数十条ヲ建議セリ、然ルニ都下烈震後ノ景況、大度高堂ノ顛覆焼亡、士庶生靈ノ庄傷埋殍極メテ慘酷ナル有様、面親ナレハ人心洶々トシテ、安妥ナラス、太平ノ華麗裝飾モ、衣食ノ暖飽安逸モ悉ク忘却シテ、度外ノ如ク唯性命^{〔マタ〕}ノ保存ヲ欲フ情状トナリ、又

幕府ヨリモ、当年中諸侯ノ登城ヲ被止、諸大名震災ニヨツテ、難儀ノ向ヘハ願ヘ次第御暇被下、又当今大城ノ御修覆御見合セ等ヲ始メ、非常違例ノ命令アツテ災変却テ革弊ノ時ヲ得タルカ如ク思召ケレハ、兼テノ御心構ヘニ御国許ヨリ、主税ヲ以テ申上タリシ件ニモ、御斟酌ヲ加ヘラレ、將此度震災ニ付テノ御建議ヲ合セ^{〔テカ〕}ラレ、水老公へ御進呈アルベシトノ御取調ラベタリ、

一八六の一
十一月十六日、水老公へ被進御書並御別冊、如左、
一 翰謹啓、向寒不同ノ候ニ御座候処、益御清恭被成^{〔泰カ〕}御起居奉恭賀候、然ハ去ル二日夜前代無比ノ大變、

絶言語畏懼ノ至御座候、先以

大樹公御別条不被為在、益御機嫌能御同意此上ノ恐れ奉存候、乍併御城郭ヲ始、上下一統大破壊死傷等モ不少趣、大息ノ外無之候、貴邸モ余程ノ破顔ニ相成候由、先々御別条無之、此上ノ御儀ニ奉存候、御家臣ニモ庄傷等有之趣伝聞仕候、何角御痛心管万々奉察上候、去ル三日ニハ早速ノ御触達ニテ、一覽難有奉謹承候、弊家ハ外並ニ比儀テハ、破損位ニテ當時ノ手当ヲ仕、住居ヘ無指支、此上ノ寸志ニ御座候、乍併処々屋敷・武器藏不殘、硝藏・米倉等悉ク潰頽当惑ノ次第、右ニ付テモ外ニ大潰敗或ハ罹災ニテ今日ノ手当ニモ指支候向モ可有之、実ニ察入候事ニ御座候、

京師ヲ始諸国ノ様子ハ、先ツ安心ノ方ニ相聞ヘ、重疊ノ儀、何分重峻逼至ノ時節ト恐察候、且又先日御垂問ニ付建議、今度地震ニ付愚考共、別紙ニ通本書致進呈候間、宜敷御推覽被成下、御内慮垂諭奉伏希候、御教示被成下候上ニ、阿闍ヘモ右書付指越挨拶承リ、愈覚悟相極、国許ヘ申越候趣モ御座候間、此節別テ御繁劇中恐入候得共、何分不日御返翰奉願上、

尤諸端無伏藏吐露仕候儀ニ御座候得ハ、御教示モ何卒無御斟酌被仰聞被下様、具々モ奉希上候、先節ノ御動履相同度、且前文御内慮相慮旁如此御座候、以上、

十月十六日

再伸、向寒ノ節、別テ當時折角御保重為天下奉万折候、此比中早速御安否可相伺ト存居候得共、別テ御繁多ト指扣居候儀ニ御座候、一兩日先ツ鎮マリ候哉ニテ、少安意申候、擬一籠ノ内輕品御座候得共、聊御見廻申上候驗シマデニ奉拝呈候、御笑捨可被成下候、

一是迄ハ、草尖ニテ情状難通儀モ御座候節ハ、戸田・藤田等ヘ服心ノ者指出、御内慮相伺候積リニ罷在候、然ル処今般兩人ノ御様子承リ、実ニ駭嘆痛惜ノ至御座候、就テハ以後右等ノ儀御座候節、誰方ヘ指出候テ可然哉、兼テ相心得置度奉存候間、御内々御教諭奉希候、已上、

愚衷

一先般阿闍内話ニモ、当今ノ時態必戰ヲ期候外無之段申聞、將又尊書中ニモ必戰ノ覚悟御至願之旨、被仰

越拜承仕候、然ル処、方今天下ノ具瞻万人ノ依頼、第一尊公次ニ阿闍ノ上ニ帰シ有之候処、右等數必戰ノ覚悟御至願ニ於テハ、天下ノ人心モ上風下学(學カ)、必戰ヲ期シ可申勢ニ可有之処、指当リ都下一分モ因循偷安ノ風習相替候儀ハ無之候ハ、理ノ解スヘカラサル処ニ候得共、反求深考仕候処、拙者輩(生カ)モ専ラ必戰ヲ唱候(ヘカ)必戰ヲ勸メ候得共、弊藩ノ風習モ亦都下同然ニテ、殆当惑ノ仕合ニ御座候、此理ヲ推窮仕候得ハ、拙者輩口ニ必戰ヲ唱候ナカラ、心ニ必戰ノ誠無之故ト憂慚ノ外ハ無御座候、就夫何故ニ必戰ノ誠意無之候哉、熟慮仕候得ハ、畢竟不決断ヨリ起居事ニ候得ハ、右決断ト申モ、事理ニオヒテ決断不致候半テハ難相適故、及決断候事ニテ、不及決断儀ヲ決断可仕様モ無之候、此外寇一条ニ於テモ、天保度打払ヲ被相止候命令以後ハ、不及必戰国体ニ相成候事ニ候得ハ、如何ニ致候テモ必戰ニ決断仕、必戰ノ覚悟ニハ実以相成兼申候、是ト申モ不及必戰時ニ当リ、必戰ノ備ニ及候故、徒ニ奔命ニ而已勞役シ、必戰ノ期ヲ待スシテ国家困弊ニ至リ候ハ、勿論ノ儀ト奉存候、只予備無油断ト申程ノ儀ハ、誰ニモ心掛ノ淺深次第、

甲乙共ニ支度ハ可仕候得共、唯今誰アリテ必戰ヲ決シ、必戰ノ備ヲ可致事トハ不被存候、其子細ハ、魯・墨・英ノ三夷ト永世不朽ノ御親睦、此度御破(談脱カ)ニ相成候旨御開示候得ハ、如何ニモ必戰ノ時節到来ニテ、天下必戰ノ覚悟ニモ可相成候得共、当今ハ是ニ反シ、是迄ハイカ成不測ノ變ヲ生シ候半モ難計ト致恐惶候、夷情モ此度ノ御条约ニヨツテ相定リ、無二ノ御和親御取結ノ上ハ、一統可致安心旨被仰出候儀、事理ノ的当可有御座候処、兩國ノ全權會議之上及監約候条約ノ御信用之(無脱カ)、測量船主ノ請求ノ御断ニヨツテ、内海へ乗入如何様ノ巨患ヲ発シ候半モ難計候間、必戰ト覚悟ヲ致候様ニトノ御趣意ニテハ、人毎ニ御教諭有之候テモ、恐ラク信用仕ル者ハ有之間敷ト恐察仕候、乍憚尊公阿闍トイヘトモ、右等ノ辺如何御覚悟被成候哉、如高示(尊カ)二百数十年ノ昇平、必戰ノ事実抔地ノ時ニ候得ハ、必戰ノ覚悟ヲ御勸誘御座候ヨリ、必戰ノ実ヲ御示シ被成候方、時務ニ適當可仕哉、右ニ就テモ大小ノ群牧ヲシテ、必死ノ地ニ勞シ、必生ノ地ニ佚シ候様無之候半テハ難相成、右勞佚ノ分、判然タル御仕向ニ相成候ハ、天下ノ士氣所嚮ヲ知

り、安定ニ至リ可申儀ト奉存候、此儀他ニ相求候儀ニモ無之、近ク微驅弊藩ニ体験仕候テ申上候事ニ御座候、已ニ大小ノ侯伯疲弊御救助ノ為メ、諸献上物ノ御省略・諸有司ヘノ贈進、或ハ両山ヲ始メ火防東山及増（及ヒカ）等モ御門番内外廊門目等モ御免除ノ御評議モ御座候哉ノ趣、難有儀ニハ御座候得共、私家ノ身上ニ比較仕申上試候得ハ、兼テ逼迫ノ勝手向ニ御座候故、両山火防等被仰付候得ハ、右費用別段才覚金ヲ以テ、取賄候次第ニテ、兼テ備置候ニモ無之候故、御免候得（御免得）ハ、才覚ノ勞ヲ省キ候ト、他借相増候儀無之迄ノ儀ニテ、別段有余ニ相成候訳ニモ無之、又献上物惣テ御免相成候逆、中々数千金ニハ至リ不申候得ハ、武器ノ修整彈藥儲蓄ノ用ニ充候位ノ事ニテ、中々夫ヲ以テ必戦ヲ期候事ニハ至リ不申候、尤同シ必戦必死トハ乍申、時所ニヨツテ天下ノ御裨益ニモ相成、又ハ犬豕同様ノ事ニテ、相濟候儀モ可有之候、去レハ大冢ノ死ヲ厭ヒ、天下ノ御為ヲ存候逆、和親御取結ヒノ当年ヨリ、後來御破談ニ可相成哉ノ用意トシテ、（公カ）下廉ノ御奉行可仕程ノ手当致置候儀ハ、誰迎モ出来不仕、又

幕廷ニ被為置候テモ、少人数ヲ召呼候ニハ不及トノ御趣意ニ候得ハ、此候ニテハ、必戦ノ覚悟仕候テモ必戦ノ手段無之候得ハ、只必死而已ニ候得共、必死ハ所謂犬豕ノ死ニテ、公私ニ取毫髪ノ益モ無之、国許ニ指置候譜代恩顧ノ侍共モ、一人トシテ何ノ役ニモ相立不申、右様ニ相考候得ハ、此節ノ大名程誠ニ果敢ナキ身上ハ無之、匹夫ニシテ匹夫丈ケノ心力ヲ竭シ候者ニモ相劣リ候次第ニテ、実ニ覚悟モ極リ兼、痛歎ノ至泣血潸然ノ外ハ無之候、拙生如此ニ候得ハ、（々カ）外ニ大小名モ少々ノ異同ハ可有之候得共、大凡相交候儀ハ有之間敷、諸侯ノ通患此中ニ止リ申候、仍之（附カ）在所ノ大小侯伯事アルニ臨ミ、不得已事義ヲ守リテ必戦ノ覚悟ヲ極メ必死ニ処候テモ、右様心ニ飽足候事無之候得ハ、戦候テモ勝算無之、又死シテモ天下ニ益ナキ事勿論ニ御座候、乍恐廟堂ニ被為置候テモ、甚タ御心細キ御成行ニハ有御座間敷カト奉恐察候、サレハトテ公私共心丈夫ニ御座候程、人数召呼候様被仰出候ハ、是又両三年ニシテ、天下ノ疲弊極リ可申奉存候、当今ノ形勢ハ、必死常勞ノ道ヲ以テ諸侯御使役ノ姿故、却テ生ヲ貪リ、佚ヲ樂ミ、窃ニ憤

然タル事能ハサルノ勢ニテ、実ニ御大事ノ儀ニモ可有御座ト恐懼ノ至奉存候、依之諸侯ノ勞佚ヲ分チ候拙策、左ニ相記シ申上試候、

一 當時天下ノ諸侯ヲ二分シテ、隔年ノ交替相成有之候処、先ツ十五年ヲ限り四分シテ、四年ニ一度ノ参覲ニ相成、兼テ御定メ持場相固メ、不安心ニ無之程、人数召連候様ノ御規定ニ相成候ハ、三年在國中演武ヲ専ラニシテ、自國ノ守衛ヲ敵ニシ、政事並講文ノ余暇ニハ、山野ノ遊獵等ヲ相催シ、暢鬱遣情筋骨ヲモ養ヒ、英氣ヲ畜（養ハカ）候、扱四年ニ一度ノ参覲ニハ、將軍共々必死ヲ極メ、治世平常ノ務ハ尽ク致放下、一向防禦守衛ノ備ニ精力ヲ尽シ、惣テ陣中ノ心得ヲ以致在府候様相成候ハ、不令ニシテ、華美奢麗ノ弊習ハ自然相止、在番中ノ費用モ、方今ノ類トハ（類カ）拔群相違モ可仕ト奉存候事、

但嫡子庶子トモ国邑ヘ召連候儀、勝手次第可被仰付事、（候カ）

一 四年ニ一度ノ在府陣中同様相成、諸侯礼式服用等ノ儀、三十年限中夫々格別ノ御制度被相立、（御年限中）（外カ）

其以下モ是ニ准シ可申事、陪臣ノ分ハ不撰尊卑、野羽織立付伊賀袴等着、登城ノ供タリトモ同様ニテ、主人々々エノ年始ノ礼モ甲冑着用ノ事、

一 右ニ付テハ、諸侯妻女モ銘々国邑ヘ引移シ可申事、先年及建白候通ニテ、此表大小侯伯ノ邸宅在府無之分ハ、留守ノ者兩三輩、門番少々指置候迄ニ可有之事、

一 在番ノ大名ニテ、旗頭ヲ被定、小名ヲ旗下ニ御附屬有之、一手ツ、御分配守衛可被仰付事、

一 在府ノ大小侯伯ヲシテ、御府内閑曠ノ地ニオヒテ、四季ニ一度ツ、一手限リノ人数操練可有之事、

一 右様相成候ハ、武・相・房・總御固メ場持ノ四家ハ、勞役無間断斷ニ候得ハ、是亦海軍旗頭ニ被命、海國ノ小諸侯御附屬有之、四年一度ノ勤番ニテ海軍ヲ督シ、常ニ軍艦中ニ在テ、海域ヲ相守リ候様可被仰付事、（々カ）

但四家海軍ノ御備有之候得ハ、此辺陸地御固メノ儀ハ小諸侯ニ被命、土着可被仰付事、
一品川御台場持ノ諸侯ハ、是亦砲台守衛ノ旗頭被

命、麾下ヲ御附屬可有之事、

但屬下ハ小諸侯ニ不限、御旗本・御家令等ノ

類ニテモ可然候、

一定府ノ小諸侯・諸御旗本ノ類、惣テ軍制ニ関係ノ向ハ、悉ク是ヲ四分シ、其一分ヲシテ輪流交番、一ヶ年ツ、必死必戦ノ地ニ被指置、其三分ハ諸役御放免ニテ、専ラ文学ヲ講究シ、武術ヲ鍛練可仕旨可被仰付事、

但大小諸侯、初三年ノ休暇中政事並文武ノ脩

治行届キ、又ハ徒ラニ安佚ニ耽リ候類、精

詳ニ御吟味之上、夫々御賞罰可有之事、

一軍艦製造ノ事、兼テ御沙汰モ有之、如何様軍艦無之候テハ、海防全備モ難致、且夷虜及ヒ海賊海運ヲ妨ケ、或ハ掠奪等ノ節杯モ當時ノ体ニテハ、実ニ被成方有御座間敷候得ハ、此御備之儀ハ、一時モ早ク御完整願ハシキ儀ニ御座候得共、拙生如キ瘠地ノ大名ニテ相考候得ハ、如何ニモ財用難統、手閔ニ及ヒ兼候得ハ、甲乙ハ可有之候得共、大小侯伯共多分逼迫ノ折柄故、此儀ニ被差置候ハ、有志ノ向トイヘトモ、容易ニハ

出来申間敷候、右ニ付テハ外寇ヲ禦キ

神州ヲ護候重器ノ故ヲ以テ、日本全国ノ石高二

割付、譬ハ越前国六十余万石御料・私領・寺社

領・除地ノ差別ナク、高百石〔付脱〕二十金ツ、ノ課役

ヲ以テ、国所ニ応シ、多少ノ軍艦及ヒ製造使用

ノ法モ致習熟候様、国々旗頭ノ大名ニ被仰付候

ハ、越前守〔國〕ニテモ六万余金ヲ出シ、幾教艘ノ

軍艦造出シ可申候、尤モ一時ニ成功可致儀ニモ

無之候得ハ、課金ノ儀モ追々ノ御取立ニテ可然

事故、下民ノ難儀ニ及候程ノ事モ有之間敷候、如

此シテ沿海ノ諸国悉ク軍艦ヲ備へ、自国ノ守衛・

他国ノ応接ニ充、且定額ヲ被立、為御警衛江府

近海へ勤番被仰付、前条海国ノ人員、是ニ抛テ

守衛ヲ事トシ、四季ノ操練ハ陸軍同様ニ可有之

事、

但軍艦ノ儀、中国西国ノ諸侯へハ、別テ早速

製造候様被命、在国ノ面々ハ、事アルニ臨

ンテ、右軍艦ヲ以テ、〔京都御守衛〕昨京師御警衛被仰付置

候ハ、御手厚ニ可相成事、

一本文高儀出金ノ儀、国ノ広狹肥瘠有之、已ニ奥

羽刃ト弊国等トハ、莫大ノ相違有之事ニ候得ハ、
猶人別高ヲ以テ御斟酌有之、平等ニ有之度事、

右諸侯ノ勞佚ヲ分判シテ、天下ノ形勢ヲ一變シ、必
戰ヲ期スルノ拙策ニ御座候、右ノ趣共御採用御座候
ハ、他家ハ不存、於拙生ハ祖先ヲモ辱メス、天下
ノ手本ニモ相成ベク程ノ御奉公ハ、急度相勤可申ト
存詰申上候事ニテ、傍觀紙上ノ空論虚策ハ決テ無之、
自家丈ケノ儀ハ一々講究体驗仕候上ノ儀ニ御座候、
私家如此ニ候得ハ、列侯モ同然ト奉存候間、伏テ奉
冀尊考候、將又仮令拙策ハ御用ヒ無之候テモ、大小
侯伯ノ儀ハ、戰陣ニ臨ミ候テモ、御奉公甲斐有之候
様何トカ御仕向ニ不相成候テハ、只今ノ為体如何ニ
モ前途曹然難得死兆勢ニ御座候得ハ、体ニヨリ不滿
ヲ抱キ、事ヲ左右ニ託シ、參觀ヲ怠候様ノ諸侯追々
出来可申欵ト、窃カニ恐懼仕居候、何分此体ニテハ、
他人ハ扱置、拙生ニ於テハ、予メ必戰ノ覚悟ニハ相
成兼候間、此段兼テ申上置候、乍併不得止事持場等
被命、死地ニ為御臨被成候ハ、一足モ不去、夫ヲ
最期ニ必戰必死モ可仕、左様致候迎天下ノ御為メニ
ハ次テ不相成、右等ノ儀ハ兼テ御断申上置候、私家

如此候得ハ、外諸侯モ可然ノ儀ト奉存候、何分当今
ノ御時世ニ當リ、必戰ノ覚悟出来候様御仕向無之、徒
ニ必戰ヲ而已御勸誘御座候ニ於テハ、將卒ニシテ、空
敷快々不滿ノ地ニ斃サントスルノ勢ニ御座候得ハ、
如此形勢ニテハ、

廟堂独リ御安全ヲ可被為得理ハ、有御座間敷奉存候、
但前条ノ次第御採用ニ付テモ、日本全国中真ニ必
戰ノ覚悟ニ相成リ候様、

公刃ニオカセラレ候テ、御必戰御覚悟ノ実ヲ以
テ、御示シ御座候儀肝要ト奉存候、

一右ニ付テハ、日本全国沿海へ異船渡来ノ節、取
扱方区々相成、御条約ノ御信義不相立候様ノ儀、
有之候テハ不相濟候間、前以詳審ニ御示置御座
候様仕度候事、

一外夷御条約、魯・墨・英ニ御差別有之候ハ如何、
彼ノ請フ所ハ兎モ角モ、本邦ニ於ヒテ御許容可
相成廉々御規定有之、夫丈ノ儀ハ請ニ任セテ万
国一般ニ御許容有之、定制外ハ万国拳テ相願候
テモ、御許容無之御国体ニ相成候半テハ、必戰
ノ覚悟モ極リ兼可申事、

目録

〔脱カ〕梵鐘鑄換停止歎願〕

〔脱カ〕齊昭公親筆〕

○前記の見出しは底本にはなし。島津奇彬公史料（鹿児島市磯向古集、古集成館所蔵）による。

一八七 〔梵鐘鑄換停止歎願〕

この見出し底本にはなし。島津奇彬公史料（鹿児島市磯向古集、成館所蔵）による。

一八七の一

猶々時候御大事〱御用心〱の様いのりそんじ候、めで度かしく、らん書御次御覧願入候、

兎角不揃の時かふに御座候、御揃にて御機嫌よく成らせられ、其御所様万ん〱御機嫌よく成らせられ、御めて度忝く候、左様に御座候得は、兼て此本より梵鐘鑄換の儀仰出され候に付、内々申入度儀も御座候間、別紙の通り認め候間、何卒〱早々に、前様御相談にて、別紙御覧にも相成様、布て願上度、毎々御面働申上深く恐入まいらせ候、御ゆるし願に入まいらせ候、めで度かしく、

別して引籠中色々申上、深く恐入御ゆるし願候、

抑梵鐘鑄換之儀、先達執当を以て、伊勢守まで申入候所、御きたに相成兼候旨にて、尚又去二日被仰出有之候上ハ、強て可申様も無御座候得共、内実ハ京都法中

宝門跡かた当山は不申及、山門日光井に諸寺一同身命を投うち、種々嘆願之儀、強て申出候に付、当時一身之当惑心痛無此上、伺の所御挨さつ被下度、法中之儀故只法器を大切に存、申入候迄ニハ決して無之、聊か僧侶之事とハ乍申、多人数之儀ニも候間、此上の所、自然人体を失候様に相成候ては、天下の御為め尤不宜候儀も可有之哉、殊更当

將軍家の御代に及び候ては、災害之儀、相つゝ候上、又又今般之地震等、天災とは乍申、可怖心配之折柄、何卒此上人心種々に不相成候様致度に付候ても、梵鐘の儀何とか御勘考有らせられ度、此段伏て願存候儀に御座候、呉呉も右は、必ず自己之勝手を申述候事には決して無之、此上赤心御為と存込申入候申事故、篤と老中へも被仰示候様、御勘考の程よろしく願存候也、

内密

猶々、時かふ御大事〱御用心望のやうそんじ上まいらせ候、扱山門嘆願書漸く只今参候間、被遣候所、

御書ゆへ御請かた／＼御廻し申上候、呉々延引の段、
少々意味合御座候に付、御断申上候、何もよろしく
御取はからひ願入まいらせ候、めで度かしく、

御書之様忝承りまいらせ候、仰之通り今日ハよほど寒
氣に御座候、先々御揃遊し御機嫌よく成らせられ御め
で度まいらせ候、其御所様てん／＼御機嫌よく成らさ
られ、御めで度まいらせ候、左様に御座候得ハ、此程な
よりの書附御覽に入候やう、何も承りまいらせ候、
然る処、書るいは手元には無之、皆執当に御座候間、

少々延引に相成り恐入候、尤歎願書は山門之計に御座
候、京地宮々かたは、永らく山内僧正出京之節、直々
面会伝言にて、色々うけ給はり候事に御座候、尤其外
寺院向は皆口述にて、執当迄歎願致候事、尤宮々方山
門等も御所へ相願候所、此儀は關東へ御任せの事故、
關東へ申願候様とか、

関白殿被命候故、何れも私かたへ申来り候、尤当宮計
にて、行届兼候事ニ候得は、京地官方坊官諸大夫の内
出府にて共々に願候てはいかゞ哉、と相談も御座候得
共、あまり強々數相成り候ては、宜しからずと先御見
合のかたと取おさへ置候事故、此段内々申入候、しか

し仰出され候通りに相成候得は、又々夫々さきたち候
事ニ深く心痛いたし居候、山門嘆願書は則御廻し申入
候、尤右御覽に入候事は、執当へ内々の事ゆへ、御覽
後早々御かへしのほど願入候、此段前様へ宜數／＼御
さした願々上候、
先は御請迄にあら／＼申残しまいらせ候、めで度かし
く、

茲^{〔慈〕}性

水戸御簾中様

人々内々

猶又、時かふ御用心祈存候、何卒／＼御覽後早々御
返し願候、かしく、

弥御機嫌よく御目出度、其御所様まん／＼御機嫌よく
成らざられ、御めで度忝くまいらせ候、左様に御座候
得は、前夜さし出候外に、青蓮院座主宅・梶井宮・大
仏妙法院宮、尚又山門ヨリ書状等四包、地震にて入^{〔不明〕}り
て漸只今手に入候間、是又極御内々御覽に入候、何も
宜數／＼前様へ御さした願上まいらせ候、いそぎめで度
かしく、

極御内々人々御直披

座主宮佐致取述候、甚暑之折柄、輪王守宮〔寺方〕樣益御機嫌能被為成、珍重之御事に

思召候、抑今般諸国寺院之梵鐘鑄換之儀被

仰出候御事、御法儀ニ被為取候テハ、実以テ不容易御

儀ニ付、先御三宮被仰談、且山門大衆ヘモ御示談被遊

候所、大衆一同悲歎罷在候儀、御門主難黙止思召、

御同意之御歎願書、大衆一同之奏状并口上書等、御

執奏被遊候、梶井滿宮ヨリモ別段被仰立候、然ル

処、此度以勅詔被仰出候梵鐘鑄換之儀ハ、關東ヘ御

任セ相成候御事ニ付、容易ニ難被為及御奏問候段、

關白御命候旨被仰渡、御口上書并奏状其外共御差

返ニ相成候、達テ御歎願之御儀ニ候ハ、關東ヘ被仰

立候様被仰渡候、右次第ニ付、御頼談被仰遣候、

右鑄換之儀、於

御門主御歎ケ敷思召候、定テ於輪御門主御配慮被為

在、其筋合ヘ被仰立候御事トハ、深ク御遠察被遊候

得共、尚又宜御取扱被成遣、御程能可然御筋ヘ被仰

立、何分鑄換之御沙汰御延引ニテモ被仰出候様、幾

重ニモ被仰立度、御懇願ニ被為在候、御伺意ニ被為

在候テ、弥以御程能仰立被遣候様御頼被仰遣候御次

第三寄、此御方ヨリ御使ヲ以被仰立候テ、御都合之

御事ニモ被為在候ハ、宜御指揮被成遣候様、御頼思召

候、此段御含宜御披露御座候様被遊度候、右御頼各方

迄可得御意候旨、仰如此御座候、

武田相摸守青蓮院
宮ノ士

信貫花押

鳥居小路法眼

經孟花押

鳥居小路法印

故津

大谷法印

〔不明〕
孝花押

信解院大僧都

御房

住心院大僧都

御房

梶井宮樣坊官始ヨリ文通

上封

信解院御房
住心院御房

寺家 法印
入谷西布佐

一八七の三

御口上覚

今般、諸国寺院之梵鐘鑄換之儀ニ付、座主宮御方へ延曆寺大衆ヨリ、奏狀口上書ヲ以テ歎願申出候段、従同御方三御室辺ヲ以被 仰進候、則従同御方御執奏ニ付、御歎願御口上書御趣意之通、於此御方モ深被為入恐入候得共、御同様被成御願度思召候、此段御沙汰之儀、宜御取計御頼被仰入候事、

梶井宮御使

卯五月七日

寺家法印

右大奉書四ツ折ニ認、座主宮様御同時ニ、伝奏衆月番東坊城前大納言殿へ被仰渡之上、御差返シニ相成候事、

依 仰致演述候、甚暑之節、其御所様益御機嫌能被為成、御安慮可被進候、抑今般諸国寺院之梵鐘鑄換之儀被 仰出、右ハ不容易御儀ニ付、座主宮様ヨリ山門大衆へ御示談之処、大衆一同悲歎之奏狀并口上書ヲ以、

座主宮様へ歎願申出、則

御熟考之上、同宮様ヨリ御歎願書等ヲ以、此御方へ御打合被 仰進、尤當時御幼稚ニ被為在候得共、追々御成長之上、御分弁御悲歎之御事ニ可被為在、旁以座主宮様へ御熟談之上、伝 奏衆へ従 此御方モ、別帛御口上書之通被 仰立候、然ル処以 勅諚被 仰出候梵鐘鑄換之儀ハ、關東へ為御任ニ相成候御事ニ付、容易ニ難被為及 御奏聞、依テ御口上書御差返ニ相成候、此上達テ御願ニ候ハ、

關東へ被 仰立候様被 仰渡候御次第ニ付、何分不容易御儀ニ可被為在候得共、此度

其御所様へ 座主宮様ヨリ御程能御取扱之儀、巨細御書取ヲ以、御頼被 仰進候、依之於

此御方モ、御程能御取扱被成進候様、分テ御頼被 仰進度候、此段宜敷御沙汰御座候様ニトノ御事ニ候、依テ各方迄可申入旨ニ付、如斯御座候、恐惶謹言、

入谷西布佐

〔布佐カ〕

卯六月廿八日

清 客〔花押影〕

寺家法印

養 恕〔花押影〕

信解院

御房

住心院

御房

追テ伝 奏衆へ被差出候御口上書一通、写取御廻シ被成候間、是又宜御披露御座候様御頼申述候、以上、

一八七の四
妙法院様官初ヨリ文通

信解院 御房

今小路法印

住心院 御房

山田法印

山田筑後守

一翰致啓上候、残暑之節弥御安全被成御勤役、珍重奉存候、然ハ今般諸国寺院等之梵鐘鑄換之儀被 仰出候御事、於御法儀不容易儀ニ付、於座主宮御方御心配被為在、梨門御方当門へモ被仰談、且山門大衆へモ御相談被為在候処、於大衆ヲモ悲歎罷在候ニ付、座主宮御方 梶井宮御方ヨリ被仰立山門奏状并口上書等、御執奏被為在候処、此度被 仰出候処梵鐘鑄換之一条ハ、關東へ為御任ニ相成候御事ニテ、不容易御次第モ被為在候旨、 関白殿御命之趣ヲ以、御口上書并

奏状等御差戻シニ相成候、此上達テ御歎願之御儀ニ候ハ、關東へ可被 仰立被 仰渡候、右ニ付、猶 座主宮御方モ御歎ケ敷思召、其 御所様へモ兼テ御配慮被為在御筋合へモ被 仰立候御事トハ

思召候得共、尚又宜御取扱被遣候テ、鑄換之御沙汰御延引ニ相成候様被遊度之趣、從

座主宮御方被 仰進候条、当御門室へモ三御室之辺ヲ以、御打合被為在候ニ付、當時御無住ニ候得共、於御法義ハ御同様歎ケ敷儀ニ付、院家始申談之上、從當門モ右鑄換之儀、御延引之御沙汰ニ相成候様、御取扱被為在候様御頼進度、尤不容易御儀、御無住中被 仰立候ハ、院家始畏入候得共、三 御室之廉ヲ以テ、当御門室ヨリモ被仰立度候、此段各方御汲取、宜御取計御沙汰御座候様御頼申入度、如斯御座候、恐々謹言、

山田筑後守

卯六月廿八日

成 澄〔花押影〕

山田法印

弘 澄〔花押影〕

今小路法印

行 巽〔花押影〕

信解院

御房

住心院

御房

一八七の五
山門大衆一同ヨリ来書

正觀院前大僧正

信解院法印

三 執行代

住心院法印

八 学頭代

政 所 代

付札写

梵鐘鑄換之儀ニ付云々申越
五月七日
春性院持参

一簡致啓上候、

宮様益御機嫌能被為 成奉恐悦候、然ハ今般本寺及名
器報時之鐘之外、諸寺院之梵鐘ヲ以テ、鑄換大砲小銃
ニ候儀、以 官符被 仰出候由伝承仕候、右梵鐘鑄換
一条之儀ハ、誠ニ不容易儀ニテ、仏門之興廃

国家之大事ニモ相拘リ可申儀ト、一同驚歎仕候、於諸
寺・諸山モ、夫々上書歎願等之内評有之哉ニ相聞へ候
得ハ、為鎮国之道場本山ニテ、空敷端拱黙止仕居候儀
ハ難相成次第ニ付、大衆一同衆談ノ上、無余儀鄙陋之
奏状相認、今月十三日

座主宮へ持参、御執 奏之儀願上置候处、此度之儀ハ
於座主宮モ御不容易被思召、 梶井宮并大佛行内御
室へモ御示令之上、来月七日、座主宮御口上書被差添、
伝奏衆へ御差出ニ可相成旨、尤外 御三室ヨリモ、御
同様御口上書ヲ以テ、御頼可被 仰入之趣、御達御座
候ニ付、此段御届申上候、此上、

御所表御時宜如何可有御座哉難計候得共、官刃其筋之
内沙汰承リ候得ハ、若自然諸寺院ヨリ上疏等有之候ハ、
一円武刃へ御振向ケ用否行蔵専ラ關東之御取計ニテ、
被為任トノ趣ニ御座候、且最早事既ニ相定リ、国所ニ
寄り、追々鴻鐘取集候向モ有之哉ニ相聞へ候得ハ、且
夕猶予難相成、若跡刃ニ相成候テハ、畢竟無詮儀ニ御
座候間、乍恐不取敢奉呈章歎願候、公刃之儀ハ、偏ニ
奉仰宮様御威光之外、他事無御座候ニ付、山僧之赤心
打明野言俚語奉黷 清鑒候、

賢明洪慈幸ニ容裕、而全遂大衆之懇志、一同難有可奉
存候、此段宜預御沙汰候、恐惶謹言、

政所代

玄 航〔花押影〕

八学頭代

信 海〔花押影〕

別当代

眞 永〔花押影〕

執行代

澄 湛〔花押影〕

執行代

徳 秀〔花押影〕

千葉院

慈 校〔花押影〕

雲山院

卯四月廿九日

長 田〔花押影〕

覺林房権僧正

徧 典〔花押影〕

惠心院僧正

眞 洞〔花押影〕

本覺院僧正

考 忍〔花押影〕

正覺院前大僧正

豪 順〔花押影〕

正觀院前大僧正

圓 如〔花押影〕

信解院法印

住心院法印

追テ

宮様へ之呈書并同字^{〔写カ〕}老冊座主宮へ差出候、奏状并健
略鈔老冊、外ニ口上書写一通、從 座主宮伝奏衆へ
御差出ニ可相成御口上書共差上申候、以上、

座主宮ヨリ差出候口上書写

奉願口上覚

今般遮テ上書歎願仕候詮へ、万々難黙止次第有之故ニ
御座候、抑当山之儀へ、忝モ

天子本命之道場・鎮護国家之虚利^{〔旨〕}ニテ、長日臨時之御
修法等、 国体安全宝祚永久御願、円備之奉為丹祈ヲ
擬シ候条、本山第一之重任ニ御座候、因茲若自然海内

ニ異事有之時ハ、弥厳重之法会相営ミ、倍三宝供養相
 勵、加持護念專一ニ可奉祈御事ニ御座候、近年種々不
 穩事共出来、時々御祈被仰出、一同精修仕居候得
 共、簡様之節ハ、常式之外猶又転禍為福之為メ、別段ニ
 或ハ宮中仁王会式ハ、造像起塔鑄鐘等之白善被為
 行候様、願上度儀ニ御座候、然ル処、此度起テ従来万
 民之信施ヲ以、漸々鑄造イタシ候諸国数口之梵鐘ヲ、
 一時ニ破壊シテ、兵器ニ鑄換候時ハ、施主之意業ニ背
 キ、諸人之悲歎不少、殊ニ梵鐘ハ、仏場莊嚴具ノ第一
 ナルモノニテ、是ヲ破損スル時ハ、自然仏威ヲ墜シ、
 法光ヲ滅シ候道理ニテ、三宝ノ冥譴モ難測、諸天善神
 之擁護モ相薄ラキ、御大切之御祈之差障ニモ相成候
 テハ、誠ニ以テ奉恐入候儀ニ御座候、尤本寺之梵鐘名
 器報時之分ハ、御除ニ相成候趣、其段ハ難有儀ニ候得
 共、タトヘ边境末門之梵鐘タリ共、法器ハ即三宝物之
 随一、三宝ハ即鎮国之至宝ニ御座候得ハ、一器物物之
 壞滅ニオヒテモ、出家沙門護法之身トシテ、見聞ニ不
 堪、実ニ難默止事ニ御座候、今日之急務、専ラ武器ニ
 アリト雖モ、天変地変辺海不虞之防禦等、神仏之加護
 ニアラサレハ、人力之難及モノモ有之哉ニ奉存候、神

仏加護ヲ祈候ニハ、弥以法器ヲ不滅、法光ヲ新ニ耀シ
 テ、四海靜謐ヲ可奉祈御事ト奉存候、即今海内法器之
 損滅ヲ見テ、端拱黙然仕居候ハ、法臣タル者不忠不儀
 ト愚案仕候、仍テ聊カ為法門志ヲ懷キ、謹テ
 皇国擁護之旨ヲ守リ、奉不願恐侵礼度、遮テ上書歎願
 仕候儀ニ御座候、右寸情之趣被為分聞召、出格之
 御憐愍ヲ以テ、宜御執奏被成下候様奉願候、此段宜
 預御沙汰候、以上、

卯四月

延曆寺大衆等

座主官

坊官中

伝 奏衆へ被差出候御口上書写

御口上書

今般諸国寺院之梵鐘鑄替之儀ハ、被惱震襟被仰出候
 御事故、今更彼是被仰立候儀ハ、甚以憚被思召候
 得共、延曆寺大衆一同悲歎堪兼、奏状并口上書等差
 上候、右ハ御時勢無御掘御儀、御熟察被遊候得共、御
 沙汰ニ被為取候テハ不容易御事、且大衆歎願之趣意モ

難默止次第ニ付、深恐入思召候得共、御執奏被遊候、尤從

座主宮モ訊テ御歎願被遊度、何卒大衆一同之願意被聞召候様御願 思召候、依之山門大衆一同之 奏狀・口上書共被差出候間、何分自他宗一体之儀ニモ御座候御事故、此段宜御取扱御披露御頼之事ニ御座候、以上、

卯五月

座主宮御使

大谷法印

延曆寺大衆等呈書之文

但大高檀紙豎ニ認

延曆寺大衆等誠惶誠恐謹啓

輪王大王玉座下恭惟

大王万福尊体百順賢明睿達大撫本宗覆載之広上下各得其所沢及諸宗何幸過之爰有一大事関仏門群宗百家之興廢側聞頃有令除本寺及古米名器報時之鐘其他諸国寺院之梵鐘悉鑄敗之造大砲小銃置之枢要之地以備不虞我曹聞之疾首蹙額而相議此令果行于天下仏門之興廢不独萌于斯 国家之大事亦不外于斯其舊恐未可測焉当是時投

足於釈門者不問宗之自他誰有不懷護法城報仏恩之志者哉於是大衆等如臣子之赴君父之難豈遑察時勢願前後乃今月十二日敢犯

天威上疏歎願速停止其命雖然非唯憂所願難遂更恐此拳全為海岸防禦所施若付之武門臧否或決于關東成敗之所婦利害甚重事既逼且夕寧忍座俟其報乃不能鉗口翰筆敢割忠赤謹上白 大王座下伏乞質明鑑得失於古洪慈諭是非於 台君速使停止梵鐘鑄敗之事焉何則梵鐘之為靈器也鎮国安民之木鐸除災消難之標幟而晨昏擊之雲上諸天弘五衰之悲擁護 国家波底竜衆离三熱之苦調和風雨邪魔外道驚駭婦正賢聖神仙随喜雲集福于四生益于六趣其功其德昭々于具多光明于今是故月支叱王脱劍輪於健稚請長打於羅漢南唐先生免幽苦於鐘声託造鐘於嗣君稽本邦之古 嵯峨聖信靈器可尊揮 雄毫於鐘銘欲法雨普沾遐邇懸健稚於吾山其他無論迦膩王制惡竜之暴智與濟地獄之苦乃至窮鄉陋巷之一梵鐘悉皆無非具難思力用広益幽顯之至宝矣特如末山支利之鯨鐘多是寒土貧民之或割所愛或貼田宅或鬻衣服或減口腹為之尽心為之勞思拋清淨財戮信心力方所造鑄無非人人祝 宝祚延長四海靜謐各々祈 国家消災祖先得脱然一朝鑄敗之破其志失其望

不亦傷乎齊嬪含冤三年不雨難行下獄六月飛霜況闔國千萬億人民失其志懷其歎縱無有大旱飛霜之變恐不合父母於民之道焉期制挺撻堅甲利兵之効況洪鐘之靈威既如彼天龍之欽敬亦如此則尊重護持之三寶諸天必冥衛 皇基 仏陀善神定福隆

國家矣訪例于異域天寶之古唐玄宗請多聞天王於城上持護國神咒於禁闕西蕃賊兵不戰奔潰求證于 本邦弘安之昔仏陀戮力神明為援颶風覆船胡元將卒一時破溺今也夷賊窺于海岸 國家急于防禦宜特仰仏陀冥助切祈神明衛護之秋也然輕冥護于未定革梵刹之健稚於戰場之殺具恃武備于必勝麥拔苦之鐘聲於大小之鉦響三宝恐閉加護障諸天定遠離他方苟諸天神仙捨離国土三宝仏陀不加衛護力則將帥縱施必勝之術戰士各奮貫育之勇一朝挾退夷艦於海外所謂以刀服人者非心服也苟非中心誠服則使百戰百勝猶如蒼蠅隨弘隨聚鄙草朝芟夕萌南墨退北魯進今年去明年來黎民永苦于兵革

國家遂疲于軍費矣伏惟自弘安之一戰胡元千艦万卒溺于西海幾六百年于今矣宝鼎再移明清異世英主猛虎勃興攻城野戰不乏其人然後不復敢窺 皇國者何也蓋非必憚於防禦之敵畏武威之匹敵彼能審仏陀冥衛 皇基神明加護

國家明知非人力所及矣且夫如袈裟五種功德成于釈尊因時本願纔憶念之者輒顯恚鬪靜之惡心忽生慈悲柔軟之善心得其少分護持之者在怖畏軍陳之中能脫危難常得勝他況得其全分終身護持之者乎冥顯功用遠近利益広載經文不暇枚舉是故不勝寒苦之貧女懷之作小衣雷電霹靂立震死畏金翅鳥之龍屬得之著宮門上速免其難使生恭敬心梵鐘与袈裟体相固不同功用安有優劣毀壞袈裟為內衣之貧女既蒙死之罰鑄敗梵鐘造武器者寧免冥譴哉尊信袈裟著宮門之奄衆既免金翅鳥之難尊信梵鐘鑄敗之一舉仏門興廢不独関于斯 國家盛衰恐亦萌于斯仰請近做弘安之吉例凝信於三宝而措天下於泰山之安遠踐天寶之芳躅不動干戈而退夷艦於万里之外方今当宸襟不安于上怕怖加于万民之時為法為國不得不竭微忠危言犯 敵威之罪万死猶輕雖懼汗胸背憊倖万一有資於蕪蕘之詢遂忘固陋謹獻曝背大衆等長於山林不閉於礼節固疎事情不察時勢一片赤心唯念護法城報仏恩不知有所觸犯明知上天之難切仰大王之洪慈伏惟仏門百家之隆替 國家万民之安危只在大王呼唱仰冀洪慈矜其志不責其罪為之先容曲達 台聽速使停止梵鐘鑄換之事誠惶誠恐、

安政二年四月

延曆寺大衆等頓首謹上

健稚略鈔

諸經要集云如付法藏經云時有國王名闍呢吒貪虐無道數
 出征伐勞役人民不知厭足欲王四海成備辺境親戚分離若
 斯之苦何時寧息宜可同心共屏除之然後我等乃当快樂因
 王病虐以被鎮之人座上須臾氣絕由聽馬鳴比丘說法緣
 故生大海中作千頭魚劔輪廻注斬截其首統復尋生次第更
 斬如是展轉乃至無量須臾之間頭滿大海時有羅漢為僧維
 那王即白言今此劔輪聞健稚音即便停止於其中間苦痛小
 息唯願大德垂哀矜愍若鳴健稚延令長久羅漢愍念為長打
 之過七日已受苦便畢而此寺上因彼王故次第相伝長打健
 稚至於今日猶故如本 述日既知經意鳴鐘濟苦兼以集衆
 即須維那將欲打鐘斂容合掌發願利生之意因鐘念善使其
 受苦畢又增一阿含經云若打鐘時願一切惡道諸苦並皆停
 止若聞鐘声兼說偈讚得除五百億却生死重罪

降伏魔鬼怨 除結尽無余 露地擊健稚
 比丘聞当集 諸欲聞法人 度流生死海

聞此妙響旨 善当來集此

又雜喻經說偈云

聞鐘卧不起 護塔善神瞋 現在緣果薄

來報受蛇身 所在聞鐘声 卧者必須起

合掌發善心 賢聖皆歡喜

洪鐘震響覺群迷 声徧十方無量土

含識群生普聞知 拔除衆生長夜苦

六識常昏終夜苦 無明被覆久迷情

晝夜聞鐘開覺悟 怡神淨利得神通

法苑珠林百八十九鳴鐘部引祇洹經云祇桓戒律院内有
 銅鐘重三十万斤四天王共造欲集大千聖衆目連以通力擊
 之声震遠聞台高七千丈鐘形如吳地者四面多有日月星辰
 山川河海之像兼斗斛秤尺之形目連所擊隨事所表声出告
 知凡僧打者但声出而已其戒場戒院內復有大鐘台高四百
 尺上有金鐘重十万斤形如盃器上有千輪王像亦有千子各
 具足復有九竜八功德水種々諸相莊嚴此之大鐘却初之時
 輪王所造聖人受戒已得通者擊之声震三千一切聖人聞皆
 証果惡趣者得宿命通祇洹別有論師院有一銅鐘形如腰鼓
 是乾闥婆王所造也上有梵王帝釋魔王四王八部男子等像
 若有異学外道等將欲擊揚聞此鐘声諸根訥託無敢發言若
 有好心請決疑者聞此鐘声開發菩提得不退轉○復有別院
 名修多羅院有一石鐘如吳樣如青碧玉可受十斛鼻上有三

十三天像四面以金銀隱起東西兩面有大宝珠陷在腹中大如五升八角分隴狀若華形周而作十方諸仏初成道像至初日出時鐘上有諸化仏說十二部經舍衛城童男童女悉來聽之聞法證聖犯欲之者則不聞之摩尼大將以金剛杵擊之百億世界中声聞於光明中悉聞百千釋迦仏說修多羅經此鐘是拘樓秦仏所造彼仏滅度後娑竭龍王取去至釋迦仏與竜復將來至仏滅度已鐘先唱言卻後三月当般涅槃鐘聳諸天聞皆涕泣竜後將去○又阿難房前有一鐘磬可受五升磬子四辺悉黃金鏤作過去仏教弟子文鼻上以紫磨金為九竜形背上立天上像執推擊之声震三千音中亦說諸仏教誡弟子法此磬梵天王造及仏滅後娑竭竜王亦收入海宮中

繞高僧伝三十九智興伝云大業五年仲多次掌維那時鐘所役奉佩勤王僧徒無擾寺僧三果者有兄從帝南幸江都中路亡没初無凶告忽通夢其妻曰吾行從達於彭城不幸病死生於地獄備經五苦辛酸四言誰知吾者頼以今月初日蒙禪定寺僧智興鳴鐘發声響震地獄同受苦者一時解脫今生案処思報其恩可具絹十疋奉之并陳吾意從陸驚覺怪夜所由與人共說初無信者尋又重夢及諸巫覡咸陳前說經十余日凶問奄至恰与夢同果乃奉絹與之而與自陳無德並施大衆有問興曰何緣鳴鐘乃感斯応興曰余無他術見付法藏伝嚴賦

吒王劍輪停事及增一阿含鐘声功德敬遵此轍苦力行之每冬登樓寒風切肉僧給皮袖用執鐘槌余自厲意露手捉之蔽寒裂肉掌內凝血不以為辭又至諸時鳴鐘之始願諸賢聖同入道場然後三下將欲長打如先致敬願諸惡趣聞此鐘声俱時離苦如斯願行志常奉修豈唯微誠遂能遠感衆服其言

智興深信吒王之脱苦增一誠說鳴鐘靈驗既如此後人能踐智興之芳躅厲意感徵何疑

翻訳名義集第七云江南上元県一民時疾暴死心气尚暖凡三日復甦乃誤句也自言至一殿庭間忽見先生被五木縲械甚蔽民大駭窃問曰主何至於斯耶王曰吾為宋齊丘所誤殺和州降者千余人以冤訴因此主問其民曰汝何至斯耶其民具道誤句之事主聞其民却得生還喜且泣曰吾仗汝婦語嗣君凡寺觀鳴鐘当延之令永吾受苦惟聞鐘則暫休或能為吾造一鐘尤善民曰我下民耳無緣得見設見之胡以為驗主沈慮曰吾在位嘗與于闐国交聘遣吾一玉瑞天王吾愛之嘗置於髻受百官朝一日如廁忘取之因感頭痛夢神謂我曰玉天王王實於仏塔或仏体中則当愈吾因独引一匠携於瓦棺寺鑿仏左膝以藏之香泥自封無一人知者汝以此事可驗民既還家不敢輒已遂乞見主具白之果曰冥冥何憑民具以玉天王之事陳之主親詣瓦棺剖仏膝果得之感泣慟躄遂立造一

鐘於清涼寺鐫其上云薦烈祖孝高皇帝脫齒出厄以玉像建塔葬於蔣山 泛告凡寺院鳴鐘則息苦非必有智與之精誠鐘聲必有難思之力用無疑矣況智與者乎

天台智者大師臨終教維那曰人命將終聞鐘聲增其正念唯長唯久氣盡為期輔行一薩遮尼捷子經曰若破塔寺或取

仏物若教作助高若有沙門身著染衣或有持戒若鑿閉打縛或令還俗或斷其命若犯如是根本重罪決隨地獄受無間若以王國內行此不善諸仙聖人出國而去大刀諸神不護其國大臣諍競四方咸起水旱不調風雨失時人民飢餓却賊縱橫疫癘疾病死亡無數不知自作而怨諸天

若塔寺或仏物通拳三宝物梵鐘豈外于茲乎而大聖嚴誠如斯則不可不敬遵焉

悲華經說釋尊昔於過去宝藏仏所發菩提心曰願我成仏時令我袈裟有五功德一者我成仏已若有衆生入我法中出家著袈裟者或犯重禁或犯邪見若於三宝輕毀不信集諸重罪比丘尼優婆塞優婆夷若於一念中生恭敬心尊重仏法僧如是衆生乃至一人必與授記於三乘中得不退轉二者我成仏已天龍鬼神人及非人若能於此著袈裟者恭敬供養尊重讚歎其人若得見此袈裟少分即得不退於三乘中三者若有衆生為飢渴所逼若貧窮鬼神下賤諸人乃至餓鬼畜生若得袈

裟少分乃至四寸其人即得飲食充足隨其所願疾得成就四者若有衆生共相違反起怨賊想展轉鬪諍若諸天龍八部人及非人共鬪諍時念此袈裟尋生悲心柔軟之心無怨賊心寂滅心調伏善心五者有人若在兵甲鬪訟斷事之中持此袈裟是諸人等無能侵毀觸燒輕弄常得勝他過此諸難若我袈裟不能成就如是五事聖功德者則為欺誑十方世界現在諸仏於未來世不成菩提作仏

僧祇律曰諸龍常法畏金翅鳥常求袈裟著宮門上鳥見袈裟生恭敬心

唐高僧伝曰大唐貞觀五年梁州安養寺慧光法師弟子母氏家貧內無小衣入來子房取故袈裟作之而著与諸隣母同聚言笑忽覺脚熱漸上至腰須臾雷震霹靂乃母遂被震死火燒焦蹠題其背曰由用法衣不如法也、

袈裟功德广大既如彼壞衣之罪業可怖畏亦如此以例梵鐘成壞功罪不俟言矣

統紀第四十曰唐武德六年護沢県李録事凶常在余法師所聽講維摩其人言議師問之曰今議師問之曰今講此經感何人聽答曰自人頭已上便是鬼神上及諸天重級充滿然見諸天聞法師酒氣皆回面而聽余即悔過不復飲鬼又曰非唯此會独感諸天但有法事無不來降、

既曰聞酒氣回面其師不持結草之心守護鷲之行可知雖然諸天隨喜講經來集法會如此又曰不唯此會凡有法事諸天無不來臨身雖浼服可敬人雖惡法可尊明矣今時新学用心不親切執槌之維那多乏智興之志梵鐘確乎有不可測力用諸天神仙隨喜雲集聲々編於法界広益齒頭必矣況後世可畏衆生法不思議世雖及澆末何必無重智興者乎矣

奏狀

延曆寺大衆等頓首謹白

請特蒙

天恩停止以諸寺院之梵鐘鑄造大砲小銃狀

恭以經中仏以三宝付囑國王沙門無力自非王力誰所能守護哉故有諸國王受持三宝者仏使五大力菩薩來護其國是乃仏教也哉惟夫 皇國擁護之要乃在守仏道囑受持三宝受持之要正在虔敬之要在重法器之最則駐于梵鐘焉梵鐘之為靈器也諸仏菩薩之所護念天竜八部之所尊重一声纒響六道普通人天增益善心四趣免脫苦報乃至蚊虻無一不沾法益魍魅遠避鬼深窺寃鎮國之偉器呵禁不祥之至宝也五畿七道山路城邑僧園法場不可一日片時闕此法器豈啻僧中定散二六報時之用而已哉然頃頃云聞 太政官符合令

諸國司本寺及名器報時之鐘之外以諸寺院梵鐘鑄造大砲小銃未知此事實不若實者且於礼度則雖言似不敬而憑如來遺囑兮齊陳詞仰以

聖帝在位 朝廷治平 仁德所潤億兆人民恒浴其中興日月恩齊兮無異幸得仏法亦不墜地伏丐毀壞法器為軍器之事再 鳳詔兮令停止是禱誠惶誠恐頓首々々

今也國家急務信莫超過武備恩沢亦難暫忘但至破壞善神聚依法器為兵具者似不応理宜銷余器以鑄造欵然惟念法令忘言涉不敬苟罰其罪万死猶輕

陛下哀僧愚直幸維恕矣前慮不好後有大患將奈之何儻毀此之法器兮使鎮國聖神護世天龍皆悉捨去者惡鬼羅刹屯於其跡水旱不調五穀不熟災疫流行死亡者衆人困苦夷蛮侵剋不循道理皆思濁乱惡人軫多善者甚少日月軛促人命軛短其外地動空火暴風流浪如是等衆難競起万邦不靜斯時兵器之備欲防夷賊豈以可得哉乎熟惟往年饑荒既來邦國都邑多菜邑之民或火災累起聚落城邑勝境靈場為燦土者不可勝而計矣且墨夷來侵頻年不已是寔万民恐懼之秋也宜新造數口法器供養三宝顯祈國体安全冥救溺餓沈苦然劫毀廢信心檀主曾所鑄造梵鐘輒作兵器以可國家吉利乎哉肺腑分裂不耐悲歎之至 上書以請 天裁仰冀垂

洪慈如仏遺囑停止廢損法器是祈停止之興新造功德齊等
功德所感利益所沢一天風穩日月清照衆畜咸攘万祥悉集
帝都鞏固 宝祚延長生民喜躍亡靈亨嘉聖神久住仏天鎮
護

朝奏万歳之樂野謳千秋之歌 皇国雅優夷類自伏擁國家
之專務極濟黎庶之至要何事如之哉乎守護法器即守如來
遺囑護持三宝也護持三宝即擁護國家也梵鐘之驗經説伝
文記之別牋敬備

天覽仰願鑒臨 王法仏法二蔽紹隆唯於此一挙伏仰 朝
恩誠惶誠恐謹言、

安政二年四月

日延曆寺大衆等謹上

登美宮様御直翰登美宮夫人ハ水戸齊昭公ノ簾中

猶々いさい御用捨願上候、めて度かしく、

此本ハ御細々と御書戴有難存上まいらせ候、追々さむ
さに成り候得共、弥

其御所様御機嫌よく成させられ御事、御目出度そんじ
上まいらせ候、扱ハ段々御細々と仰載有りかたくそん
じまいらせ候、早速 前殿へ御咄し申候処、一体於

公辺も、梵鐘杯御引上ケハ、御好被遊候儀ハ勿論アラ
セラレス、如何様ニ被遊候は御よろしく哉と、色々御
配慮も被遊候共、昔と違ひ只今ハ異国にては、大き成
る筒先を一艘の大船へもあまた積来り候得ハ、中々日
本に是迄御座候筒杯にては用立兼、又右様の大筒ハ是
迄日本にて用立候筒無く候得ば、

公辺御初諸大名にても、多く所持いたし候者は無之、
諸大名も窮迫故、捨候地銅入用エ手間等莫大の事の上
し、天照大神より只今迄、

禁裏御血筋も目出度御つゞき被遊候処、如何被遊候は
御宜敷哉、万々一異国船の為に不計御事も出き候てハ、
決して不被為済と御当惑被遊候折から、梵鐘之儀以

叡慮被仰出候得ハ、將軍家にも難有被思召被仰出候
かのよし、日本さへ全く御座候は、追々鐘ハ出来候半
故の事かと存候、乍然寺々にて惜み申候ハ、持前の事
故、前殿にも無理とは不被存、尚 日門様にてハ御
持前の事故、一おう御申立に相成り候事ハ御尤に有ら
せられ候、従来万民の信施を以、漸々出来候品にて、
本より寺の品と申にて無之候得共、其万民存命にも候
は、たとへ自分ノの菩提には不相成候とも、天下の

御為と相成り候処にと、忠心の者は可存と私も存まいらせ候、扱

前殿にて御内々御咄しに、上野芝の儀ハ、御当家の御建立の御寺に候得は、公辺の思召に御相違遊し、又連勅杯申事に成行候は、鐘の事ハ指置御寺までいか様御不為に成行候哉も難計、万々一左様の事にも成行候てハ当 日門様にても被為濟間敷哉、尚又右様被仰出候程之儀ニ候得は、万一にも鐘をかくし置候寺杯も有之、後日にあらはれ候は、如何様仰附られ候御舍御座候も難計候得は、外寺方にて直に申立候共、悪敷節ハ其寺の迷惑に相成候のみに候得共、日門様より御取次にて被仰立候て、万々一御為よろしからぬ節ハ、以の外と存候、何を申ニも、

靱慮より出、於公辺も天下の御為と申所にて被仰出候を、彼是申候てハ、靱慮をも

公辺をも不憚、天下の御為にハ不相成候をも、鐘さへ出し不申ハよろしきと申所へ落入候ては、只其寺の害にのみ相成可申哉、夫に附いらざる事ながら、私考候に、法親王は申迄もなく、矢張

天照大神よりの御血筋、其外門跡かたも忠臣良臣の血筋ゆへ、日本の御為と相成る事は、供々御力を御つくしにてよろしき訳、其外の出家共にても、日本の御厚

恩にて人となり、衣食住も不足なく致候事故、日本の御為御警衛御手厚く相成り候事に候得ハ、共々に公辺をたすけたてまつりて、早速に指出し、扱又異国船寄不申時に相成り候は、其節新鐘吹立候にも可相成、左様相成り候は、両様共によるしかるべく哉と存候、是等の所能く御考の上にて被仰立候とも、程能寺々ハ御断遊はし候とも遊はし候て、よろしくと存し、御心安に任せ、前殿よりうけ給はり候て、私の考の趣申上まいらせ候、目出度かしく、

代 思 子

日門様

御請

別紙具くも御取次ニテ、御申立ハ万一其御寺の御不為に相成り候てハ不御宜候故、御申立なきかた御よろしくと存まいらせ候、扱又外寺々ニテも不為に相成り候てハ悪敷候へハ、願之趣日光様よりハ御取おさへ遊はし候方、其寺の為めよろしく哉と存まいらせ候、本

文にも認め候通り、追て異国不寄時ハ、日門様より御

願遣はされ候事も相成べく候得ハ、是等の所を以て、

よくよく先方にて承知致候様、御申さとしかよろしく

候と存しまいらせ候、何れにも異国のもやう、次第よく

に其毒深く相成候得は、一日も早く御警衛御手厚く相

成り不申候得ハ、とても日本ハ持こたへ御六ヶ敷候故、

よくよく寺々へも御申さとし遊はし候様にと存上候、

一八八 齊昭公親筆

一八八の一
前書

日門主御文等、統テ極密堀田へ為見可申ト、登

城之節持参之處、堀田不快ニテ不参候へハ、以書面申

遣候、扣如左籙中認候文モ相
添為見申候事也

昨烏御不参故御案シ申候、風ハ万病之本ニ候、御加

養專一ト存候、扱ハ過日為御見申候後又々云々被仰

越候処、万一蜂起候テハ不容易、サレハトテ今ト相

成被止候テハ、御威光ニ拘リ候儀、過日御申聞之通

ニ存候ニ付テハ、可相成ハ此返書ニテ喰止申度候所、

ケ様ノ振可然哉ト先大意認サセ候故、入貴覽候、御

存意モ有之候ハ、天下ノ御為故、無御伏蔵文面御添削

有之様御願申候也、

卯十一月五日

水 隠 士

堀田殿

一八八の二
堀田ヨリノ返翰、如左、

尊書奉拜見候、追々寒冷相増候得共、愈御壯健被為

在奉恐賀候、然ハ過日御糺御座候梵鐘一条、又々日

光御門跡ヨリ被仰入候ニ付、縷々御懇書被仰下候趣、

遂一奉敬承候、御別紙類得ト拜見仕候処、只今ニ相

成候テハ、右之通被 仰遣候ヨリ外御座アルマシク

存候、則御書類返上仕候、乍去山門等ニテハ深見込

候儀ト存候間、模様次第ニテハ、不容易場合ニモ至

リ可申哉ト、心配仕候儀ニ御座候、次ニ私不快御懇

篤ニ御尋被成下、辱次第存候、全当分之外邪ニ御座

候テ、不遠出勤モ仕候間、乍恐御放念被成下候様奉

存候、以上、

十一月五日

堀田備中守

御請

一八八の三

右様申来候故、堀田ヨリ返シ候簾中ノ文、其ママ簾中ヨリ 日門主へ指上候事、

猶々本文之儀へ、天下の御為と存候ゆへ申上候事、

必ず〱鐘之儀をおして願候にてハ御座なく、何も

〱御舎の本と宜敷〱願上候、めで度かしく、

御細々の御書のやう、忝拝見致候、ます〱御揃遊

はし御機嫌よく成らせられ御目出度、なを其御所様

ます〱御機嫌よく成らせられ御目出度、猶御委敷

伺度、左様に御座候得へ、梵鐘之儀、段々御細々御

深切ニ仰セ被下、深く〱忝〱拝見いたし、御

尤の御事に存しまいらせ候、愚僧にも右の御趣意へ、

兼々承知いたし候得共、先達も申上候通り、御同意

には候得共、一体僧侶と申者は、兎角不知短才の者

多分にて、御筋合の分り兼候者ハ多く、右故一旦は

勅命公命の御威光にて、鐘は御取り上に相成候とも、

万一人気さはきたち候節ハ、右僧侶に帰依致し居候

俗人も、諸家にては幾億万人に御座候哉、計りかた

く候まゝ、中々私ともさとし候儀ハ及ひかたく候、

其節は天下の御不為ともそんじ、深く心痛いたし候

尽、右の所異々御勘考願度候、猶又御本合にては、

御序の節宜敷〱願上度候、先は御請迄にあら〱申上まいらせ候、めで度かしく、

御別紙三通もたしかに落手拝見忝候、仰にまかせ

別段御請ハ不申上候、

御請内々

慈 性

七日夕認置

一八八の四

右七日夕御認にて簾中迄被遣候御文内には、一応老中

へ相談之上、御返事申上可然と存、堀田備中守へ如左

申遣候、

昨日杯は御出勤にも可相成よし、一昨日承り珍重に

存候、尚御加養專一に候、扱此間内々御見せ申候通

り申遣候へは、又々如別紙申来候処、如何様の振に

申遣候は可然哉、甚心配致候、今日登 城候は、貴

兄へ御談可申存候処、拙老モ先日中ヨリ少々風氣之

処、一昨日退散より少々熱氣有之故、今日は出仕不

致候、乍去全く当分の外邪、必御案被下間敷候、

一梵鐘之儀時を撞キ不申分ハ、先ッ飾同様ニ候得共、

於僧侶方ハ、ツマラス乍ラモ理屈ヲ付候ハ、何程モ

理ハ付候、ナクテハ不相成品ニ聞エ可申所、右様於
僧侶之方惜ミ申候品ヲモ、天下ノ御為ニ付御引上
ニ相成候上ハ、公辺ヲ初国主・領主等、自分ノ
品ニモ貫目以上ノ銅品モ可有之候ヘハ、右ヲモ大小
砲ニ被遊候ハ勿論、御領私領共ニ鉄器ニテモ、又ハ
木ニテモ事濟候品ハ右様致シ、銅器ハ指出シ大小砲
ニ致シ候様御達ニ相成候テハ、如何可有之哉、御役
々ヨリノ申出ニ、右之論モ見エ候様ニモ覺候所、表
向御達ニ出候事ハ不覺申候、又タトヘ出候トテモ、
其実無之候テハ、出候甲斐モ無之候ヘハ、公辺ニ
テモ御品々御下ケ此度銅器類ノ類ニテ、御領ヨリモ銅
御下ケ之趣上ケサセ大小砲御拵、御旗本モ自分ノ所持ノ銅品
大小砲ノ中製候共、又指上候共致シ、大名ニテモ自
分銅品并領分ノ銅品ニテ、大小砲製候様相成候ハ、
僧侶モ彼是ハ申問敷候半欵、食器ハ格別ニ候ヘ共、
燈籠其外貫目有之無用ノ品、殊ニ銅ニ無之候テモ相
濟候品多ニ可有之ト存候、依御相談申遣候也、

十一月十日

水 隠 士

堀田殿初

尚々、公辺ヲ初大名モ自分ノ品ヲハ少々モ
不出候テ、梵鐘ノミヲ目カケ申候故、僧侶ノ氣受
モイト、不宜事ト存候、

^{一八八の五}
右之通り申遣シ候処、一向挨拶無之、十二月二日登

城ニテ堀田ヘ逢候故、申聞候ヘハ、御返書被遣候ヘハ、
又何トカ被仰進候半故、最早御返書ハ不被進方可然ト
ノ申聞ニテ、日門主ヨリ簾中ヘ被遣候御文返シ候故、
右之段簾中ヘ申聞候テ、右之御返シ文ハ上ケ不申事、
日門主ヨリ簾中ヘ御文来ル義、手続ヲ以、内々上野方
探索致候処、内実ハ凌雲院之執筆ニテ、草稿指上申候
ヘ共、日門主ニテハ御発明故、右草稿御用無之、別
ニ簾中ヘ被遣候通り御認メニ相成候ヨシ、凌雲院ヨリ
指上申候草稿、如左ノヨシ、

抑梵鐘鑄換之儀、先達執当ヲ以テ伊勢守阿迄申入候
処、何分ニモ御沙汰ニ不相成趣ニテ、尚又此程二日
ニ被仰出候、此上僧侶ニテ強テ難申上候得共、実以
是ハ天下之御不為、甚以御不吉之事共ニ御座候ニ付、
無拠今一応申入候、先ツタトヘニテ申入候ニハ、軍
中ニテハ旗ハ軍神ニモ祭り、第一ニ相用候品ニモ承

リ及ヒ候、又火災ニハ纏ハ第一ニモ用ヒ候品ニテ、火ハ纏ニテ中々消ヌモノニ候得共、第一之品ニ御座候、又寺院コトニ本山ハ七堂伽藍相備リ候梵鐘ニテ、其内ニモ殊ニ梵鐘ハ格別重宝ニ相成、諸寺院ニテモ伽藍ハ無之候得共、梵鐘ハ夫々御座候程之品カラニテ、旗纏ニハ格別ニ深キ功德ト申事ハ無之候得共、時鐘等ハアマタ功德之御座候事ニ候、昔ヨリ今以貧寺等ニテハ、一紙半錢之淨財ヲ以鑄之候、其人望ト申ハ、天下大平五穀豐熟先祖代々回向之為メ、人命ヲ被殺害之品ニ相用ヒ候コトハ、甚以テ空シカラヌ事共ニテ、此上イヨク鑄換等有之御時ハ、変災等モ難計候事ニテ、尚又変異有之候節ニハ、ヤハリ出家等ヘモ御祈禱モ被仰出候事共ニテ、都テ出家ニテハ祈禱ニテモ、法事ニテモ、梵鐘ハ第一ニ用候品ニ御座候間、梵鐘鑄換更ニ御止ニ相成候カ、又ハ出家更ニ御止ニ可相成乎ニ存候、出家御止ニ可相成時ハ、是又災害等ハ必定可有之事ト存候間、何卒有来之梵鐘ハ此假ニ被相置候様ニ存候、是ヨリ後新造之分ハ暫之間、御見合ト申様ニ被仰出、尚又鉄具御不足ニ候得ハ、日用之鉄之燭台・火鉢・水鉢等御用ニ相

成候得ハ、世界ニ小物ナカラモ、却テ沢山之品故、御用弁ニモ可相成事ト被察候、尤

主上叡慮之辺ハ極密兼々令拝承候事ニテ、ケ様之儀ハ都テ關東ヘ御任之御事故、關東ヨリ申上上次第ニテ、別段更ニ御沙汰無之事トモ承リ及ヒ候、尤當時出家等ハ不律不如法之輩多端ニ御座候事故、梵鐘等都テ無益之様ニ被思召候次第御尤至極ニ御座候得共、中々左様之事ハ無之品ニテ、將軍家ノミナラス天下之御不為、且御不吉之事共候間、口ヲトゾ不申候事ハ却テ深恐入候間、愚僧身命ヲナゲウチ、達テ歎願申上候、偏ニ御勸考之程、伏シテ願存候、呉々私法中故法器ヲ大切ニ存シ申入候事ニテハ一切無之、実ニ天下之及災害候事不申入候事ハ不忠ト存候間、不願恐此段申述候、篤ト老中ヘモ被仰出候様伏テ御勸考願存候也、

此度地動ハ全ク天災トハ存候得共、右被仰出候其夜之事ニ候間、深心痛候間難捨置存候間、無抛申入候事ニ候也、

前文凌雲院ノ書案ハ御門主御用無之、簾中迄被仰越候ヘ共、凌雲院ノ志ヲ見ル為ニ書置者也、

一東台へ當時奸物手ヲ入候ハ、氷川大乘寺ト云フ日蓮宗之出家へ、東台之学頭凌雲院ト年来和歌之友ニテ懇意ノ由、凌雲院ノ手ヨリ泛解院へ申聞申上候由、凌雲院モ奸僧ノ由、其本ハ水戸山ノ寺日華ヨリ大乗寺へ申通シ、是ヨリ凌雲院へ申通候由風聞ナリ、

一八八の六
阿部伊勢守殿へ被入仰候御使口上書、如左、

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘、本寺之外古來之銘器及ヒ当節時之鐘相用候分相除、其余可鑄換大砲小銃之旨被 仰出候趣、御承知被成候、右ハ海防之儀專ラ御国力ヲ尽シ候折柄、御必用之品ニ有之、於諸寺院年来泰平之御恩沢ニ浴シ候儀ニ付、何レモ厚ク敬承可仕候得共、一体寺院梵鐘之儀ハ、夫々凝仏陀之救護候、願主ハ申迄モ無之六趣四生冥顯之利益被量之功德有之事ハ、経説論判明白ニ御座候処、宝祚延長御武運長久ヲ恊祈候儀、是又通規之願意ニテ、古來ヨリ勅願又ハ武家庶民ニ至迄、天下泰平・国家安穩・祖先之冥福・繁榮之為、誠信ヲ以テ製造致シ、家運永昌ヲ輝シ候儀ニ有之候へ共、三千威儀経々鐘磬十二事之撮要ヲ举有之候内、法用功德之事

ハ、縹素普通之必用、殊ニ諸国在々等ニテハ、人家掛離レ居候付、出水・大事・賊難(災カ)、其外非常不寄何事梵鐘ヲ合図ニ用ヒ候趣ニテ、敢テ報時ノミニ用弁無之処、此度御取上ケニ相成候テハ、已後臨時之手筈ヲ失ヒ、自然不虞之災厄可有之哉モ難計、且本寺之外トノ儀ハ、大小高下之寺格ニモ候得トモ、末寺門徒有之分ハ何レモ本寺席ニ候へハ、惣テ御除可相成、左候へハ多分ノ数モ有之間敷、其迄梵鐘差出シ候儀ハ、追テ御差図可有之由、右ハ

公儀ニテ御取寄之事ニハ候へトモ、万一夫々寺院ヨリ差出候様ニテハ、実ニ難渋ハ申迄モ無之、運送之儀、海河之最寄ニテ、通船等并利之場所ハ手段モ可有之哉ト候へトモ、山野辺ニテハ不容易失費等相掛リ、迎モ不行届之儀モ可有之候得ハ、当御支配下之分御断被仰入候様無之、右種々無余儀次第モ有之候上、当年ハ東照宮天下御一統之支干ニ相当、稀成御慶事之御時節、御門主御方ニモ御專務ノ御職ニ付、如先規御武運長久万世不朽之御祈禱、山門日光東叡山ヲ始夫々被仰付候折柄ニ候処、天下泰平・国家安穩・宝祚延長等夫々發願之銘文有之候梵鐘ヲ、鑄漬

シ候儀甚以テ御心障 思召候、右ハ叡慮ヲ以被 仰
進、一端諸向へ被仰出候ニ付、何共御斟酌之儀、表
立被 仰入兼候間、再三被為尽尊慮、厚御思惟被成
候へ共、御祈禱筋御職務ニ付相響、何分御黙止難被
成、無抛御内々被仰入候間、何卒御内評之上梵鐘鑄
換之儀被 仰出候迄ニテ、其何トナク御延引ニ相
成候様被成度 思召候、此段厚ク御含被成進、上件
之御旨趣相整候様、宜敷御取計之儀被為入頼候、依
之御使ヲ以被仰入候、

日光御門主御使

卯六月

信 解 院

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政二年

〔扉に、表紙の文字の外に、「元国事鞅掌史料（紙數五八枚）」の記載あり〕

目録

- 江戸御参観道中銃砲ヲ備ヘラル
- 近衛公尾州侯ニ御問合書
- 福井侯へ皇居御造管及ヒ魯艦云々御親書
- 尾州侯近衛公へ御造管及梵鐘ノ事返翰
- 蘭学講会所設立
- 魯英墨三国条約書廻達
- 幕府政務改革及ヒ質素節儉令
- 鹿兒島灣米國船渡来ノ事実

西洋通詞職創設

増上寺火之番免セラル

江川太郎左衛門御鉄砲方拜命報告

篤姫君近衛忠熙公養女云々布告

海防令

上杉家旧臣宮島誠一郎秘藏齊彬公御詠歌及書類

齊彬公事蹟考鈔

新納久仰上申書外夷処分云々

齊彬公近衛忠熙ヲ以テ御猷刀拵概略

水戸齊昭公琉球ニ於テ外国処分批評

軍艦昇平丸献上ニ付御刀拵領及軍艦略図

簡易質直云々布達

参考 造船製式附言田原明章自記抄

同 伊地知季安自記抄

同 諏訪伊勢履歷抄一時島津ト唱フ

参考 昨夢紀事抄

齊彬公福井侯ニ密書ヲ示ス

一八九 江戸御参観道中銃砲ヲ備ヘラル〔安政元年カ〕

近来異国船度々近海へ渡来ニ付、御警衛向段々御手厚被仰渡候ニ付、御伺之上御上下之節、御行列内へ御鉄砲拾挺為御持被遊候、然処御道中筋御供列ノ儀、当今実備專要ノ折柄ニ付、尚亦以来御先備御行列ノ内ニ、御挾箱并御蓑箱為御持、古来之通御持筒五挺銃ノ製式ハ、近代西洋ケ、ベール雷管機（俗稱、長筒雷管）為御持被遊度御願書、御用番牧野備前守様集成館製（地方）へ被差出置候通、伺之通タルヘキ旨、被仰渡候段申来候條、向々へ可致通達候、

二月

左衛門 島津久徴
駿河 新納久仰

如斯稟請セラレタル事矣、或ハ申稟書類、或ハ幕議等、御文書參看事実ヲ弁スヘシ荒井町ノ関門ニ數挺ノ小銃預ケ置、レン事実ハ雜記ニ記シタルカ如シ

一九〇 近衛公尾州侯ニ御問ヒ合セ書安政二卯年二月

猶々、寒暖不順ノ時候ニ候、專御自愛候様存候也、御書中恭拜披候、兎角春寒難去候、愈御揃御安全御超歳之御事、珍重不斜存候、旧冬モ不相替毎々色々御患投、深ク忝奉存候、從愚方ハ毎モ々々歳末ノ事共ニ候、御丁寧ニ御挨拶恐存候、当年モ何カ不相替度々御便モ可申承ト悦入存候、扱御造營ノ儀御尋、先々此節ニ

テハ礎取掛リ、日々御賑々敷事共ニ候、其内追々御普請取懸リト存候、（御築取ノ形）ハ、旧年モ御書中ニ示給候テ、定テ相整候様ニ御察シノ趣、御尤ニ存候、右之

儀、從旧多色々ト心配致居、日々其沙汰有之哉ト相待居候得共、何之沙汰モ無之、内々伝奏ヨリ申立候儀モ有之候旨承候テ、一入心配致居候処、此節篤ト承候へ

（政平、勘定奉行）

ハ、此儀ハ諸司代限リニテ、其御地へハ達ニ不相成候由ニ候、其故掛リ土佐守石上京モ候ハ、其節右之事

沙汰可有之哉ト相楽シミ居候事ニ候、頓ト于今不相分事ニテ心配致居候、御推察希入候、今一ヶ条ノ儀御尋

問モ承候、此儀ハ昨冬御沙汰ハ承候得共、私共不掛候事故、密々其筋承候処、從其御地諸寺院ノ梵鐘大砲小銃等ニ替替等ノ事、国々枢要ノ場所据付ノ大砲・水軍

船備ノ筒、又ハ野戰ノ筒等反射炉取建鉄銃製造可有之処、当節夷船畿内近海辺へ渡来差向候場合、実以時勢

無拠候間、諸国寺院ニ有之候釣鐘類、当節時ノ鐘ニ不相用分火砲ニ被替替度、尤当節柄何卒外寇ヲ除度志ハ

人々可有之候間、穩ニ承伏可致答ニ候得共、時勢ヲ不存輩モ可有之哉ト、再三評論ノ上

大樹公へ伺ニ相成候処、弥御心配御熟慮ノ上、時勢不

被得止場合ニハ候得共、

叡慮ノ御沙汰ヲ以テ、諸国寺院ノ釣鐘、本山ノ外当節時ノ鐘ニ不用分、大砲ニ鑄替候様被成度トノ趣ノ事、

右ハ極内々関白へ申来リ、関白被伺定、表向以

叡慮被 仰出候事ニテ、其御地ヨリ申来候儀ハ甚秘事ノ由、其故左之通御内慮、

夫外寇

文面略之、其

御地ヨリ御返答ニハ御時節柄格別厚

叡慮之趣御感悦、於關東モ兼々御内存モ被為在候儀

御同意ノ御事ニ候間、

御内慮之趣早速被 仰出様被

思召候旨申来候趣ニ候間、在体極密ニ御洩申候、此

儀ハ、実ニ誠ニ々々密ニ承合候事故、御含ミ深ク希

入候、扱又旧多ハ大樹公格別之思召之旨ニテ、一万

金御進献ニ相成候、御手厚キ御事感入恐悦ニ候、尤

御存ノ御事トハ存候得共、内々申入候、何か々々色

々申入度存候へ共、早春来御用繁、其上逆上気ニテ

執筆モ困リ、大乱書御分リ兼ト恐存候得共、御答迄

早々申入度、何モ御推覧希入存候、謹言、

二月七日

忠 熙

極密拝答

尾張殿

机下

異々モ 凸ノ処、トント不相分心配ニ候、何モ荒々

申入候、文中書損御推覧希候也、

編者曰、御案内狹隘ナルニ依リ、御取弘ノ叡慮ヲ近衛公ヨ

リ御密示アリテ、尾州公・阿波公・越前公等ト御協力ノ事

実ハ第^(ママ)卷ニ参看スヘシ、粗図ニ依リテ其地形明カナリ、

一九一 福井侯へ皇居御造営及ヒ魯艦云々御親書

齊彬公春岳侯へ皇居御造営ノ事及魯船ノ事御回答^{安政二年正月}

前略、浪華へ魯艦碇泊ノ形勢、土浦ヨリ相廻候御密翰

被成下一覧ニ及申候、聞及候通ノ次第ニテ、実ニ被煩

宸襟候次第、殿上人モ参内ノ由、天保山ノ模様云々、

異人上陸致候段、是又承知致候、第一

天朝御造営ノ儀ハ、何ヨリ御急務ニ有之、別テ当今ノ

時節、海内ノ人望ニモ関候儀ニ付、取訊ケ御念ヲ被加

候様致シ度、既ニ宗城^{伊達}ヨリモ洪波ニテ船廻シニ相成

候御材木、破船ニ付手間取候趣相聞、何分難行届切齒

痛歎ノ至、加之例ノ近衛殿ヨリ申来 凸^{御築地ノ処モ、}

勢州阿部伊勢守へ申談トウカ致ス様ニ相見得、最早此義ハ近衛殿へ申遣候テモ宜敷旨申聞有之候付、返便近衛殿迄申遣候処、矢張是迄之通 御造営 凸ノ体ニモ外ヨリ承リ、拙子ニ置候テモ、對

天朝欺候様ニモ近衛殿モ被存候テハ、甚以心痛此事ニ有之候、如何 御造営相成可申哉、不相替含糊ノ体ニテ何事モ弁シ兼、徒ニ憂慮云々ノ次第ニ有之、尊書之趣ニテハ、御材木幕炎上ノ御手当ニ中品ヲ上品、下品ヲ中品ト取扱候儀、実ニ被為濟難キ 御処置ト奉存候幕吏ノ所為當時如此、關老辺ノ為ス、且又下田ノ魯船沈没ニ付処ニ非ス、下吏利己ノ為ス処ナリテハ、罹難ノ魯人共へ手当筋ノ儀、御申越、是ハ至当ノ御正論ト敬服致候事ニ付、直様右等ノ儀ヲモ水老人烈へ申入候事ニ御座候、是モ御同意ニ付、右老ヨリ指示有之候儀ト被存候、何トソはハ貴説ノ如ク致シ、呂梁ノ詠人モ信ニテ妙ヲ得候事、外夷ニ對候テモ兎角ニ信義ヲ以テ

御アシライ無之候テハ難叶必然ノ道理極御同意ニ付、此上モ力ノ及候限ハ周旋可致候、其他御心付ノ御長策ノ儀モ有之候ハ、猶承度云々、略ス、

正月

一九二 尾州侯近衛公へ御造営及梵鐘ノ事返翰
前略、拙生今般道中無滯帰国仕候処、御祝詞被成下、海岳奉拜謝候、陳ハ

禁闕御造営モ追々御賑々敷相成、已ニ過日ハ石河土佐守上京之砌、内意ヲ含候義ト相見へ、脇路守當時諸司代脇坂淡路守參 内仕、兼テノ義、表向被 仰立候様御導モ申上候由、左候得ハ御十分ノ義ニハ不參候共、凸上形ノ処ハ、弥被行候儀トモ相見、於小生ハ大慶不斜御事ニ御座候、全ク大樹ノ忠志ヨリ出候事ノ由ニテ、阿闍全初モ是式ノ 御事トハ存入候処ヨリ、御成就ニ相成候儀ト被存申候、拙モ微力ノ及候ニテハ無御座候得共、惣テ同勢一氣ニ 天氣ヲ大切ニ奉存候儀ハ不外奉存候ニ付テハ、御書中過當ノ御言葉ニ預リ、実ニ汗顔ノ至、決テ左様ノ儀ニハ無之候、右ハ御内々
叡慮ニモ被違候趣、扱々冥加至極、難有仕合、銘肝ノ至ニ御座候、乍併全ク寸志微忠ニテ、御文意トハ不相当ノ儀、畏縮身ヲ置クニ所ナク奉存候、猶御含置被下、可然御執成奉希候、且又先般相同候梵鐘一条ハ、極密其起源御洩被下再愕ノ儀ニテ、全ク無御処

叡慮ノ由御尤至極、已ニ彼是ト不快ノ人々共有之、且
歎願ノ寺院モ有之候由寺院歎願ハ梵鐘、是又左モアルヘキ
由ノ部ニ一括ス、御事柄、今更是非ノ弁別モ申上兼候得共、結局如何落
着可仕者哉、存外ニ当今天下ノ情態ニ取り、平易ニハ
難被行意味モ事実モ可有之哉ト、密ニ心痛仕居候、其
余關東ノ様子等ハ、何等承知不仕候得共、只不穩トハ
申事ニ御座候、呉々モ前件早速御知セ被下、実ニ大慶
安心仕候、猶又奉復且乍序時下御容体ヲモ奉伺度呈拙
筆候、誠恐敬白、

四月

一九三 蘭学講会所設立

近年異国船追々致渡来、於 公辺モ蕃書調所モ被召建、
段々御改革被仰出、往々諸国へ渡来難計事候ニ付、明
時館ノ儀、是迄御曆者役宅ニ被召置候得共、御曆者居
宅ハ右囲内ニ此節別段御造立相成候ニ付、右へ引移、
是迄ノ役宅都テ明時館御役所ニ被仰付、蘭学講会等ノ
節ハ、右へ出席御用向取扱候様被仰付候条、此旨向々
へ可致通達候、

但蘭学教授并取扱ノ儀ハ、御帰殿歸國ノ上可被 仰

付候、

三月

駿 河新納
久仰

編者曰、本書明時トアルハ、一名天文館ト唱へ、製曆或ハ
天時測量等ノ一局ニシテ、館内ニ天候測量台ヲ設ケ支那式ノ
渾天儀等
ヲ設ケ、曆官水間・磯永・石塚ノ輩、構内ニ居住シ事務ヲ執
レリ重要公、
伝參看、此時ニ当リ本記ノ如ク洋学講習所ヲ設ケラレタ
リ、之ヲ本藩洋学校ノ創起トス、是ヨリ前ハ各好ニ依リテ
学ヒタリキ、

一九四 魯英墨三国条約書廻達

安政甲寅ノ歲、我日本帝ト魯西亞・英吉利・亞墨利加トノ
条約ニ関スル覚書達書及条約書、左ノ如シ、

口演之覚

一昨十三日達付、伊勢守 殿宅江相越候処、別紙書面
被相渡、尚又口達にて被申聞候は、右は先達御約定に
相成、応接の向へ尋候趣も有之、此節表向見置候様に
との事に候間、同席一同へ申通候様、右之通約定には
相成候事ながら、種々難題申立、反復難計夷人共にて、
不容易御時節、如何様之儀到来も難計候間、其心得を
以て手当向行届候様可致、治に乱を不忘は、政治第一

の事に候間、能々致通達候様、且又同席中名差にては難申候得共、格別手当無之向も有之後ニ事情形勢ヲ記ス、参看スベシ、又は名目而已にて、実備無之家々も有之候様相聞候間、以後は急度手当行届候様有之度、若此上等閑ノ家々有之候は、被及御沙汰候儀も可有之候間、国持庶流迄も無残処申通候様、猶測量等ノ儀、今日大和守世久殿宅にて御達申儀も御座候間、虚飾無之様精々相達候様にとの事、左候て御請の儀は、御披見之上、以使者伊勢守上殿へ御請被仰達候様、御賢息方へも御通達有之候様にとの事、

右相済、大和守上殿へ相越候処、別紙被相渡、五月過参り候との事故、最早近々可参、何れ御断に相成可申候、勿論此方より事を好み候儀は無之候得共、応接の次第に依ては、何時戦争に相成候も難計事故、其心得を以て、手当行届候様にとの御趣意に候間、不洩様相達候様にとの事、御請使伊勢守上殿の通に候事、

八月十五日

松平薩摩守齊彬

松平大學頭様

松平播磨守様

松平左兵衛督様

阿部伊勢守上様より魯西亜・英吉利・亜墨利加条約和解並御添書、且又久世大和守様より亜墨利加日本海測量の儀に付、和解並御添書御口達之趣、薩摩守より演説書一通被相添、御通達被致候事、御銘々様御順達にて、御承知の上、薩摩守方へ御承知の旨、被仰遣度儀に被存候、

右之通為御心得申達候様、薩摩守被申付候、以上、

松平薩摩守内

仙波市十郎

伊勢守殿ヨリ御渡ノ御書付写

魯西亜・英吉利・亜墨利加等へ別紙之通条約御取替セ相成候得共、追々諸夷入港ノ上へ、以後ノ御実備弥以肝要ノ儀ニ付、銘々右之心得ヲ以テ、尚又平常寛悟モ可有之事ニ候、因テ為心得条約書写相達候事、

別册略

(順聖公年譜ならびに薩藩史料資料館にて校訂)

一九五 幕府政務改革及ヒ質素節儉令

御政務之儀

御代々様之

思召ヲ被為繼、毎々御世話被為 在候得共、年久敷昌平之化ニ浴シ、人心兎角外見虚飾ニ相流レ、万端御手重ニ成行キ、無益ノ手数ノミ相増シ、御実備ノ処往々御安心不被遊、殊ニ近来諸夷引統キ致入津、夫々御処置ノ品モ有之候得共、後來別テ非常ノ御手当肝要ノ儀ニ付、此度諸事格別簡易ノ御制度ニ被為復、総テ無益ノ旧習手重ノ古格ヲ被為省、質直ノ士風ニ相成候様被遊ト之 思召ニ付、追々被仰出候品モ可有之候、因テハ一同右之 思召ニ基キ、万端厚ク申合、聊等閑ノ心得無之様忠勤ヲ可被励候、

八月 (七日)

右之通、從 公儀被 仰渡候条、此旨与中支配中諸向ヘモ不洩様可被申渡也、

九月十五日

御家老座印

一九六 鹿兒島灣(萬延元年)へ米国船渡来ノ事实(萬延元年)

六月二日七ツ時分、異国船一艘前之濱へ走セ入り、上町

八町岸岐上町海ノ通唱前十余町許ノ沖合ニ碇船ス、此船鉄船ニ

テ、長サ凡四十三四間、横七間位、二百人乗ニテ、石火

矢二丁・短筒自在砲廿五挺ヲ備フ、本国ハ米国ニテ国ヲ出タ

ルハ十ヶ月前、唐土南京辺ヨリ諸方へ廻航イタシ居、此節江戸ヨリ長崎へ差越、薪水乏シク当港へ立寄リタル旨申立タリ、乗組人ノ内死人多カリシト、日本語モ可也ニ通スト云、所望品左ノ如シ、

一薪木 四千束

一玉子 三百

一水 六拾樽

一アチ魚 三十位

右之品物買入レタリ、薪一束代五文、玉子一ツ廿五文ツ、ノ代価洋錢ヲ以テ払ヒ、而シテ翌三日七ツ過異状ナク出帆セリ、

渡来ノ米国船ハ、鯨獵ノ為メ日本海ニ来リ、薪水缺乏シテ、之レヲ求ムルカ為ナリシ故、何ノ障碍モナカリシト雖モ、水夫等上陸シテ、市街ヲ散步シ、物品ヲ買ヒ、或ハ妄ニ人家ニ立入ラムトセシ故、婦女子ハ驚愕シテ、窓戸ヲ鎖シ、男子ハ其無礼ヲ憤リ、腕力ヲ用ムトセシモノモアリシニ、役員出張シ、制止シ、騒事ニ至ラサリシ、如此彼我ノ間ニ若シ誤リアルトキハ、大事ニ立到ルヤ言ヲ俟タス、故ニ尔後之レヲ制止センカ為メ、上下町両市街海岸ヨリ通過ノ箇所ニ関門ヲ建設シ、再ヒ渡来上陸シ

テ、今回ノ如キコトアラハ、関門ヲ鎖シ、恣ニ歩行シ得
サラシムヘシ、若シ暴行ニ及ハ、国法ヲ破ルノ非行ヲ
鳴ラシ、彼ノ政府ニ照会シテ、法ニ行ハシメント令セラ
レ、然シテ市街各所ニ関門ヲ設ケラレタリ道ノ関門、維新後
廢藩迄依然タリシ
カ、其後
撤去セリ

一九七 西洋通詞職創設

右ハ唐通事同様ノ振合ヲ以テ被召建候条、可承向ヘ可
申渡候、

九月 (二十四日)

駿 河新納
久仰

本藩ニ於テ、西洋通弁ヲ置レタルハ、之レヲ狷メトス、從
(詞カ)
來唐通語支那通弁及ヒ朝鮮通弁ヲ置キタルノミ朝鮮通弁ハ、伊集院
南代川人ニ限レリ
外國船渡來ノ節、通弁ハ唐通詞又ハ儒者ヲシテ、筆談或ハ
文章ノ応答ニ止マレリ、故ニ仔細ノ事情ヲ弁スルコト能ハ
サリキ、茲ヲ以テ一職創置セラレ、数多ノ青年ヲ撰ンテ、
長崎ニ遣ハシ從學セシメタリ、則チ上野敬助カ如キモ其撰
(候補)
扱中ノ一人ナリ上野カ父ハ唐通詞タリ
敬助モ見習員ナリキ

一九八 増上寺火之番免セラル〔安政三年〕

(安政五年)
来々午年琉球人被召連御参府ニ付、増上寺火之御番被
達御免候旨、先月十六日御用番堀田備中守様ヨリ被仰
達、御跡代リ丹羽左京大夫様へ被仰出、御次渡相濟候
段御到来候、此旨向々へ可致通達候、

九月 (安政三年)
筑 後川上
久封

火ノ御番ト唱フルハ、幕府驕潜ノ一ニシテ、其謂ワレナキ
多言ヲ要セス、大小驕候ヲシテ、己カ祖先ノ廟所東觀山寛
永寺・三縁山増上寺寺ノ火防役ヲ命シタルヲ云フ、其役タ
ルヤ、数多ノ士卒或人足等凡一ケ年間寺内ニ宿直シ、昼夜寺
内ヲ巡邏セシメ、火防ノ器械ヲ備ヘル等、経費ノ巨大ナル
言ヲ俟ス、若シ隣近火アルトキハ藩主親ヲ出馬シテ、防火
警衛ニ従事スル、恰モ家臣ヲ使役スルニ異ナラス、然ルヲ
外様大諸侯ハ之ヲ栄トシ役セラレタリ、譜代大小名ハ江戸
城各所ノ門衛ヲ一年交替ニ為サシム、其経費モ亦火ノ番ニ
同シカリシト云フ、前記布告ハ、如此経費大イナルカ故、
琉球王使ヲ從へ参府セラルヲ以テ、未タ満期ナラサルニ、
特別免役セラレタリ、実ニ徳川家ノ潜上無礼、此一ヲ以テ
知ルニ足レリ、又甚シキニ至リテハ、御茶壺護送ト唱フル
アリ、將軍飲用茶ヲ城州宇治ヨリ江戸ニ送ル、毎年五・六
月ノ候ニアリ、駅々ノ警衛最モ厳ニシテ、警蹕ノ声イカメ
シク通過セリ、諸大名モ途ニ逢フトキハ、下馬シテ道ヲ讓

ル、若不敬アルトキハ、護送ノ役人種々口実ヲ設ケ、主人
譴責セラル、ニ至レリ、実ニ暴慢ト云フヘシ、火ノ番ノ如
キハ潜上ノ極ニシテ、天子ノ御陵泉涌寺ノ如キハ、荆葎ノ
中ニアリ、各山陵ノ如キモ所在詳ナラサルモアリ、故ニ水
戸殿ヲ初メ有志ハ、修繕ノ議ヲ建言スル者アリト雖モ、敢
テ願ルコトナシ、暴護潜上ト謂フモ誣言ニアラサルナリ、

一九九 江川太郎左衛門御鉄砲方拜命報告〔安政元年〕

以一紙致啓上候、然ハ拙者儀、今十八日被為 召候ニ
付、登城致シ候処、不存寄御鉄砲方兼帯被仰付、勤方
是迄之通^{代官} 相心得、御鉄砲方御用之儀ハ、諸事若年
寄ヘ相伺、且与力同心新規可被召付候間、人数等取調
相伺、組ノモノハ勿論門人共ニ至ル迄、大砲船打方調
練其外近来発明ノ業^{洋式} 何レモ致習熟候様、精々厚教
授可致旨、紀伊守^{簡井紀伊守} 殿被仰渡、難有仕合奉存候、右
御吹聴可得貴意如斯御座候、乍御世話一紙御順達、留
リ御方様ヨリ御返却可被下候、以上、

〔安政元年〕
四月十八日 江川太郎左衛門

松平薩摩守様

御留守居様

江川ナル人ハ、代々^{葦山}代官ニシテ、当時文事武事有名ノ
人ナリ、中ニモ洋式砲術^{高島}ニ長シ一家ヲナシ、安政ノ初
メ御鉄砲方ニ举ケラレ、高島喜平^{旧名四郎大夫}モ附屬トナリ、当時
許多ノ門生アリ、公ハ非凡ノ人物ナルヲ以テ、御懇交ナリ
キ、江戸ニ於テハ、芝新錢座ニ官邸アリ、邸内ニ洋式砲台
ヲ築キ、数門ノ大砲ヲ備ヘ、事アルニ方リテハ、門生ヲシ
テ守防ノ設ヲナセリ、

因ニ記ス、江川氏カ^{葦山}二代々代官タリシハ、鎌倉時代ヨ
リシテ、徳川家ニ至リテ^{転変}ナク連綿相伝セリト、葦山ノ
官宅ハ、鎌倉時代ノ建築ナリト云、古雅ニシテ広大ナリ、
日蓮僧カ自筆ノ棟札ヲ掲ケタリ、屋内ニ土間アリ、柱ハ立
木ノ俣ナルアリ、此土間ノ中ニハ二三ノ大砲ハ容ルヘク、
古雅ナル最モ稀有ノ構造ナリ、廣貫江川氏ト懇交ナリシ故、
適々遊歴シテ宿泊シ、親シク見ル処ナリ、公ハ如此有名ノ
輩ヲ親シク召サレテ懇遇セラレシ故、彼モ又大ニ公ノ御徳
義ニ感シタリ、

二〇〇 篤姫君近衛忠熙公養女云云布告

太守様^{齊彬} 月次ニ付、去ル朔日 御登城被遊候処、篤

姫様御事 近衛様公^{忠熙}御養女被 仰出、御縁組^{將軍家被}定公
 為 在候ハ、御由緒柄御親モ弥増恐悦之御事候間、近
 衛様へ御熟談被為 在候処、阿部伊勢守様ヨリ被遊御
 承知候段御到来候、此旨御内々奉承知候様、月次御礼
 月次御礼云々、朔望廿八日ヲ月次ト唱フ、罷出候面々へ可申渡
 各登城シテ、御安否ヲ伺フノ例規ナリ

四月二十六日

駿 河新納 久仰

篤姫君將軍家定公ニ結婚ノ始末ハ、別項記スカ如ク、近衛
 忠熙公ノ養女トセラルヘキ旨、閣老阿部伊勢守及ヒ公ヨリ
 御懇請アリ、往古ヨリノ御由緒モ深重、且將軍家御結婚ハ、
 天下ノ為メ輕カラサル事情ノ存スルアリテノ事故、近衛家
 ヲリ内情天聴ニ達セラレシニ、歎感アリシトナム、

二〇一 海防令〔安政元年〕

今度渡来ノ亜米利翰船、内海^{ハ浦賀}以内^{ノ通}唱^{退帆}致シ候得共、
 右滞船中彼是自^{自便ノ所業云々、悉ナ人知ルカ如シ}便ノ所業云々、悉ナ人知ルカ如シ
 或ハ物品ヲ掠奪セシ等^{乗船ノ輩上陸、恣ニ人家ニ押入り}有之候ニ依リ、意外兵端ヲ開キ候儀
 コトモアリシト云、モ難計候ニ付、夫々御固メ被仰出候得共、船軍ノ御備
 向モ未タ御整不相成折柄、無余儀平穩ノ御処置被成置、
 彼方志願ノ内、漂民撫恤、并航海来往ノ御薪水食料石

炭等、船中欠乏ノ品被下度トノ儀、御聞届相成候処、
 場所御取極メモ無之候得共、何国ノ浦方へモ勝手ニ渡
 来不取締ニ付、豆州下田湊・松前ノ箱館ニ於テ被下候
 積ニ候、当今不容易御時節ニ付、兼テ被仰出モ有之候
 通、質素節儉ヲ相守、此上水陸ノ軍事一際相助、若シ
 非常ノ儀モ有之候ハ、速ニ本邦ノ御武威相立候様可相
 心掛候、

右之通、早々可被相觸候、

四月 (安政元年四月九日)

右之通從 公儀被 仰渡候条、不洩様可致通達者也、

四月

御家老座印

這ノ布告ニ対シ、或ハ去ル甲寅年下田開港ヲ許サレタルニ
 就テ、世説囂々、大ニ人心ヲ惑乱シ、種々ノ党派起リ、政
 府ノ処置ヲ憤慨シ、過激ノ挙動ニ出ントスルモアリ、或ハ
 開港説ヲ唱フルアリ、或ハ二百年來泰平無事、武備廢弛、
 士氣衰弱、外夷ノ巨艦練卒ニ抗スルコト能ハサルカ故、暫
 ク渠カ請ヲ容レ、我カ政務ヲ整理シ、武備ヲ嚴ニシ、而シ
 テ後寬猛何レニモ決セラレント得策ト唱フルモアリ、交々
 一ニシテ足ラス、朝廷ニハ長コクモ深宮ニ座マシテ、外国
 ノ形勢事情ニ御疎ク、一向ヲ攘夷ヲ主張シ玉ヒ、彼我強弱
 ノ弁ナシトモ云フヘキ形況ナリキ、我カ公ハ元來開港ノ御

論旨ナリト雖モ、軟弱ノ処分ナルハ痛ク好マセ玉ハス、國
体ヲ失ハス、對等ノ條約ヲ結ハレント、御建論モ屬々ナリ
シト雖モ、一トシテ採用セラレス、既ニ去ル甲辰年(弘化元年)以來琉
球ニ於テノ御処分モ、開港ノ御措置允許ヲ得ラレタリト雖
モ、時勢人情ヲ慮ラセ玉ヒ、琉人ヲシテ少シク開市ノ端ヲ開
カシメ、公然タル交通取引ハ時ヲ俟セ玉ヒシハ、去ル丙午(弘化三年)
年御下國ノ際、國老中ニ訓示セラレシヲ以テ知ルヘシ、故
ニ只管武備充実士氣振作ニ努メラレ、或ハ物産繁殖ヲ奨励
セラレ、他日大ニ開市、對等ノ條約ヲ結ヒ、國威ヲ海外ニ
輝カサレント心力ヲ尽サレ、這布令ニ對シテ、殊更國力ノ
養成ニ努メラレタリ、

二〇二 上杉家旧臣宮島誠一郎秘藏齋彬公御詠歌 及書類

一昨十三日達ニ付、伊勢守宅へ相越候処、別紙書面被
相渡、口達ニテ被申聞候ハ、右ハ先達テ約定ニ相成
接ノ向へ尋候趣モ有之、此節表向見置候様前記廻達
書参照トノ
事ニ候間、同席一同へ申通候様、右之通約定ニハ相成
候事ナカラ、種々難題申立反覆難計夷人共ニテ、不容
易御時節、如何様ノ儀到来モ難計候間、其心得ヲ以テ

手当行届候様イタスヘク、治ニ乱ヲ忘レサルハ政治
第一ノ事ニ候間、能々致通達候様、且又同席中名差ニ
テハ難申候へ共、格別手当無之向モ有之、又ハ名目ノ
ミニテハ、実備無之家々モ有之候様相聞得候間、以後
ハ急度手当行届候様有之度、モシ此上等閑ノ家ニ有之
候旨及御沙汰候儀モ可有之候間、國持庶流マテモ無残
処申通候様、猶測量等ノ儀、今日大和守殿宅ニテ御達申
候儀モ御座候間、虚飾無之様精々相達候様ニトノ事、
左候テ御請ノ儀ハ御披見之上、御使者伊勢守殿へ御請
被仰達候様、御賢息方へモ御通達有之候様ニトノ事、
右相濟大和守殿へ相越候処、別紙被相渡五ヶ月過(五月)參候
トノ事故、最早近々可參、イツレ御断リニ相成可申候、
勿論此方ヨリ事ヲ好ミ候義ハ無之候得共、応接ノ次第
ニ依テハ、何時戰爭ニ相成候モ難計事ユへ、其心得ヲ
以テ手当行届候様トノ御趣意ニ候間、不洩様相達候様
トノ事、御請使者其外伊勢守殿之通ニ候事、

八月十五日 松平薩摩守

上杉彈正大弼様

外御名略ス

右松平薩摩守殿演說書一封、外ニ阿部伊勢守殿ヨリ

魯西亞・英吉利・亜米利加条約和解并御添書、且又
久世大和守殿ヨリ亜米利加日本海測量ノ儀ニ付和解
并御添書、松平薩摩守殿ヨリ、彈正大弼在国ニ付、
国許へ相達シ、彈正大弼承知被致、直ニ薩摩守殿へ
返書被遣候事、

安政二年乙卯八月

右ハ拙家記録中ヨリ抄出致、入貴覽候、

明治二十六年四月十九日

宮島誠一郎手記圖

山形県人宮島誠一郎氏カ、旧藩主上杉齊憲伯ヨリ明治二十
一年十二月八日ニ、自ラ携帯シ来リテ、贈ラレタルモノナ
リト云フ、

1101511

橋上初霜

齊彬

やまかけは嵐はけしく初霜の

むすぶもさむき谷の岩はし

右ノ御詠ハ、嘉永六年將軍家慶薨去ノ際ニ諸大名皆宮中ニ
詰ムルノ例ナリ、齊彬公モ大広間ニ詰メ玉フ、上杉伯モ亦
同席ナリ、無聊ニ堪ヘス二三ノ侯伯（伊達宗公モ此御一人

ナリシト云ハレタリ）御相談ノ上、互ニ宿題ヲ出シテ、翌
日詠歌ヲ携ヘ来リテ、交換シタルトキニ、公ヨリ御譲リア
リシモノナリトソ、數葉御所持ノ処、或ハ人ニ与ヘ、或ハ
散シ、只今一葉ヲ留ム、依ツテ欽慕ノ余リ、形見トシテ与
フトテ、他ニ齊彬公ヨリ贈リ玉ヒシ書牘ヲモ示シテ、与ヘ
ラレシモノナリトテ、宮島氏ハ大切ニ保貯セラル、乞フテ
之レヲ拝見セシニ、包紙ノ表ニ上杉伯ヨリ賜ヒシ年月日ヲ
記シ、真中ニ島津齊彬公ノ御詠歌真筆トアリ、裏ニハ子孫
之ヲ愛蔵スヘシ云々記サレヌ、
前記ノ如ク、大小名多クハ武備不行届云々、久シク泰平ノ
化ニ浴シ、花奢ノ風ニ陥リ、虚飾ニ流レ、加之士氣衰弱、
護国ノ用意ハ毫モナシトモ云フヘキ時勢人情ナリシハ、喋
々ヲ候タス、本書ニ記サレタルハ、其実ヲ挙ルニ因セラレ
タルカ如シ、

1101512 齊彬公事蹟考鈔〔安政元年〕

1101511

是ヨリ先三原藤五郎等ニ命シテ、大砲船及ヒ蒸汽船（船ハ

一小雛形ナリ、記ス処大）二十四間・二十間各一艘口、造ヲ造ラシム、
船ナルカ如シ、誤レリ）船所大隅牛根郷及ヒ桜島ニアリ

十七日（安政元年三月）ニ至リ龍骨船大砲（船ハ

是ヨリ先米利堅船来テ琉球ニ泊ス、二十九日報江戶ニ至（安政元年七月）

ル、是日公書ヲ新納久仰ニ賜フ、其略ニ曰ク（前卷ニ全文ヲ記ス）

当地先靜謐ノ事ニ御座候、魯西亜モ自国ニ戰爭有之候間、急ニ渡来ヘ無之様子、只今ノ内ニ武備十分ニ被仰出時節ト存申候、頃日本老公ヘ御軍政御改正被仰出、井戸岩見・筒井肥前守始、御軍政掛被仰出候間、多分船軍等ノ御役向等モ備可申ト存候、其様子ニ依リ候テハ、此方モ船手ノ役々出来不申候テハ相成間敷存申候、内々考置候様可致候、

一 琉球届ノ儀モ未タ差扣置候、右ハ弥出帆ノ届ト一同ニ出候方可宜ト存候間扣申候、シカシ出帆永引申候者ハ其内差出シ可然、来月中旬迄出帆ノ左右無之候ハ、一 往届出シ可然ト存候、尤モ琉球約条書、并ニ下田ニテ約条ノ書面モ相添候テ差出シ可然ト存申候幕府へ届出等ノコト從來如ク

斯コト多々アリ、玆ニ初リタルニアラス
一 砲術訓練モ追々盛ノ由、全ク世話行届候故ト大悦ニ存候、猶此上無油断可申付候、

一 野戦台打折候由天保山ニ於テ試、右ハ打棄多過候ト存候、驗ノ時ナリキ

是ヨリ先六皇居火シ、御劔ヲ失ス、帝密詔ヲ公ニ賜フ、

略ニ曰ク、薩州深切万端懇志実足歎歎、猶且有望似心耽欲雖願甚愧、火後一劔惟是欲求、閏七月三日公乃チ右大臣近衛公ニ因リ、正宗・國光ノ刀ヲ献ス献上云々、帝特感喜

曰、実可調家伝宝劔悖適脱望、二十四日世子虎壽丸芝邸ニ天ス、公歌ヲ作り哀ヲ洩ス御歌歌集、初メ吾先公世々親

世折ノ烏帽子ヲ冠ス、是月公更ニ左折ノ烏帽子ヲ製シ、

号シテ島津折烏帽子烏帽子ノ条ト称ス（高祖得佛公始テ右大

將頼朝ニ見ル時、左折ノ烏帽子ヲ冠シ玉ヘリト云フ、其画像越前

ノ岩船郡岩船村岩船神社ニアリハ文字伝言、画像參看、公其製ニ法リ、是ノ冠

ヲ製シ玉フ、故ニ是名アリ）

十二月十三日、大砲船一艘又タ成ル長昇平丸ニ同シ、大砲十挺ヲ

装置シ、左右各砲門アリ、二十四日国老蒞テ大砲ヲ試ム

（試運転ノ条參看）

二〇四 新納久仰上申書外夷処分云々〔嘉永五年〕

私事乍無調法者当務被仰付、殊更琉球逗留嘆人方掛被仰付、不容易御用筋ト奉存、当惑仕罷在候、然処右嘆人引弘方ノ儀ニ付存寄有之候ハ、可申上旨承知仕、当務昨今ニテ可申上様モ御座ナク候得共、嘆人所行ハ勿論御取扱振リ承知仕候処、是迄ノ通嘆人申掛候難題

程能申断落着安心ニテ、平穩ニ引払候不被成候テハ、
以来何様ノ時宜モ難計、万一騒敷事共成立候テハ、屹
ト不可然儀ニ奉存候、外ニ申上候程ノ存寄無候座候、
此段申上候、以上、

(嘉永五年六月二日)
六月

新納内藏

右ハ拙者御軍役方惣頭取兼務ノ節、嘉永五年子六月
存分申上候様、豊後^{島津}久宝殿御取次ヲ以承知イタシ申
上候趣也、

二〇五 齊彬公近衛忠熙公ヲ以テ御献刀拵概略

新藤五國光作長壹尺八寸

御縁頭頭黒漆菊総蒔絵烏金駒子蜻蛉金

御目貫赤銅銀色絵班瓦

御柄 総金波高彫

毛抜形総金雲平彫

御目釘金菊表裏

御鷓 烏金蜻蛉金

御帶留全

御纏口全

御鍔 金粉

御鞘 黒漆藤蒔絵

御下緒 萌黄紅梅綵

御小柄 裏金銀平彫
赤銅色絵瓦

御小刀 薩摩国平正良作

御袋 大和錦地朽葉白小莢紋紐紫

裏紫浮緑綾丸

正宗ノ御太刀御裝飾ハ、枚聞神社蔵兵庫鍛御太刀ニ擬セ
ラレタリト云(旧記ニ天智帝御物ナリシト云々)

二〇六 水戸齊昭公琉球ニ於テ外国処分批評

(烈公)批評

前文欠失

如前文、薩州琉球ニテハ、通信通商不致ヨシ異人ニ申
候共、於公辺弘化二年乙巳六月朔日、返翰被遣ニハ、
海外諸邦通信貿易固無一定及^阿後議シテ定^乙通信之國通
商之國^阿通信ハ限^阿朝鮮琉球^乙、通商ハ限^阿貴國与^乙支那^阿
云々被仰遣度上ハ薩州琉球ニテ如何様申候共、右書面
ヲ証拠ニ出ス時ハ一言モ答ハ相成間敷事也、

這書誰ニ向テノ書ナリヤ詳ナラス、水戸家保存書ノ中ニア

り、

二〇七 軍艦昇平丸献上ニ付御刀拝領及軍艦略図

安政二年卯十一月廿五日

御座間

松平薩摩守

御手自御差シ

御刀 備前国景光
代金百五十枚

御脇差 同作
代金百枚

右ハ、先達テ大船昇平丸砲器類共献上被致、早速御用
途ニモ相成、御満足被 思召候、依之於御前拝領候、

松平薩摩守

思召ヲ以御菓子被下候、

右於御白書院縁類、老中列座大和守申渡之、

以上記スルカ如ク、特別ノ賜品類例罕ナルコトナリシ故、

國中恭祝ノ式ヲ行ヒタリ、其布達略ス、

二〇八 簡易質直云云布達

御政務之儀、

御代々様之

思召被為繼、毎々御世話被為 在候得共、年久敷昌平

之化ニ浴シ、人心兎角外見虚飾ニ相流、万端御手重成

行無益之手数而已相増、御実備之処往々安心不被遊、

殊ニ近来諸夷引統致入津、夫々御処置ノ品モ有之候得

共、異国船渡来別テ非常ノ御手当肝要之儀ニ付、此度

諸事格別簡易之御制度ニ被為復、総テ無益之旧習手重

ノ古格ヲ被為省、質直之士風ニ相成候様被遊度トノ

思召ニ付、追々被

仰出候品モ可有之候、因テハ一同右之 思召ニ基キ、

万端厚ク申合、聊等閑之心得無之様、精々忠勤ヲ可被

励候、

安政二年卯八月 (七日)

別紙之通從 公儀被 仰渡候条、不洩様早々可被相触

也、

十月

御家老座印

二〇九 参考 造船製式付言 田原明章自記抄

(二〇九の一) 本藩隅州櫻島ト云一小島ノ海湾ニ安藝アリ、其傍ニ宜キ

地形アリ、造船場ヲ設テ、堅牢ナル船ヲ製造スヘキノ命 (オホフネ)

ヲ蒙リ、謹シテ其事ニ敬諾ス、按スルニ國家ノ急務、只
管當時海防ニアラン、恐クハ預シメ

皇國非常ノ不虞ニ備ヘ玉ヒテ、辺海ノ無事ナルヘキヲ深
ク慮リ給フ、且ハ領内諸島ノ運送ニ、舟船風波ノ恐れ覆
瀾ノ虞ヒナキヲ、衆人ニ恵マセ給フガ故ニ、船司ノ吏人
御給奉行其他ヲ造船場ニ置カシメテ、其事ヲ督セシム、最モ
船手目付等

此製造ヲ初起スルニハ、和蘭一千八百二十二年、造船匠
何某ナル人ノ著ハセシ「レーキ」ト云原本図写ノ教業、
且ハ七種軍艦造法論ノ図式ニ参考シ、工夫ヲ加ヘ、記憶シテ
カ(コンパス)

テ渾発(両脚規)ノ術ニ基キ、夜ヲ以テ日ニツキ、聊カ其方則
ヲ考索シテ、稍部分ノ割算・乘法大約分明テ、既ニ造製
ノ術ヲ得タリ、勿論此二書ノ図式ニ全船ノ造法詳カナラ

サルカユヘ、其欠漏タルヲ補ハント、一葉西洋船ノ諸図
ヲ索メテ、能ク参互折衷シテ、復タ数日ニ及ヒ、漸ク其
欠漏ヲ補ヒ得テ、洋船ノ形状ニ様式ヲコシラヘ、單ク思、
精ク驗テ、嘉永癸丑ノ五月ヨリ同十二月ニ至リ功ヲ竣リ
テ、十五間ノ船一艘ヲ製造シ、後チマタ二十間ノ船・二
十四間ノ船、一同ニ兩艘宛製造スヘキノ 命ヲ再ヒ蒙リ、
稽首シテモトノ船匠ヲ集メテ、其事ニアツカリ、既ニ造
工モ央ハ過ギ、ヤガテ落成スヘシ、実ニ民ノ為メニ深ク

慮リアラセ給フテ、善ク海上ノ患ヲ捍キテ、風波ノ難ヲ
免カルヘシ、コレ恐クハ
公ノ賜モノナリ、其事ノ重仁ナルヲ永ク船匠ニ告知ラセ、
且ツハ手統キヲ遺忘センカ為メ、二十四間ノ造船規定ヲ
本則トシ、之ニ加ルニ何十何間ノ船ヲ造製ストモ、其惣
長サエ究メタラハ、此算術ニモトツキテ造製セハ成ラザ
ルコトアルマシキニヤ、因テ船匠トモノ便ナルヨウ、其
製造ノ事由ヲ記シ、後世ノ一助ニモナラント、拙キ筆ヲ
造船場ノ座上ニ採ルハ、安政二年乙卯ノ秋八月ナリ、
薩藩 田原明章謹撰

公首造^{メテリ玉フ}軍艦^ヲ數隻^ヲ略^中初使^メ陶^ヲ猗^及花田喜三^ニ左衛門^到長崎
一、承^テ旨^ヲ窃^ニ聞^ク和蘭船頭某^ニ請^フ製艦^ノ術^ヲ、贊^{タリ}得^ル其事^ヲ、
而^レ歸^リ于^ニ國^ニ詳^ク上^ニ申^ス焉、厚^ク蒙^リ獎賞^ヲ、然後嘉永六年癸丑五
月^先是嘉永四年冬鹿兒島^ニ於^テ試造^ス、造船場^ヲ設^キ立隅州櫻島漕之
浦^ノ事^實ハ軍艦製造記^ニ参看^スヘシ、造船場設^キ立隅州櫻島漕之
浦及牛根郷^ノ兩所^ニ、命^シ御船奉行長崎勘介・橋口左衛門
及御軍賦役^ヲ、御船頭花田喜三^ニ左衛門^ト、御船大工福崎仲左
衛門・西郷直次郎^等其他船司之吏人若干^ニ、令^シ督^ル其事^ヲ、
一隻^ハ同年十二月竣^ル功^矣、亦復軍艦製造之樹木^ヲ爲^シ後世^ノ、
育^ニ樹^ニ于^リ日州諸縣郡高岡郷去川山中^一、略^下

〔薩藩海軍史にて校訂〕

右序文ヲ略抄ス、余ハ公ノ事実ニ関スルコトナシ、序末ニ曰、于時明治十七年甲申夏五月

田原陶猗 謹叙(敬白)

以上田原カ記シタルモ、其概要ニシテ悉シタリトハ云ヒ難シ、故ニ本藩ニ於テ、洋式模擬ノ大小船製造ノ因テ起リタル頭末ハ、後巻第(マ)巻速記録ニ記スルカ如シ、

集成館ハ集成館ハ著者誤レリ初メハ鑄製方ト一局ヲ被召立、弘化三年丙午五月、上町築地弁天社傍へ、齊興公御代ニ御家老調所廣郷・御趣法御用人海老原清瀧へ其事ヲ督セラレ、将来御軍備ノ大砲及小銃ノ製造ヲ被仰付、金・銀・銭出納等ノ事ハ和田八之進へ被仰付、大砲鑄造・小銃製作等ハ成田

正右衛門、次ニ私へ被仰付、其後木脇權一兵衛・竹下清右衛門へモ同断被仰付候、於其後、公ノ思召茲ニ記ス公ノ思召引移リシハ万延元年ノ夏、茂久公御代ナリ、當時廣員ハ局員ナリノ故、引移ニ關係セリヲ以テ、磯御飯屋傍集成館之レナリニ被引移玉ヒテ、集成館ト改局シ、尚盛大ニ御軍備向ノ器械被為整、剩へ他藩諸侯方野戰砲ノ製造所御願有之、多分出來相成候事、

二二〇 参考 伊地知季安自記抄

九月十九日、公遙ニ家老重臣ニ命シテ、更ニ風俗ヲ矯正シ、文武ヲ奨励セシム、公國ニ莅ム首トシテ、風俗ヲ矯

正スルヲ務ム、此ニ至テ重テ此令ヲ出ス、是ヨリ先公幕府ノ命ヲ受ケ、大砲船ヲ牛根牛根ニ造船所アリニ製造ス、二十八日(皇)昇天丸成ル長十五歩(季安ハ事実ヲ詳ニセサリシナラム、牛根ニ云々等大ニ誤レリ、軍艦製造記ニ参照スヘシ)

十一月九日、米利堅船一艘來テ、山川港ニ泊ス、新納久仰等兵ヲ指揮シ、海岸ヲ成ラシム、十八日ニ至リテ去ル(事実届書ノ部ニ詳記ス)、二十一日又一艘種子島ニ來リ、海岸ヲ測ル、何國人タルヲ知ルコトナシ、二十五日事ヲ長崎鎮台ニ報シ、更ニ成ヲ海岸諸所ニ置ク、

二二一 参考 諏訪伊勢履歷抄(一時島津ト唱フ)

安政二年乙卯八月廿八日、御軍役方惣頭取兼務ト為ル、命ニ曰、帷帳ノ内ニ出入シ、軍陣ニ臨ミ、太鼓ノ役ヲ兼ネ、進退指揮ヲ掌ル可シ、常ニ政府ニ上リ、軍政ノ事務ヲ預聞シ、要テ衆議ヲ聖メ斟酌(兼九)、其ノ宜キヲ取り、以テ之ヲ參決スヘシ、若シ御出馬アルトキハ、從行スヘシ、或ハ代公率師ヲ率ルモ、亦時宜ニ從フヘキノ命ヲ奉ス、同日琉球國佛人奄滯ニ因テ、警衛ノ為メ航海スヘキノ命ヲ蒙ル(在琉事実別記參看)

二二二 参考 昨夢紀事抄

二二二の二 十一月二十六日夕阿闍老候ヨリ御密答書、左之通、

過日ハ貴翰被成下謹テ拝読仕候、兎角不同之候候処、
倍御清榮奉賀候、陳ハ従是モ大御不音打過背本意候、
且又別紙二冊御厚意御認取拜見被仰付、再三熟覽仕
候処、何レモ御尤千万ニ存候、併四年目參觀、妻〔女殿カ〕國許
ヘ差遣シ〔當時ノ發論ナリシモ実行ハ文候ト申義、此義ハ如
久二年ナリ、今記参照スヘシ候ト申義、備中堀田モ兼テ御
何可有之哉ト、愚存ニテハ考申候、備中堀田モ兼テ御
懇意之事故、水府老公ト小生計必戦ノ事ヲ申候ト申
事ハ御省キ、其余少々ツ、御認替、同人ヘ封書ニテ
モ御差出シ被成候方可然、小生ハ心得モ致居存申候
得共、外面ヨリ書面出候方都合宜有之候間、左様御
承知可被成候、左候得ハ筆頭之義備中ノ方可然存候、
其余之義ハ過日彈正〔參カ〕承リ候節、御内問ノ様モ有之、
其節附札ニテ御答申候間、別段否不申上候、別紙二
冊モ留置候得共、前々御認等ノ御都合モ有之候ハ、
一ト先上ケ可申候、何モ過日ノ御答乍延引申上候、
謹言、

十月二十六日

二白、時氣折角御自愛專一奉存候、神田橋御住居之

義ニ付被仰下承知仕候、小生義折惡敷風邪頭痛、眼

氣ニテ引居申、風邪頭痛ハ先快方ニ候得共、眼氣ハ

未直リ不申候、腹合筋張全痛氣之動〔動シ候カ〕ク事ト拙医共申

聞候、併ナカラ此節柄一兩日中ニハ押テモ出勤〔之カ〕ト覚

悟罷在申候、平臥中別テ乱筆御仁免可被成下候、以

上、
此書意ハ第十三卷中ニ記ス処ト參考スベシ、
〔マカ〕

二二二の二

十一月五日、柳川侯〔立〕立ヨリ御來書中、左之通、

然ハ堀田氏〔備中〕守再勤ノ一件、彼是聞糺候処、荒増相分

申候、右ハ元來阿闍不好義ハ相違無御座候由、然ル

処、当今不一通御用多有之候処、何事ニモ阿闍一人

ヘ打懸取扱ニ相成候ニ付、阿闍モ不被任心底、此後

迎モ如何様ノ可有變動トモ難計候得共、事ノ一二悉

皆一人ヘ懸リ、甚心痛被致候旨、且外ニテハ上席出

來兼候間、堀田氏ヘ再出取計ニ相成候様ニ御座候、
〔趣カ〕

乍去万事矢張阿闍ヨリ出候由承リ申候、先看板ノ積

共ニヤト被存候、探索之俣極密申上候、御他言堅御

断申上候、何モ尊答迄如此御座候、頓首、

十一月五日

二二三の三

十一月五日、公福山侯ヨリ御建議ノ御答、御同意ニハ座シナカラ、御担当ナサルベキ御様子ハナクテ、御上席譲リ聞ヘ玉フカラニ、頼モシカラスハ思召トモ、福山侯ノ仰スルマ、ニ、猶又御文段之上御添削アツテ、今日佐倉侯ヘ遣ハサル、其折ニ添ラレタル御内書如左、

一輪致啓上候、兎角不同ノ候寒威増加ノ処、愈御佳安珍重ノ至御座候、御重職被蒙 仰、為天下欣賀之

至御座候、当節別テ唯々御繁務ト致推察候、扱又今般大變絶言語候、為貴邸類焼一層ノ御困難ト万々推察申候、其砌ヨリ御歎御見廻モ可伺筈之処、彼是遅引御宥恕可被下候、此品輕微之至ニ御座候得共、聊御見廻之驗迄進入申候、御笑留可被下候、

一兼テノ鄙衷并今般大變ニ付愚考共別冊二入貴覽候、何卒御熟覽御篤考之上、無御伏藏御教示可被下候、御同意ノ上ハ、御主張專御周旋所希望候、扱恐入候御時態ニ付、只々モ亮察希申候、右相同度旁早々如此御座候、謹言、

十一月五日

右御建白ト共ニ、御封物ニテ遣ハサレタルニ、彼方ヨリ

御返翰アルヘントノ事ニテ、御即答ハナカリシナリ、但御建白ハ初ニ記スル故略之、

二二三の四

十一月六日、昨日佐倉侯堀田備中守ヘ御建議御書面サシ出サレシニ付、右御写シニ添ラレ、福山侯ヘ被遣候御直書、左ノ如シ、

不相変不同之氣候ニテ、一兩日寒氣俄ニ倍加之処、弥御清全御勤務珍重之至御座候、其後ハ彼是不音罷過候、御風邪并御腹合等愈御快然候哉、同度候、然ハ

過日ハ彈正指出、種々相伺候処、御内慮之趣與一兵衛迄御移シ、夫ニ附紙ヲ以テ、申越了然承知申候、其後御細答書被下、御繁劇中御煩勞之御事共千万辱、別テ御住居一条早速御沙汰被成下、大ニ都合宜、全ク御周旋故ト不堪叩謝候、且又愚衷書取二冊ノ儀、來論委細拜承、則少々ツ、認替、備中殿ヘ昨日指出候付、右写シ又々入貴覽候間、過日ノ二冊ハ御返却可被下候、右ハ貴兄ヘノミ御相談之積リニテ相認候事故、彼是当り障リノ儀モ有之候得ハ、此二冊ト御取替可被下候、将右之内、四年一度參觀之一条前如何思召候由、尤御制法ニ相拘候事ニテ、不容易儀ニ

ハ可有御座候得共、カ、ル御時態、非常之御英断ヲ以テ、銘々必戦ノ覚悟出来候様、御仕向無御座候テハ、イツ迄モ御実備ニ相成候事ハ決テ有之間敷、則別冊ニモ認候通り、何分依旧之形勢ニテハ如何様相考候テモ、実ニ必戦ノ手段ハ相立兼申候、猶又別冊〔附紙許〕ノ趣等、御熟考可被下候、兎モ角モ此大好機會、不日ニ御一新之敵令御配慮ノ程、一向黙禱罷在候、右時下御見廻旁為申陳草々、以上、

十一月六日

尚々俄之寒氣殊更折角ノ御保持專折申候、当節御用多御退出モ延刻ノ条承及候、遠方ト申不一方御勤勞共致推察候、何分万々御自愛可被成候、本文之趣具々御熟察、尚宜御舍御主張ノ程伏希申候、過日モ佳魚御恵投万謝之至御座候、此品不相変魚鮓ニ候得共、折柄御見廻之驗迄進入、御笑捨可被下候、お謚モ追々快方ノ由、何カト御世話話共多謝、尚又ヨロシク希申候、以上、

右御別冊ハ、佐倉侯へ被指出ニ等シケレハ爰ニ略之、御〔紙脱カ〕附モ初ニ記ス、

二二の五

十一月七日、水府老公へ御内書并御副密啓被進、外ニ佐倉侯へ被指出候御建議写シ一冊被指出御書中、左之通、連日晴色寒氣倍加之処、弥御壯健可被成御起居奉恭賀候、先日ハ〔先近日ハ〕震氣モ相取り候哉ニ御座候、其後御不音罷過背本意候、扱貴館敗壞所修覆、御仮住ハ出来ニ候哉、御按事申上候、寒氣之節殊更御難義ト推察仕候、右御安否相伺、何ソ進呈仕度奉存候得共、存付モ無之、一籠之内魚菜不礼之至御座候得共御慰迄ニ奉呈上候、御笑味被下候ハ、本意之至御座候、右相窺度如此御座候、頓首、

十一月七日

二伸、時下俄之敵寒、具々モ折角御愛護奉禱、不相替何角御心勞共ト奉推察候、以上、

二二の六
御別紙

副啓、先日ハ再応御密答〔書カ〕以細縷被仰下難有奉拝承候、乍併按外之御様子柄、今更驚入何共失望之次第、熱中不啻仕合御座候、如貴論〔聲カ〕イカ成世態々御座候哉、其後モ色々愚考仕候程恐入候儀ニ御座候、将又如貴論愚存書取、認替阿闍へ指越候処、趣意随分尤ニ存

候旨何分心得居候間、佐倉へ指出候方都合宜旨、追

テ申来候ニ付、其節モ申越置候通り、又々書面彼是認替、過日佐倉へ指出候処、返報追テ右申越ト申来

候事ニ御座候、則右写シ入雷覽候間、御取替可被下

候、先日ハ尊公限リニ御相談旁相認、入貴覽候事ニ

御座候間、右二冊ハ御返却可被下候、尚又阿闍へモ

右同様写シ指越置候事ニ御座候、此等ノ趣御含置可

被下候、扱世上ノ様子相変候事モ無之、追々復常之

趣承及申候、佐倉之様子モ種々世評有之候由、御都

合如何ニ候哉、内々探索モ仕候得共、相分リ兼候、

只々

御一新之程、奉仰企候外無御座候、先日之御密書中

ニテ忘途嘗然罷在候間、尚又当座之心得ニ可相成儀

モ御座候ハ、御教諭奉伏希候、頓首、

右被仰進候処、御報彼方ヨリ可被仰進旨ナリ、

二二の七

十一月八日、水府老公ヨリ御返報、如左、

如諭寒氣倍加候処、益御勇健抔賀々々、此節居宅之

事御訊問ニ付、海鮮等御投慮、毎度御徳意令感佩候、

先々老幼〔其脱カ〕一同無事、御降心可給候、右報答早々也、

十一月八日

二白、時候御厭專一ニ候、此蟹国産ニ付、乍微小供

御一笑候、不悉、

二二の八
御別紙之御上書

別貴答直ニ火中、

御別紙縷々被仰付候儀何モ承リ申候、桜香モ有之候

〔付カ〕ハ、委曲相含居候間一論イタシ候半、乍然拙老方迄

桜花来候得ハ、宜敷候得共、何共安心不致〔脱カ〕候、又

匂ヒ来候トテモ、不残其通りニ出来候義ハ安心不致、

ト雪ト相違位ノ処ニ可相成哉トモ被察候得共、セメ

テハ雪ト墨トニハ不相成ヤウ、一首論申度候、御書

中成否ハ扱置、御論ハ勿論十分御尤ト存候、サヘテ

安山子〔案〕へハ匂ヒ不及、貴家へ返翰来リ候ハ、極密

一覽イタシ度候、

一又極密御咄申候、去ル甲辰弘化元年之一条モ、家老結城寅

壽・家老隠居藤田清軒抔申者申合得此姦兇ハ多ク候ハ名前略申候、水

戸山寺ニ住居候法華坊主ノ日華ト云フ者モ、右党ノ

中ニ〔脱カ〕テ候、頗大姦、又小普請組ニ相成候谷田部雲八

今ハ藤七郎下申候、甚姦人ニテ、是迄モ色々姦策ヲメクラシ申候、

前文谷田部事ハ連枝高松讃ノ役人ヘ取入、高松ト井

伊ハ懇意故是ヲコシラヘ、阿部初ヲ入カヘ候上ニテ、

老中ヨリ指図致サセ候テ、正論ノ人ヲ退ケ、姦党ヲ

用サセ可申トノ計策是ニハ色々ト阿初ニモ、有之候得其大意如此候、又日華坊ハ

梵鐘御引上之義ニテ諸士ウツ、キ立騒ニ相成候云々

ハ拙老・阿部ノ扱不宜故、カ、ル騒動ニ相成候云々

高松等ヨリ申上、拙老初ヲ打技可申之計策、基本ハ

結城寅壽初之姦人、先ツ公辺ノ役人ヲ入カヘ置候

テ、其上ニテ新役人ヨリ公辺ノ御指図ニイタシ、

人々ノ姦党用ニ相成候ヤウノ姦計ニ候、如何ニモ巧

ナル事ニ候、扱又本願寺掛所ヨリ京地本願寺ヘ文通

致シ候ヲ、内々拙老手ニ入候処、是ハ又次第相違ニ

テ梵鐘等引上ニ相成候ハ、拙老之胸中ヨリ出候事ニ

テ、右ハ諸人ノニラミヲ(分カ)

天帝ヘカケサセ、人望ヲ失セ置候テ、拙老天下ヲ取

當時水戸老公ノ巷説種々アリタリ候企ナリトノ事有之候、其中二十三ヶ

条有之候処、其中一ヶ条ハ、先ニ拙老ヨリ林大學ヘ

法事ト申事世ニ行レ候得共、右ハ何経ノ中ニ有之候

哉聞申度由ヲ、阿闍ヘ申、林大學頭林大ヘ尋候処、右之ヶ

条第一ヶ条ニ認、其外ハ右掛所ノ悪僧ニテ作り認候

事ニ候得ハ、林大ヨリモラシ候事ト相見ナリ、油断(相見ハカ)不相成事ニ候、

前文拙老ヲ打落云々ノ書付、並懸所ノ坊主云々ノ事モ、極密先日阿闍ヘハ為心得見セ候処、是ハ御内々御咄申候、阿闍ヘモ御咄ハ御無

右之通り故、カ、ル折ニテモ専ラ武備ノ世話イタシ

候テハ不宜候故、内々ニハ世話モ致シ候得共、表向

ニハ音楽・鷹杯イタシ候テ、夷船等ニハアマリカマ

エ不申様見セ置申候、何事ヲモ捨置候テ、世話致シ

候テサヘ不行届折カラ、右様ノ嫌疑ヲサケテ、武備

ノ方ハ内々ニテ世話致シ候事無已事ニ候、乍然奸人・

奸僧ニ打落サレ候得ハ、内々ニテ世話出来不申様相

成候テハ、是又無已候、ケ様ナルモ時ト相見得申候、

咄之度々大息イタシ候計ニ候、何モ極密貴兄故御咄

申候、ケ様ノ時節ニテモ変禍為福ノ義出来不申様ニ

テハ、此先又洪水凶作等ノ事モ難計、イツ本ノ事ナレ(行カ)

可申カ、卜城前急認候、御覽後直ニ御火中、

過日ノ御書付ニ返上、御落手可給候、

異国のあたの防きのなきまゝに

天地の神せむるなるらし

大なるにかゝるうきめをみることも

神なき月の例ならまし

此度の地震ニ付、命助り候人ノ袖ノ中ニ必馬ノ毛(毛ヲ降ラスコト往々アリ、玆ニ記ス処珍シトセシ)少々有之ヨシ(但其節着候服也)故、拙老夫ハ脇下ノ毛ニテ無之哉ト申笑候処、脇ノ下ニ夫毛ナキ程ノ子供等ノ袖中ニモ有之ヨシ(ニツ着シ候其合ニ有之由)、伊勢ノ神馬ノ毛トモ申、鹿島神馬ノ毛ト申候由、実ニ左様ニモ候ハハ、有志ノ人杯ハ助ケ可申候処、如何イタシ候者カ乍序御一笑迄ニ御咄申候、誰ソ其節ノ着服ノ袖ノ内、御見セ可被成候

二二の九
又別紙ニテ

昨夜被下候御書モ、直ニ一覽仕候、扱先々被遣候御書、引カヘ候様ニトノ御事故、則返上仕候、乍然朱ヲ付候段ハ、御海恕可被下候、

二二の一〇
又御別紙ニテ

又御内々申候、或人曰、松家松前候ヲ云ハ何モ是ト申罪狀無之候ニ、土地ガヘ抔如何哉、仙臺抔組シ候ハ、不容易云々申者モ有之候得共、夷狄ケ様ニ船ヲ寄候様相成候モ、畢竟ハ松家ニテ 公辺ヘカクシ、内交イタシ候義ニテ、日本ノ模様分リ候故、魯夷ニテ墨夷ヲ手先ニイタシ候テ、船ヲ寄候ニ可有之、其節打払ニ相成候得ハ、タトヘ一度ハ騒候トモ、諸夷来間敷候処、御仁恵ノ事ニ成行候故、諸夷来候様相成

候義、且又松家自分領分ノコラス魯ニテ館ヲ拵候ニ

モ不心付、石炭山開候ニモ不心付候段ハ、其罪重ク、又乍存 公辺ヘモ不屈候ハ、尚々ノ事ト存候、先年蝦夷騒動ハ、全ク蝦夷ト日本ノ商人位ノケンカ、此度ノ義ニ比候得ハ、何程カ軽ク候処、夫サヘ土地ガヘニ相成候上ニ、此度土地カヘニ相成候テ、松前奉行ニテモ御立ニ相成候ハ、相当ノ義ト存候、尚又松家上ニテ右新城ヘ籠リ云々抔申ス事ニ候ハ、尚更夫ヲ恐レテ、所換無之程ニテハ、以来大名ハ皆左様可相成ト存候、又仙臺抔右様之松家ヘ組シ候儀ハ、有之間敷ト拙老ハ存候処、尚又御賢考御内々御聞申御聞カセ可被下候昨候、直ニ御火中(先是築城ノ許可アリタリ、故ニ新城云々ト記サレタリ)

二二の二
十一月八日、福山候ヨリ御答書、左之通、

密翰啓上候、寒暖不同ニ候得共、被為揃愈御勇猛被為渡奉恭悦候、陳ハ此程之御書面、少々覺宛心認認替被遣、慥ニ落手、得ト熟覽仕相心得居、備中殿ヨリ評議モ有之候付、申談可申ト存候、則過日被遣候御書面ハ、仰之通御戻シ申上候間、落手可被成候、此程

ハ何ヨリ之品被下難有、早速打寄拜味仕候事ニ御座候、毎々御懇切ニ御尋問被成下、万々奉謝候、此節〔佐助カ〕ハ仮居、朝夕ハ山中故、別テ寒威モ敵敷覚申候処、拜戴ノ品小生初一同打寄拜味、思召相届不浅々々奉謝候、右貴答申上度如此御座候、早々謹言、

十一月九日

二伸、時氣御厭專要奉存候、取込早々已上、お諚事追々手痛宜方故、御安心可被成下候、已上、

〔昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂〕

二二三 齊彬公福井侯ニ密書ヲ示ス〔昨夢紀事抄〕

二二三の二
十一月十一日、薩州様御出之節、御内々御持參為御見之〔島津齊彬宛阿都正弘密書〕
御密書、左之通、

極密呈寸簡候、追々寒威相増申候得共、倍御安静賀候、陳ハ其後ハ大御不音打過背本意候、御同然仮住居大地震万端不都合ニテ御察申上候、兼々御懇意ニ付、後仮宅後飯宅別段申入候外之儀ニ無之、松越前守儀、此節柄甚心配ニテ、品々存意認取、小生へ相談故、少々存意之趣申遣、幸堀田備中守儀ハ、同人懇意ニ付同所へ差出候様申遣置候間、定テ同所へ差出候事ト存候、右ニ付心配イタシ候ハ、同人存意、此節柄万緒心配申

出シ候段ハ、随分尤ノ事ニ候得共、中ニハ理屈計リニテ、俗ニ申出来ナイ相談ト申事モ多有之、実ハ同人家来ノ内右之儀ヲ主張イタシ、同人へ相進メ候哉ト存シ申候、同人モ御承知之通〔ト向カテ〕十ヶ向之仁物故、一概ニ申立候様ニ相成、万一不都合ノ事共出来候テハ、如何ト心痛イタシ候、右ニ付テハ、定テ貴君へハ、内々御相談モ可申哉ト存候間、程能同人ノ不為ニ不相成様御教諭奉希候、尤小生ヨリ貴君へ御文通ハ誠之別格、兼々不少内外御咄モ申候事故、有之俣申達置候間、此儀ハ御内々之事故、厚御心得置可被成下候、若々外同列共万一如何様ノ不都合出来候テハト近親之儀深致懸念候間、此儀ハ貴君へ内御頼申入置候、不惡御汲分ケ可被成下候、当時不容易御時節海防之儀モ有之、天災モ打繼候事、必戦之理屈ハ至極同意之訳ニハ候得共、広ク世界之有様ヲ考候テハ、差向キ金銀融通方等ヲ初、人々一ト度安心之場ニ赴キ不申候テハ、何事モ出来不申、此処モ肝心ト存候間、苦心イタシ居候事ニ御座候、兎角学者理屈而已ニテハ、困苦イタシ申候、何モ用事ノミ早々御覽後御火中可被成下候、已上、

十一月六日燈下認、

尚々、時下御厭專要奉存候、山之手ノ寒氣強一ニ当惑、御一笑可被成下候、早々不備、是書 御覽後御丙丁可被成候、

〔阿部正弘・老中〕
伊勢守

〔島津齊彬〕
薩摩守様

極内用

這ノ書ヲ慶永公ニ内示セラレタルハ、同公ト御示合アリテノコトナリシト第十、卷中ニ記スル処ト、参看了スヘシ、

二二二の二
十一月十一日、〔徳川慶親〕田安中納言様ヨリ御返書之内、

扱ハ御別紙之趣、委曲展誦、都テ難被成御指置御場所ニハ御当惑之段、御尤至極御察申候ニ付、過日健次郎へ申談、取計候様申付置候間、左様御承知可被成候、

二二二の三
十一月二十六日、〔徳川慶親〕尾州様ヨリ御書通、

其後ハ御不音打過候、先以弥御安康抔賀之至存候、然ハ当地ニテモ無異消光罷在候間、御放情可被成下候、扱今般ハ未曾有ノ強地震相発、誠以拙家等大破

損ニテ、夫故ニ隔地用向意外ニ有之、多忙取込、御疎闊打過多罪此事ニ御座候、貴家ハ如何候哉、追々世上ノ様子承り候得ハ、夥シキ事ニテ御逐思申候、〔徳カ〕按年天災地妖打重リ、誠ニ以テ諸侯伯モ困弊ヲ生シ、言語ニ絶候次第ニ有之候、拙家之義ハ世上ニ比シ候テハ、輕キ方ニ候得共、御承知之通ノ窮迫ノ上ノ事、且弊邑ニテハ、先般ノ洪破〔破カ〕ニテ人民ヲ損シ、兩地ノ入費莫大ニ有之、殆当惑之至リニ候、水老人へモ文通致候処、是ハ別テ不容易破損、其上誠忠ノ良直〔直カ〕即死ノ由、誠驚入候、為天下此良直〔直カ〕如何セントノ場合、於拙モ愁傷之至リニ有之候、付テハ貴家ニテハ死傷モ如何候哉、甚此段御按思申入候、例之御腹心者無事ニ候哉、承り度候、其上外異ノ事モ差加リ、危窮存亡之秋トハ、実ニ此節ト被存候、今更申モ愚ナル義ト存候、最早凶年ノ循環モ難計、毎事心痛之事トモニ有之候、方今都下ノ形勢〔天下ノ形勢并邊境侯國之動靜〕上下遠近侯國之動靜、加之三港〔横濱・函館・長崎〕外異ノ事情等、惣テ御見聞之廉々窃ニ承知致度、乍御筆旁猶又伺置度存候、先ハ強震ニ付、御安否承知致度如此候也、

十一月

御副簡申入候、過日ハ何寄之品御惠投忝存候、此鴨

些少ニ候得共、野外放鷹提銅致候間、進呈致候、御

笑味有之候ハ、本懐之至リニ存候、頓首、

二二三の四
十一月二十八日、

当春已来異船之情状、將近比之烈震ト云ヒ、天下ノ

安危ニモナルヘキ秋ト思召セハ、前ニモ記スル如ク、

追々御国評ニモ及ハセラレ、幕府之御為筋ト思召

籠ラレタル御事共、水府老公ヘモ福山侯ヘモ御相談

アリテ、佐倉侯迄御建白アラセラレシニ、福山侯モ

公ノ御正論ヲ曲ケ玉フヘクモアラネト、又行ハルヘ

シトテオホサヌニヤ、薩侯齊彬ヲ以テ御諷諭之御次

第等、御失望之限リニハ座セト、猶思召シ屈シ玉フ

ヘクモアラセラレス、夫ニツケテモ、

幕府之御事而已仰セ立ラレテ、御国元ノ事御忍ニナ

リテハ、幕府ヘ対セラレ、仰セ訳ラレモ立セラレ

カタク思召セハ、御国許之事ハ、イヨク御取締リ

ナクテハ、カナウマシトテ(以下本文脱紙)

二二三の五
十一月二十八日、飛脚発ニテ、御家老中へ被遣御書取、

左之通、

御自筆

近年異船類ニ渡来、追々万夷幅濶可致勢、既ニ三夷

ヘハ御条約モ御渡ニ相成候得共、尚測量等之儀及強

願、不容易御時態ハ申迄モ無之処、今般都平下ニ前代未

曾有之烈震、何共騒然恐入候外無之、誠ニ以重嶮之

御時世ニ就テモ、第一可恐ハ外寇之一条ニテ、銘々

一通リノ覚悟ニテハ難相濟ニ付、熟致自省候得ハ、

二百数十年ノ昌平ニ浴シ、櫛風沐雨ノ艱苦ヲ親シク

セス、不覚苟且偷安馴致怠惰之心ヲ以、口ニ必戰ヲ

唱ヘ、致奨励候故、士氣不振、却テ彼是批判、文武

調練等モ不実候儀、体認及求今更悔悟、慚愧之至リ

ニ候、左候テハ

徳川家華胄之甲斐モ無之、

祖宗ヘ奉対、実ニ申訳モ難相立、此天戒ニ応シ、即

今因循偷安之念、断然爰除シ、諸共ニ必戰必死之覚

悟ヲ今日ニ相定、戦地ニ臨ミ遺憾無之様、実践之上

ヨリ相極候儀、当節之急務ト存候、尤政教上万事体

験聊不実無之様、研究勉勵相尽シ候ハ、自然士民

之風習モ一新ハ必ト存候、

公辺モ御同様之事ト奉存、御大事之御時節黙止可罷
在儀ニモ無之候得共、先達テヨリ及国評置候次第、

且地震ニ付熟考之趣、水老公両閣老ヘモ指出候事ニ
候、右ニ付テハ、為天下国家、粉骨碎身相互ニ殊更

可致切瑳儀ニテ、第一此方言行前条相違之儀有之候
ハ、愈無隔意匡救ニ預リ度、其方共ニ不限、役人

共ハ勿論、大身之面々番頭等別テ厚相心得、政事ハ
素ヨリ、文武奨励筋等ニ付、不心服之儀ハ些モ無伏

藏申達、何分相共ニ精力ヲ竭シ候様致度、右之条帰
国之上、委纏可申談候得共、夫迄可捨置儀ニモ無之

候得ハ、先ツ申越候間、是迄迎モ油断ハ無之儀ニ候
得共、尚又諸事右之心得ヲ以テ取計、存寄モ有之候

ハ、早々可申越候也、

右主馬方迄御下ケ、同人ヨリ御国表ヘ相廻候事

二二三の六

一右御同文御自筆ニテ、一冊本多内藏助方ヘ指遣サレ、

右ニ付御書添御別紙、左之通、

別紙愚存之趣披見、篤ト思慮之上同意ニ候ハ、家
来ヘモ相及シ、弥振興候様可被致、其許ニハ國中摸

範ト相成事ニ候間、一際研究有之度、存寄之義モ候

ハ、無伏蔵早々被申越候様致度、尤右別紙之趣、今
度家老共ヘモ申越候事ニ候也、

御華押
水

本多内藏助殿

本多丹波殿

二二三の七

一先達テ水老公ヘ被指越候御建議写シ二冊、是亦内藏助

脱カレ
ヘ被指越、右冊上ニ御朱書写、左之通、

此二冊阿閣内話之義迄モ相認、極密水老公ヘ建言之

事ニ付、其心得ヲ以、父子限リニ内見可被致事、

右両様共主馬方ヘ御下ケ、同人ヨリ御国表ヘ相廻シ、

御国御家老ヨリ府中表ヘ相達候筈之事、

二二三の八

一十二月四日尾州様ヘ御返翰、左之通、

尊翰奉薫誦候、嚴寒之節相成候処、先以倍御勇健被

成御起居奉拝賀候、從此方モ打絶御不音罷過不本意

御座候処、御懇尋被成下、実ニ愧汗之任合奉存候、

如高論今般未曾有ノ強震、騷然之至御座候、当地貴

館モ大破損相成、御心痛御多事之旨奉恐察候、拙家

之儀、御懇尋被成下奉謝候、先ツ格別大破ニモ無之、

外ニ比候テハ輕キ方ニテ、幸甚御座候、乍然神田橋一橋御住居大破、此節指急キ修覆取掛、心配仕居候事御座候、如米示世上一統夥數破壊ニテ、絶言語大變御座候、連年天災地妖、此上大凶逼至候半欵ト、恐懼之至御座候、將如尊命諸侯伯因弊モ弥相極リ、重嶮ノ時ニ相成申候、貴家ニハ先般御領地洪波、加之今度之震災旁御当惑之旨、実ニ奉恭察候次第、御痛心万々ト奉存候、水府老公へモ御文通被成候由、如仰櫛邸不容易破壊ニテ、未仮住露宿同様ト承及、御氣之毒存候事ニ御座候、其上如諭股肱之忠良兩人迄正死、痛惜之至御座候、如何致候儀ニ候哉、為天下大息仕候、拙家ニテハ下輩四五人正死ニテ相濟、此上之仕合御座候、乍憚御降意可被成下候、腹心之者御懇尋是亦奉謝候、依旧無異罷在候、吳々モ恐入候世態ニ相運候儀御座候、扱御尋之条、都下之形勢震後相變事モ無之、破壊之趣ハ稀ニ外出ニ見受候処、不容易儀追々伝承、種々驚入候事共御座候、乍去追々人情モ復常之趣、市街モ相応ニ繁華之模様、何ト改変ノ形勢モ見聞不仕候、遠近国之沙汰是ト申事モ不承、何分今度之變ハ都下ニ限り候儀ト存候、三港

ノ事情近来相替事モ無之、此頃下田へ亜商船来泊、来春ヘルリ渡来之段申聞候由風説ニ候、是モ虚実不稔候、何分今般大變之機會、断然御一新相折候得共、是ト申

命令モ下リ不申候、則先日内々水老公へ相談旁、愚存且地震ニ付テハ陋慮建言、其後伊勢守・備中守へ(録カ)モ同趣内々及建白候得共、彼是先行モ致兼、熱中仕居候事ニ御座候、水老公モ不相替御進退御迷惑之趣ニテ、何共恐入候事ニ御座候、今度之機會、

御一新万々奉企望外無之候、右之他相替候条モ無之候、当節御良考モ被為在候ハ、御垂諭奉希上候、右尊答且時下寒氣御見廻旁如此御座候、謹言、

十二月四日

尚々、寒威倍加折角御保養乍憚奉祈候、本文之通御不音之処、御懇尋被成下、却痛奉感謝候、已上、御副啓奉拜見候、御提銅之鴨一番御患投被成下奉拜戴、不打置拜味、遠路之処御配慮之段、実奉感佩、吳々御礼申上候、扱此海苔不珍候得共、奉進呈候、御笑捨可被成候、頓首、

二二三の九
十二月十三日、水老公ヨリ御返書、左之通、

如垂諭嚴寒御起居佳勝大賀候、柳名産雪魚猷余之由
ニテ、忝令嘉風候、（納心） 寵物報好意候也、

十二月十日、（三編）

二白、時氣御厭專一ニ候、居宅修復モ不行届候得共、
夫九日仮ニ引移、皆無事ニ候、御降心可給候、不
一、

御副書ニテ、過日ノ御書之事云々被仰越候得共、今
以何之香氣モ、サラニ拙老ヘハ及不申、右故摸様モ
不相分候故、有体申進候、

一蝦夷之儀、松前奉行先年サヘ御立ニ相成候得ハ、先
ツ松前奉行ニテモ、早ク御立ニ相成候得ハ可然ヨシ
追々申候得共、何等之答モ無之、（有之問敷心） 当節ハ如先年賄賂
ヲ取テ、松ヘ力ヲ用候儀ハ闊杯ニハ右申間敷候得共、
是又如此世態ト存候、

一来正月ベルリ相越候ヨシ、御申聞有之候得共、未承
知不仕候、御備向御手厚ニ相成候迄ハ、兎角事出来
不申様夫ノミ相折申候、乍然クレハ騒キ、不来ハユ
ルミ、イツ武備御手厚ニ可相成哉、今以梵鐘之事モ
引上ニ不相成由、此世態ニテハ山門杯（山比叡）ニテ少々ヒ

デラ張候得ハ（内々賄賂ヲ）、先々オタヤカニ杯申事ニテ
止ニ不相成ハ、ヨロシクト被察、心配イタシ候、右鐘
之地銅有之候テサヘ、窮迫之大名大小砲製作候ハ不
容易、マシテ地銅杯買上ニ相成候ハ、尚以武備ハ
出来申間敷候欵、御覽後直ニ御火中、

又曰、弊家潰等致候処モ不少候得共、焼失モ不致、
百中百残り候故、ヤハリ如本ニ可相成摸様、左候得
ハ只々地震タケ入費有之迄ト相成リ申候、焼失モ致
候ハ、何分小ク出来候ハ、後々ノ為ニハ可然候
処、実ニツマラヌ事ニ成行申候、世上一体モ同断ラ
シク相見申候、（云云） クレ〜モ、此後ハ凶作・洪水等カ、
又ハ夷船々々無之候得ハ、ヨロシクト存候、如何ニ
モ人氣改候事無之候、

（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）にて校訂）